
タダシイ冒険の仕方3

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方3

【Nコード】

N7079Q

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

「音を基準にしているんだ、この町は」仲間のエルフはそう語った。——今度の冒険は面白い。単純すぎる依頼だったはずなのに依頼人はちよつとアレだし、モンスターのうろろろする廃坑に潜り込まされるし遭難しかけるし話しが違うじゃない！——新しい仲間もぞろぞろ登場。卵の冒険記三話目です。

魔女っ子、弟子が出来る（前書き）

タダシイ冒険の仕方三話目になります。

魔女っ子、弟子が出来る

それは突然の再会だった。

「お姉さん！」

学園の門を出たところで呼び掛けられ、妹などいないわたしは始めはシカトした。

「リジアお姉さん！」

名前が追加されたことでようやくわたしは声のした方向に振り向く。

「……ミーナ！ミーナじゃない？」

隣りにいるヘクターの腕を突いた。昼下がりのウェリスペルト、学園前の大通りを一人の少女が走り寄ってくる。子供特有の細いさらさらとした金髪が揺れている。先日の冒険で滞在したフェンズリーにある孤児院で出会った魔法使いを目指す少女だ。

「どうしたのよ、こんな所で」

わたしが尋ねるとミーナはうふふ、と笑った。

「わたしね、この町に引越して来たのよ」

引越して……とわたしは不思議に思ったが、すぐにある考えが浮かんだ。つまり彼女は引き取られたのだらう。この町の何処かの夫婦に。

「元気だった？」

ヘクターが聞くとミーナは頬を染め、わたしの後ろに隠れる。

「あれ、嫌われちゃったかな」

ヘクターが苦笑するが、わたしは「違うわよ」と否定した。

「なに照れてるのよ」

「ち、違うもん」

わたしのからかいにミーナはムキになって首を振る。

「何？どうしたの？」

立ち止まるわたし達の様子を見てかローザも寄ってきた。

「フェンズリーで知り合ったお友達よ」

フロロも顔を出す。

「へー、かわいいじゃん。リジアに似てるけど」

「なんでわたしに似てることをマイナス要素みたいに言うのよ……」
わたしが睨むとフロロは口笛を吹き、明後日の方向に目を逸らした。
「サイモンはどうしてるの？」

ミーナに質問してみる。

「な、なんであいつの事聞くのっ」

可愛かったから、と答えたら誤解されそうなので黙っておく。ミーナの顔は真っ赤だ。これは何かあったとみていいのか。わたしがしつつく食い下がろうとした時、アルフレートの声が投げ掛けられた。
「おい、長くなるなら移動してからにしないか」

イルヴァも地べたに座り込んでいる。お腹空いた、と言っているのだ。わたしは思わずローザの顔を見た。

「いいわよ、連れてらっしゃいよ」

太っ腹な返事を聞き、わたしはミーナに尋ねる。

「これからこの人の家に行ってお昼食べるんだけど、どうする？ あなたは平気……」

「行くっ」

皆まで言う前に勢いのいい返事がきた。

久々に会った年下の少女、その目は希望に溢れ、全てを吸収しそうな光に満ちていた。

「うわあ……」

ミーナはローザの家の玄関内を見て感嘆の声をあげる。わたしだって今だに見とれる豪華だがセンスの良いローザ邸。

「ほほほ、さあ早く中に入りましょ」

新鮮な反応が嬉しいのか、ローザもテンションが上がっている。廊下を歩きながらもミーナは感嘆の声をあげ続けていた。わたしはミーナの肩を叩く。

「ねえねえ、で、サイモンは元気なの？」

「だ、だからなんであいつの事はっかり聞くのよ」

ミーナは顔を赤くしながら怒る。

「何なの？サイモンって子は」

ローザが聞いてくる。

「どうせ銀髪の美少年だったりしたんだろ？」

フロロの言葉にわたしはギクリと肩を震わせた。

「あーあ……」

ローザが呆れたように声を漏らすと先に行く。な、何よ！人を単純な人間のようにっ。わたしは前を歩く仲間を睨みつけた。

温室に立ち寄りフローラに挨拶してから食堂に入る。

「お帰りなさいませ、皆様」

メイドのメリッサちゃんがテーブルにフォークを置きつつ出迎えてくれた。ローザの家のお手伝いさんは玄関先まで出迎えてお辞儀をしながら……というような、本で見たことあるようなことはしない。あくまで彼女のうちは聖職者であり権力者ではない、というお父様の主義によるものらしい。学園長なんて十分権力者だと思うのだが。

「お昼、この子の分追加お願い」

ローザがケープを脱ぎつつメリッサに頼んだ。

「あら、可愛いしいお客様なこと」

メリッサは目を細める。

「お昼ご飯いただけるの？いいの？」

ミーナがおずおずと尋ねてきた。

「大丈夫、大丈夫、気にしないでいいから」

わたしが手を振り、ローザも頷いている。ミーナははにかんだ笑顔を見せつつ、わたしの隣りに腰掛けた。

「で、いつ越して来たの？」

根菜のスープを啜りながらわたしはミーナに尋ねた。

「昨日」

「きのう!？」

「だって早くお姉さんに会いたかったから」

う、嬉しいことを言ってくれる。

「引越しはご両親の都合か何か？」

にこやかに聞くローザをわたしは手で制した。説明しなかったわたしが悪いが、その質問はちとまずい。しかしミーナはふふっ、と笑うと、

「お父さんとお母さんが出来たから越してきたの。わたし、フェンズリーの孤児院育ちだから」

あくまで明るく答えた。

「あらあ……ごめんなさいね、知らないで……」

「ううん、いいんだよ、お父さんとお母さんが出来ることは嬉しいことなんだから」

ミーナの言葉は本音のようだった。ということは引き取り先はいい家庭なのだろう。わたしはマザーターニアの顔を思い出し、そっと胸を撫で下ろした。

「孤児院ってあれか？バクスター家が援助してるってやつ」

アルフレートは前回の冒険で知り合った旧貴族の青年の名前を出した。

「そう、フロー神の教会にあって、マザーターニアってシスターがこの子達の面倒見てたのよ」

わたしが答えるとローザが食いついてくる。

「えっ、じゃああなたもフロー神の信者なの？」

ミーナは首を振った。

「ううん、信者では無いんだって。でも毎日お祈りしてたよ。口上も言えるし……」

「まあまあ！いい子じゃないの」

鶏肉の刺さったフォークを振り回すローザ。こういう感覚、無信仰者のわたしにはわかんないんだよなあ。

「バクスターの家の人達は どうしてるかわかる？」

ヘクターが聞くとミーナは一瞬躊躇したようになる。

「……マルコムさんの奥さんのお葬式があつて皆泣いてた。そのあと、大人たちは何か騒いでたけど……教えて貰えなかったの」

マルコムが決意していた全ての真実の発表のことだろう。そりゃ町の実力者の家で嫁さんが悪魔召喚してました、なんて洒落になんないよなあ、とわたしは町の混乱を想像した。

「あ、そうだ、アンナは？まだフェンズリーにいるの？」

わたしの質問にミーナは頷く。

「いるよ。お葬式あとから教会のお手伝いに来てるの。なんかお父さんに『カンドー』されちゃったんだって。始め、感動されたのになんで寂しそうなんだろう、って思ったら意味が違うんだってね」

わたしたちは思わず顔を見合わせた。

「……ま、しょうがないんじゃないか？考えようによつてはマルコムの屋敷に居座る理由も出来たと思えるし」

とアルフレート。確かに……そうかもしれないけど、何かなあ……。わたしは前回の冒険が後味悪いものになってしまったことに落胆してしまった。

「それにしても意外でしたね、リジアがこんなに子供に懐かれるなんて」

イルヴァが口をもぐもぐしながら言う。

「そ、そりゃあ魔法披露してあげたもん。ね、ミーナ？」

わたしの言葉にフロロが目を見開いた。

「リジアが魔法を披露！？」

「どうせ『ライト』とかだろ」

アルフレートが冷たく言い放つ。……どうしてこうもバレバレなんだろうか。

「ライトだつて立派な魔法じゃないのよ……」

「そのことをお願いがあるんだけど」

わたしの言葉を遮り、ミーナがわたしの方に向き直った。

「な、何？改まっちゃって」

少し慌てるわたし。ミーナはわたしの手をがしつと掴んだ。

「お姉さんの弟子にして欲しいの！」

一瞬の妙な間の後、

「えええええええつ！？」

わたしは絶叫をあげる。

「で、弟子って、意味わかってる！？リジアを師匠として敬い崇めるって意味よっ？」

「それは言い過ぎじゃない？ローザちゃん……」

ローザに突っ込んだ後、わたしはミーナと顔を合わせた。

「……どうしたのよ、学園に入れば、って話しはしたはずじゃない」
「だってあと二年も先なのよ？」

ミーナが口を尖らせた。学園に入るのは十二歳になる年から決められている。これは戦士系のクラスを目指すには、それ未満であれば体が未発達で力不足という理由からで、魔術師系を目指すには、ぶっちゃけ理論を教わっても理解出来ない、頭に入らないからだったりする。するとミーナは今年十歳ということか。

「しかも魔法が習えるのは一年経ってからだもんねえ……」

ローザが溜息ついた。

そうなのだ。魔術師系のクラスでは始めの一年はみっちり世界情勢やら言語学やらの知識を叩きこまれる。これは魔術師がパーティーにおけるセージ（知識人）の役割を担うことが多いからだ。まずこの初年で脱落者が多く出る。入学時に半々の割合だった戦士系クラスと魔術師系クラスがわたしの五期生では3対1ぐらいの割合になっているのだ。

わたしも入学前から魔法の出てくるような本を読み漁ったりしたから気持ちは分かるが……。

「何か焦ってない？」そう言おうかと口を開きかけた時、

「いいじゃないか」

アルフレートがにやにやとしながら発言した。

「リジアにも良い復習になる、人に物を教えるっていうのはそういうことだ」

偉そうな言葉だが、いくらなんでも入学前の子供に教える範囲のことがわたしの復習になるとも思えない。

「それは無いんじゃない？リジアはほら、頭でつかちだから」

ローザが笑いながら言った。頭でつかちとは大した腕前も無いのに知識だけは立派というわたしへの周りからの評価である。

「最近はどうでもないもん」

わたしは頬を膨らました。

「可哀相じゃないか。せつかく無いに等しい人望で慕ってきてくれた子供を追い返すなんて。丁度我々は暇なことだし」

アルフレートの嫌味満載の台詞にわたしは嫌な汗をかく。まだ根に持ってるのかよ。わたしは心の中で舌打ちした。

実は今、わたしたちは『クエスト待ち』の状況にある。別に依頼を選ばないのであれば常時受諾可能なものはいっぱいある。しかし、わたしたちは話し合いで『どうせなら行きたい所に行く方がいいよね』となって、次の目的地は音楽の都バンダレンにしようと考えていたのだ。バンダレンはウエリスペルトからそう遠くないし、バンダレン行きの依頼もちよくちよくある。そんなもんだから教官に『バンダレン行きの話しが着たら優先的によろしく』と一言伝えておけば済む話だった。

それをすっかり忘れたのがわたしなのだ。オツケーオツケー、なんて安請け合いましたわりにころっと忘れちゃったのである。気づいた時にはすでに他のパーティーが旅立った後だった。首都行きぐらいレアな話なら他で妥協しているところだが、バンダレン行きはそんなに無い話じゃないし、アルフレートの強い希望もあって暫くは学園通いに決めたところだった。

「……まあ暇なときに簡単に教えるぐらいでいいなら」
わたしが渋々言うのと、ミーナの顔がぱつと明るくなった。

「ありがとう、お姉さん！」

そんな風に言われると悪い気分ではない。

「いいのよ、大したことじゃないわ」

わたしはミーナの頭を撫でる。

「明らかに最初はめんどくさがってましたよね」

「だよな」

イルヴァとフロロの言葉は聞き流すことにする。

「早く魔法を習いたい、って気持ちはわかるけど、どうしてリジアに弟子入りなんて考えたの？」

ローザはあくまで不思議そうだ。ミーナは手に持っていたスプーンを置いた。

「リジアお姉さんには『本をたくさん読むといい』って言われてたんだけど、……本が欲しいってお父さんとお母さんには悪くて言えなくて。フェンズリーには図書館があつたのにこっちに来たら遠いところにしかないし、魔術書が置いてあるようなところには入れて貰えなかつたし……」

学園にも図書館はあるが、あくまで学生のためのもので部外者は入れない。常時門が開けっ放しのプラティニ学園だが、意外と侵入は難しいらしい。なんでも感知系魔法に強い教官が常にセンサーを張り巡らせている、との話しだが……。少々疑わしい。魔術師ギルドは学園より貴重な書物が多いので部外者、ましてや子供が入るなんて以つての外だ。それよりも新しく出来た両親には要望は伝え難いというミーナの気持ちに、わたしは切なくなってしまった。良い人だからこそ我が儘が言いにくい、そんな気持ちなのかもしれないが、やっぱり普通の家庭の子供とは感覚が違うのだろう。いい子過ぎて泣けてくる。

「図書館が遠いって言ってたわよね。ミーナの家はどの辺なの？」
わたしはミーナに尋ねる。

「ここから近いよ」

ミーナが通りの名前を言うとアルフレートの肩がぴくりと動いた。

……まさかご近所さんだったりする？

「うちと学園挟んで反対側ね。近いじゃない。……ってことは確かに図書館は遠いわね」

ローザが顎に手を当て言った。図書館は町の西側だ。子供の足では遠いだろう。

「いいわ、あたしが場所を提供してあげる。この家に通えばいいわよ。リジアもどうせ毎日来るんだし」

ローザの提案にミーナは目を見開いた。

「いいの？」

「ローザに遠慮は要らないのよ」

わたしが代わりに返事する。

「そのかわり、あんたたちは邪魔しないのよ」
ローザは残りのメンバーを指差した。

次の日の午後からさっそく、わたしはミーナに授業を開始する。場所はローザのお宅の司書室。今は特に誰も使っていないらしい部屋なのだが、広いし本はやら並んでるし机も豪華だし、金持ちの考えることはどうもわからない。なぜ使っていない部屋がこんなに綺麗なのか。まあ、使っていない部屋がある時点で普通じゃないけど。

わたしは可愛いピンクのワンピース姿のミーナを見て、思わず顔がにやける。新しい母親がミーナの『先生に魔法を習いに行く』という言葉聞いて、着せてくれたのだと言った。別におめかしされる程こっちは大した存在ではないのだが、ミーナの母となった人の優しさが垣間見れて嬉しかった。

「さあ、ミーナ！授業を始めるわよ」

「はいっ、お姉さん！」

わたしと向かい合わせに座るミーナが背筋をぴんっと伸ばした。

「その前に、わたしへの呼び方を変えてもらっわ」

「はいっ！おね……」

ミーナは慌てて口を手で抑える。

「そう、そのお姉さんってやつね。それだと少しやりづらいものがあるから……。『リジア』でいいわ」

「えっ、でも……」

「わたしがやりやすいのがそういう呼ばれ方なの。わかった？」

わたしが言っと、ミーナは嬉しそうに微笑んだ。

「はいっ！リジア」

照れたような嬉しそうな顔を見てわたしもくすぐったい気分になってしまった。軌道修正しつつ話しを続けることにする。

「じゃあ簡単にだけど、わたしが出来る範囲でミーナに『魔法とは？』ってことを教えていくわ。……ああ、あと確認しておくけどミ

「ミナは学園に入ったらどのクラスを目指すつもりなの？」

「ミナは間髪入れずに答える。」

「リジアと同じ、ソーサラークラスっ」

手はあげなくてよろしい、と言うとミナは頬を赤くしながら手を膝に戻した。

「そう、でも念のために学園でのクラス分けを教えておいてあげる。大きく分けて三つから成ってるのよ」わたしは指を折っていく。

「まずはわたしが所属しているソーサラークラスが含まれる『魔術師系クラス』に、ヘクターとかイルヴァがいる『戦士系クラス』。

あともう一つが『技術師系』」

「技術師？」

ミナの問いにわたしは頷いた。

「一番人数が多いのがシーフね。盗賊って特殊技能をいっぱい身につけてるイメージあるでしょ？そういう非戦闘能力を扱う人たちが集まるクラスよ。ただ今でも盗賊ギルドなんかは力が強いから、学園には入学しないシーフは多いみたい。うちに来てるシーフの人達も『学びに来てる』っていうより『遊び半分、情報収集半分』って感じみたいね」

へー、っとミナは感心気に呟いた。

「他のクラスの話はこのくらいにしておいて、魔術師系クラスはソーサラーもプリーストも全部、三年間はひとまとめになってるのよ。三年間は『魔術師クラス』として一緒にたに授業を受けるわけ。その間に自分には何が向いているかを判断しても良いしね。ようするに始めの三年間は広く浅く魔法について教わっていくのよ」

「なんだか大変そう」

ミナが不安げに呟いた。

「興味ない分野は触れたくない、ってタイプにはね。考えようによつては楽しい期間よ。どの分野も『へー、面白いな』って思える丁度良い範囲だけつまみ食いさせてくれるから」

「じゃありジアもプリーストとかシスターたちが使うような魔法も

使えるのね！」

マザーターニアの仕事を見てきたからか、ミーナは目を輝かせて聞いてきた。……痛いところを突いてくれる。自慢じゃないがわたしは回復系の魔法はからきし駄目だ。教官から「ここまで攻撃系に特化したタイプもめずらしい」と言われたほどだ。

「ま、まあ実際はローザちゃんみたいな本職がいれば、ね。クラス分けは4期生からになるんだけど、ここで問題なのが『魔法が使える戦士』や『前衛で戦える神官』なんて万能タイプを目指したい場合なのよ」

「魔法剣士とかのことね？本でなんかはいっぱい出てくるわ」

「そういう物語の勇者さまに憧れてとにかく万能な力を目指す、って人もいるし、ただ単にゆくゆくは一人旅がしたいから、って人もいるしね。そういう場合に重要になってくるのが『選択授業』なのよ」

ミーナのためにわかりやすく例をあげていく。

「ソーサリー系の魔法を使える戦士ならソーサリークラスに入って選択授業で肉弾戦の指導を受けるとか、逆に入学から3年間はファイタークラスでがんばって4期から選択で魔法の授業受ける、とかね。そういう場合はとにかく大変だけど」

そもそもプラティニ学園の教育理念が『天才』を作り出すのではなく、数多くの冒険者を生み出すことに重きをおいている。教官からもその道の専門家を目指すように勧められるし、実際、両刀使いのタイプにならわたしも魔法の部門では負けない自信がある。例えば一年先輩だとしても、だ。

「普通は選択授業にはソーサリーだったら『もうちょっと深く精霊魔法が学びたい』とか『防御系に特化したいから白魔法を取ろう』とかいう使い方するんだけどね」

「リジアはどうしてるの？」

「わたし？いまは『古代語魔法』と『世界史』取ってるわよ」

「せ、世界史？どういう風に役立つの？」

ぎくり、とわたしは肩を震わせる。なかなか鋭いところを突いてくる子だ。正直言っちゃえば趣味だから、なだけだし。知識を披露しようにも本当に『生き字引』なアルフレートがいるしなあ。

「世界に関する知識を身につけるのも魔法使いには重要なのよ」
きりり、と言うとミーナは納得したようだ。

「じゃあ学園の話はこのくらいにしておいて、本題に入ろうか。ミーナは魔法ってどのくらい種類があるか知ってる？」

ミーナは「えっと」と言いながら指を折っていく。

「黒魔術白魔術、古代語魔法、精霊魔法……あ、あと神聖魔法だ。五種類？」

「惜しいつ。六種類が大体基本になってるわ。今のにプラスして召喚魔法を覚えてね」

ミーナは熱心に持参したノートに書き込んでいった。

「じゃあ次は各魔法の説明をします」

「はいっ」

「さっき挙げた六種類の魔法を更に大きく二つに分けることが出来るんだけど、どんな理由で分けるのでしょうか？」

うーん、と唸るミーナ。

「回復魔法と攻撃魔法？」

「その分け方も間違っていないわよ。でもそれだと精霊魔法には回復魔法もあるし攻撃魔法もあるわね。さっき挙げた六種類をきっちり分けられるものよ」

わたしがあげた問いにミーナの頭から湯気が出そうな様子を見て、答えを出してやる。

「正解は『マナの力を使うもの』と『他者の力を使うもの』よ」

わたしはミーナの前で両手を広げた。

「今、この空間にも無数に漂っているのがマナ。古代人が『万物の力』と呼んだ力の粒子よ。これを利用するのが黒魔術白魔術、古代語魔法」

「マナって何なの？精霊？」

ミーナの質問に一瞬わたしは言葉に詰まる。

「……それは今でもわからないことなの。古代人も紐解けなかった謎

ね。だから『魔法』なのよ」

ミーナは「ふーん」と言いながらも首を傾げた。
「他者の力を借りる魔法はわかりやすいわね。精霊魔法なら精霊の力を借りるし、神聖魔法なら神々の力を借りて行使するわけ。召喚魔法は厳密にいうとそれらと被るんだけど、この世のもの成らざるものを……」

わたしが言いかけた時だった。

「お茶にしない？」

ローザが扉から顔を覗かせる。ミーナは名残惜しげにノートを摩ったが、わたしの顔を見て頷いた。

「バンドレン行きが決まったよ」

先程まで学園にいたヘクターが言った言葉にわたし達は色めき立つ。

「えっ本当に？」

ローザが聞くとヘクターは頷いた。

「明日、依頼人に会いに行けってさ」

「どんな内容だ？」

アルフレートが本を置きながら問い掛ける。

「バンドレンの楽器屋まで依頼人が発注した楽器を取りに行くんだってさ。まあようするにお使いだね」

「へー、でもいいんじゃない？バンドレンに行ってみたかっただけなんだし」

フロロが金属の塊にネジ回しを突き刺しながら感想を漏らした。

「……明日からいなくなっちゃうの？」

ミーナの寂し気な声にわたしは彼女の頭をそつと撫でる。

「お土産、何がいい？」

わたしが聞くとミーナは「いいよ、そんな」と首を振った。

「じゃあそのかわりあたし達がいけない間、家に来てフローラの面倒みてよ」

ローザが提案した。フローラはまだ連れ回すには早いと判断したのだろう。それにミーナがわたし達がいない間もこの家に通う良い理由付けになる。

「うちに来れば本もあるし、魔術書も多少揃ってるわよ」

「ありがとう」

ローザの言わんことがわかったのかミーナは興奮気味に礼を言う。

わたしは出来たばかりの一番弟子の熱心さに満足し、シフォンケーキを頬張った。

「……この時期に楽器を発注か。嫌な予感がするな」
アルフレートが呟く。

「なにそれ、なんで？」

わたしが聞くとアルフレートは「いや、別に」と言っただけで黙ってしまう。嫌なエルフ。

「じゃあミーナ、いきなり自習になっちゃうけど頑張ってね」

わたしはミーナの肩を叩いた。

「うん。そういう約束だったんだし、リジアも頑張っただけ」

笑顔を見せるミーナ。わたしはミーナに土産話をするのを、早くも楽しみになってきた。

夕闇に染まりつつある町に出て、皆と別れる。わたしとヘクターはバスに乗る為に学園の裏口まで戻って来た。

「リジア、ちよつと待っててくれない？」

ヘクターからの申し出にわたしはきょとんとしてしまう。

「いいけど、どうしたの？」

「明日依頼人に持っていく書類がまだ出来てないんで、夕方もう一度来るように教官から言われてるんだ」

あらら、教官もいい加減だな。と思いながら私は頷いた。

「わかった。待ってるよ」

わたしの返事を聞き、ヘクターは申し訳なさそうに裏口に入ってい

った。ヘクターが悪いわけじゃないのにな。あの人の良さはどこから生まれたのだろう。

夕闇の赤に染まる学園の校舎は綺麗だ。白を基調としているからだろう。いまだまばらに残る生徒の影を何の気無しに眺めていた。ふと、背後に生まれる人の気配。わたしはバス待ちの人かと思いベンチを立とうとする。相手の顔を見て少し戸惑った。見覚えのある顔だったからだ。染め物かどうかわからないが目立つ緑の髪に鋭い目つき、背は高いがひよろりとした体つきのその人物はわたしの顔を見ている。

「あんたがリジア？」

唐突にされた質問にわたしは一瞬言葉に詰まった。

「……そうだけど」

わたしの答えを聞くと相手は嬉しそうに口元を上げた後、腰に刺した細身の曲刀を鞘から出したり引つ込めたりを繰り返し、がちゃがちゃとした音を道路に響かせる。……こえーよ。

「へえ、そつか。なんだ、噂に聞くより可愛いじゃん」

わたしは褒められたことより、噂の内容が気になって素直に喜べない。

「俺は学園のファイタークラスにいるアントンだ」

「ああ……」

やっぱり学園の人か。見覚えがあるはずだ。

「あんたら今度、バンダレンに行くんだろ？」

「はあ……」

いきなり何だろうか。相手の不躰な態度にもイライラするが、相変わらずがちゃがちゃとうるさい手元が気になってしょうがない。

「不運だったな。きつと今回は上手くないぜ」

「はあ……。……はああああ！？」

生返事でやり過ぎそうと思ったが、アントンの失礼さに声が荒れてしまった。何なの、この人。

「あんた魔術師としての腕前は酷いんだってな。俺の仲間が言って

たぜ。あとつつも変な格好の女いるだろ？」

アントンの言葉と彼の剣柄の擦り合う音が、わたしの頭を掻き回す。頭に血が上り過ぎて大事な血管が切れるんじゃないかと思った時だった。

横から伸びた手がアントンの剣柄を握る腕を掴む。耳障りな音が止んだ。

「……くそ」

アントンが自らの腕の動きを止めた相手を睨み対する。

「本当に嫌な奴だな、あんた」

ヘクターを睨むアントンの言葉は氷のようだった。わたしは初めて味わう空気に足下が重いような感覚がした。

「離せよ」

気配を感じずに近寄られたことが悔しいのか、アントンは噛み付くようにヘクターに言い放つ。

「……まずは柄から手を離せ。それがどういう行為かわかってるのか？」

ヘクターの声にわたしは手が冷たくなった。初めて聞く彼の怒りの口調。表情もわたしが見たことのないものだった。

「へええ、この子はあるたの何なの？珍しくキレてるね」

「無防備な相手の前でやることじゃないからだ。お前を同じ戦士とは思いたくない」

二人が睨み合う時間は随分と長く感じられた。わたしは息苦しくなってしまう。アントンの手が柄から離れた。ヘクターの手の力が緩んだ瞬間、アントンはばつ、と腕を振り払う。

「……やっぱリム力つくな、あんたは」

アントンが吐き捨てる。が、すぐににやりと口角を上げた。

「まあいいや。あんたの弱いところがわかった気がするしな。……」

またな、リジア」

アントンがわたしに手を上げるが、わたしは顔を背けてしまった。とてもじゃないが仲良くする気にはなれない。それでもアントンは

笑みを崩さぬまま踵を返す。学園内に戻っていくところを見ると、わざわざ今の騒ぎを起こしにやって来たということだ。

「大丈夫だった？」

ヘクターはいつもの口調に戻っていた。少し気まずそうなのは気のせいだろうか。

「うん、何か……変わった人だね」

『ムカつく奴』と言いたかったが、ヘクターが気にしそうで止めた。そういう人だからだ。

バスの中、長い沈黙に戸惑いつつわたしは聞いてみた。

「アントンって、どういう人なの？」

ヘクターは座席の手摺りにほお杖をつき、考える姿勢のままだ。

「まあ、ちよつと……」

歯切れが悪い。その後の言葉は続かない。……気になる。ヘクターに嫌悪を現にする相手にも驚いたが、それ以上にヘクターの様子に戸惑ってしまった。何て声を掛けるべきか。「合わない人っているよね」「犬猿の仲ってやつ？」など頭に浮かんだが止めた。どうも安っぽい。

ぽんぽん、とヘクターが頭を撫でてきた。……嬉しいけどどうもごまかされている気がしてしょうがない。

翌朝、わたしは一人学園の校舎にいた。残りのメンバーは依頼人に会いに行っているが、「レポートの提出がある」と適当なことを言っただけだ。探す人物はファイタークラスにいる為、不慣れた場所に入るのは勇気がいったが恐る恐る足を進める。すれ違う生徒とやたら目が合うのはやっぱり部外者然としているからか。自分でもやたら挙動不審で怪しいなと思いつつうろついていると、目的の彼の姿を見つけた。赤毛のクリスピアンくんである。都合よく一人でいるところを突撃することにする。

教室の前で窓から身を乗り出し、ぼんやりと外を眺めるクリスピアンの背後までそろりそろりと忍び寄り、両手で彼の目を隠す。

「だーれだ？」

甘い声で囁くと、クリスピアンはふっ、と口元に笑みを作った。

「んー？キーラだろ？」

わたしの手を取り、ゆっくり振り向くクリスピアン。わたしのにや顔を見たのか彼の顔が引き攣った。

「うお！びっくりした！」

「キーラじゃなくて残念ね。ほほほ」

キーラとはわたしのクラスメイトの美人さん。クリスピアンとは同じパーティーを組んでいる。焦りを見せていたクリスピアンが一瞬にして悟りを開いたように冷静な顔に変わった。

「……よく考えたらキーラがこんなことするわけないな……」

わたしもそう思う。と思ったが口にはしないでおいた。

「どうしたの？わざわざこんな所まで」

わたしは辺りを伺ったあと、クリスピアンの腕を取る。

「ちよつと来て」

「お、おい」

人気の少ない廊下の突き当たりまで来ると腕を放し、向き直った。

「ちょっと聞きたいことがあるのよ」

わたしの言葉にクリスピアンは頭を掻きつつもワクワクとした様子が顔に滲み出ている。

「何、なに？男がしてもらったら嬉しいことは、とか？」

「違うわよ……」

自分がそうだからって人を年がら年中、恋愛観ばかり考えていると思わないで欲しい。

「アントンって人知ってる？」

クリスピアンは少しきよんとする。

「アントンって……緑色の頭の奴？同じクラスだけど」ということはヘクターともクラスメイトということだ。

「何、あいつ何かしたの？」

真顔に戻るクリスピアン。彼の言葉といい、顔の表情といいアントンが普段からどんな人物なのか、少し伺えた気がする。わたしはどこから話そうか、と頭を捏ねくり回した後、昨日の夕方の出来事を一から順に話してみた。

「で、珍しく機嫌が悪くなっちゃったヘクターを見て動揺しちゃったわけだ？」

わたしの話を聞き終わったクリスピアンはそう言ってわたしの顔を覗き込んだ。言い方には不満はあるものの、わたしは頷く。クリスピアンは大きくため息をつくと腕を組んで考え込んだ。

「……実は俺もアントンがなんであいつにやたら絡むのか謎なんだよね」

「じゃあ普段からなんだ？」

わたしの問いにクリスピアンは頷く。

「過剰なライバル視っていうのかな……、顔を見れば突っ掛かるし、組み手の時間になれば真っ先に相手になろうとしたりね。仲良くなりたいのかと思えば遠征なんかで乱闘戦になったりしても絶対にヘクターには手を貸さなかったり」

ふう、とため息をつく。

「あまりにもあからさまなんで皆引いてる状態だね」

「止めさせたりしないわけ？」

わたしは少しむっとしてしまった。

「『可哀相でしょ！』って？女の子はそういうのあるけど、男は無い無い。アントンが皆を扇動するようなことがあったら問題視するだろうけどさ。まさか餓鬼じゃあるまいし、そんなことは無いよ」
確かに……子供のイジメじゃあるまいに、大騒ぎする方がおかしい気もするけど。

「ヘクターって一言で言えば『いい奴』じゃん？人が良いだけじゃなくて、ちゃんと周りとの悪ノリにも乗ってくれるし、かと思えば天然なところあるし。単なる優等生じゃないから溶け込んでるけど、とことんムカつく奴はいるのかもよ。そりゃあ初めてみる態度にびっくりしちゃうかも知れないけど、俺はあいつの人間らしい面が見れたと思っただけだね」

わたしは昨日のヘクターの顔を思い出していた。そりゃあわたしだってヘクターがいつでも笑顔で完璧な聖人君子だなんて思っただけ……。思っていたのだろうか。無意識のうちに。

「でも、人から嫌われるのって、傷つくよ？」

「だから恋は辛いのだ」

クリスマスから返ってきたとんちんかな答えにわたしは肩を落とした。

「まあ、何かあれば相談のるよ。あんまり俺と仲良くするとあいつがヤキモチ焼いちゃう？あ、それが目的っ？」

「……あんまり調子のるとキーラにばらすわよ」

わたしが言うところ、クリスマスは慌てたように両手を振る。

「ごめんなさい！何をばらすのか全然わかんないけどごめんなさい！」

わたしが話を聞いたことのお礼を言うと、クリスマスは何度も「いえいえ、また何かあったら是非」と繰り返した。

中央校舎正面の時計台を見てわたしは足を速める。依頼人との約束の時間から半刻ほど過ぎているが、今から行けば話しの冒頭からは無理でも参加出来るだろう。幸い依頼人の家は学園裏手の方向すぐらしい。わたしは急ぎ足で裏門を潜った。

暫く教えられた住所に向けて歩いていると、よく知った顔が見えてきた。

「あれ、どうしたの？」

困り顔のヘクターに怒り顔のローザ、無関心顔のアルフレートと何考えてるのかわからないイルヴァ。フロロに至っては路上に座り込んでいる。わたしのかけた声に全員が振り向いた。

「いないんだよ」

アルフレートが冷たく言い放つ。

「はあ？」

わたしは自分でもまぬけだと思っ声を出してしまった。

「家に誰もいないみたいなんだ。隣りに確認したら住所と住民は合ってるらしくて」

ヘクターが丁寧に教えてくれる。ええーとつまり、約束の時間なのに依頼人は出かけてると。

「いい加減な人よね。帰っちゃう？」

ローザがぶりぶりとし怒りながらわたしの肩にもたれかかってきた。帰って……どうするんだろう。教官に報告すればいいのだろうか。

「ドタキャンってこと？ 依頼人側の」

わたしは戸惑いつつ全員に問いかけた。その時、

「すんませ〜んっ」

通りの向こうからまぬけな声が響いてくる。見ると一人の男性が走って来ていた。

「遅れちゃってすんません〜。今、鍵開けますから〜」

どたどたと走ってきたのは小柄な男性。わたしとイルヴァの中間ぐらいの身長だろうか。汚れたハットにぼさぼさの髪で顔が隠れてし

まっついて年齢がいまいち読めない。全体に何と言うか、……汚い。もう温かい季節だというのに分厚いコートを着込み、背中を丸めて家の敷地内に入っていた。指先部分が無い軍手をした両手で、家の扉の鍵を開ける。本当にこの人の家なのか不安になってしまった。家の方はこじんまりしているが素朴な良い家だったからだ。

「どうぞどうぞ、上がってください」

腕を振って誘導されるが、皆で固まってしまふ。

「あれ？違ったの？学園から来た冒険者さんじゃなかったの？」

「あ、ああそうです。プラティニ学園から来ました」

ヘクターが我に返ったのか返事した。

「そうでしょう？見た瞬間わかったものの」

不思議な訛りだ。少しびっくりする見た目だが人は良さそうな感じはする。

「ささ、入って入って！」

言われてわたしたちは戸惑いながらも家の中にお邪魔させてもらう。中も綺麗だ。ただ棚から本がはみ出ていたり、普段は散らかり放題の部屋を急ごしらえて片付けた感が漂っていた。

「パンの安売りに行ってたんですよ、早く行かないと売り切れちゃうから。そしたらいつも買ってる黒糖パンがまだ焼き上がってない、なんて言われちゃって。……あ、座って座って！」

わたしたちは部屋を見回し、適当な椅子に腰掛ける。

「いたっ！」

わたしとローザが同時に腰掛けたソファースプリングが壊れていたのか体が妙に傾き、二人の頭がぶつかり合った。

「すみません！それ壊れてるんすよ。ちょっと座るのにコツが要ります」

始めに言っただけだった。

「えーと、じゃあ依頼内容を確認したいんですが」

ヘクターが聞くと男性は大袈裟とも取れる身振りで語りだす。

「どうも！今回、学園の方に依頼をしたヤツキです。ヤツキ・ホフ

マンです！」

そう言っただけでわたしたちの手を一人一人取り、握手をしていく。

「皆さんにはバンドレンの方へ出向いていただきたいんです。知ってますか？ バンドレン、音楽の都です！」

「発注された楽器を受けとって来るんですよ？」

ヘクターが確認する。

「発注というか『エントリー』ですな」

返ってきたのは予想外の答えだった。

「はあ？」

「幻のギター職人、ビョートルトのギターを賭けた争奪戦に参加したんですよお」

ヤツキさんは「えっえっえっ」と不思議な笑い声を上げる。……なんかムカついてきた。

「あの……」

何かを言いかけたヘクターの頭をローザが押し退ける。

「話が違ってますけど！」

ヤツキさんを睨みつけるローザ。ヤツキさんはきょとしたかと思うと再び笑い出した。

「そうなんすよお、学園の受付の人に説明はしたんすけどねえ、結構美人な人でしたよ。知ってます？ ブロンドのきつい感じの女性」

「あんたの好みはどうでもいいよ」

フロロが舌打ち混じりに突っ込む。

「ああ、そうっすよねー。僕はいつも話しが脱線するって田舎のばあちゃんにも……ってこれもどうでもいいっすね。なんでしたっけ？ あー、そうだ、依頼内容ですよ。受付には『何言ってるのか、よくわからん』なんて手厳しいこと言われちゃったもんで、『とにかく楽器を取ってきて欲しい』って言ったんすよ」

「……なんでそんなこと言われたか、よくわかるな」
アルフレートがぼつりと呟いた。

「あの、つまり頼んだ楽器をただ貰ってくる、ってことじゃないん

ですね？」

わたしはイライラを押さえて質問する。

「そおなんすよー、ええ。皆さんには悪いとは思っんすけどね、僕だつて一生懸命説明したんすよ、楽器祭のこと。なのに『落ち着いて、一から説明を』なんて酷くないっすか？でしょ？」

ああ……、イライラする。

「エントリーってなんです？」

再び質問者がヘクターに戻る。

「バンドレンの楽器祭で行われる一番の目玉、ビョールトのギター争奪戦に参加希望を出したってことです」

ヤツキさんの言い方はまさに『説明下手』の典型だ。話しがいらない部分にいったかと思えば、話しが飛び過ぎて訳がわからない。

「知らないっすか？音楽祭。楽しいっすよー、出店が出たりパレードやったり、人間タワーなんて微妙なイベントもありますけど。えっえっえっ」

「……もういい、私が説明する」

痺れを切らしたアルフレートがわたしたちに向き直り、バンドレンの町の説明を始めてくれた。

音楽の都バンダレン

音楽の都バンダレン、そんな風に呼ばれるようになったのはこの町の自由を尊重する精神かららしい。路上で弾き語りを始めても何一つ咎められず、自然と人が集まる雰囲気のあるこの町を愛したのは、流れの吟遊詩人や旅芸人たちだった。そんな背景からか楽器職人たちもこの町に集まるようになる。いつ訪れても美しい音色が流れるようになった頃、一人の楽器職人が現れた。

サミュエル・ビョールト。誰にも真似出来ない名作を作り出す天才だった。彼が一番愛した楽器がギター。リユートやバイオリンに代わって流行りだした新しい楽器だ。彼の作り出すギターは評判が評判を呼び、名音楽家たちが次々と彼の楽器を使用するようになる。ビョールトの没後、彼のギターが幻の存在になるのに不思議はなかった。なかでも彼の一番のお気に入りであり、生涯売ろうとはしなかった一本のギターがある。身寄りの無かったビョールトの遺産は全て町へ返還され、そのギターも町の物となった。

「そのギターを賭けて競い合っのが音楽祭だ」
アルフレートはそう語った。

「いやあ、物知りっすね！さあすがエルフさん。そのギターの音色といったらまさに水が撥ねるような清らか……」

「いいからあなたは黙ってなさい」

ヤツキさんにぴしゃりと言い放つアルフレート。ヤツキさんはしょんぼりと肩を落とした。

「賭けて争うって……、渡しちゃっていいの？そんな大事なものを」
わたしが聞くとアルフレートは頷く。

「数年前に埃被っているのが発見されたんだ。そんな状態にさせるなら弾いて貰った方が楽器も幸せだろうからな」
なるほど、確かにそうだ。

「それで何をやって競うんだ？」

ヘクターもヤッキさんではなくアルフレートに質問する。

「毎年開催しているのに、今だに新しい持ち主が現れないようなことさ」

そう言うアルフレートはにやりと笑った。

「もう、焦らさないでさつさと教えてよ」

「本当に聞く態度というものがなくてない奴だな、お前は」

アルフレートはわたしの言葉に舌打ちする。

「バンドレンの町の外れには古い炭坑がある。今はとくに立入禁止になった、な。そこに入って何かを取ってくるのが条件らしいぞ。詳しくは私も知らん」

「へえー……」

わたしとローザの声が重なった。

「でもずっと、それをクリアするやつがいないんだろ？初めから置いてないんじゃないの？その『何か』ってやつ」

フロロの疑問も尤もだ。町の活性化の為に祭を開催して、メインイベントが終わらないようにインチキしてるなんて、いかにも有りそうではないか。

「そ、そんなことないっすよお！」

ヤッキさんが大きな声で否定する。

「だって僕は三年前に、ギターの音色を聴いてるんすからあ！」

ヤッキさんは興奮したように手を震えさせ、話しを続ける。

「三年前、条件をクリアした旅人が現れたんす」

呆気にとられるわたし達を前にヤッキさんは前につんのめりながら必死の形相だ。

「実はビョールのギターを手にするには二段階のテストがあるんす。一段階目が今言った、炭坑に行くテスト。二段階目が演奏のテストです」

「ビョールのギターを弾くわけね」

わたしが言つとヤッキさんはこくこくと頷いた。

「弾き手に相応しいか、祭の最終日に町民の前で演奏するんすよ」
「やっぱリインチキかもしれねーじゃん。町の人間が『駄目』って
言ったら貰えないんだろ？」

フロロが眉根を寄せる。

「それが違うんです！三年前に演奏のテストをした吟遊詩人は自ら
辞退したんすよおお！」

その後もヤツキさんは興奮し、唾飛ばしながらその吟遊詩人のすば
らしさを説明するが皆ダレてきてしまった。無駄な情報が多すぎる
のだ。堪らずわたしは口を挟む。

「要するに、その吟遊詩人は素晴らしい演奏をしたのにも関わらず
『わたしには弾けない』と言って楽器を置いたまま町を出て行っ
ちやったのね？」

「そうです！皆の前で演奏した時は素晴らしいものでした。それな
のに演奏後、暗い表情になったかと思えばそんな弦きを漏らしてい
なくなっちゃったんですよ……」

何とも不思議、というか不気味な話した。呪いのギターというと語
呂が悪い気もするが、そんな負の力でもあるのだろうか。

「僕はあのギターの音色に惚れ込んでまして、三年前のあの日
からそれまで以上にギターの練習を続けて来たんす。あ、元々ギタ
ーはやってたんすけどね。どうしてもあのギターが欲しい。いや、
一度弾けたらそれで良いんです。そしてあの吟遊詩人が漏らした言
葉の意味を知りたいんです！」

熱い語りが終わった。部屋にいる全員が心なしかぐつたりしている。
当たり前だよ、依頼内容聞くだけでもうお昼の時間じゃないか。し
かも聞いて来た話と全然違うし。

「……とりあえず聞いておきたいんですけど」

「何です？」

ヘクターの拳手にヤツキさんが答える。

「なんでそんな何年も前から成功している人が少ないようなテスト
に俺らを呼んだんです？その、俺らが助けるのは炭坑の話の方だ

と思うんですけど、それだって三年前のその人しか成功してないんですよね？少なくともあなたが知る範囲では」

ヘクターの言う意味は『学園に頼むって駆け出しヒヨッコに頼むってことですよ？』ということだろう。ヤッキさんは今までの勢いがしぼんでいき、もじもじとして口を開く。

「いやあ、正直言ってお金無いんすよ。こんな成りでわかんと思ひますが」

そう言つて頭をぼりぼりと搔いた。その気持ちはわかるが、いくらなんでも無謀じゃないだろうか。

「で、どうする？」

アルフレートがわたしたちに問い掛ける。依頼人の前で話すことではないが、この人に遠慮する気持ちが失せるのはわかる。

「どうつて……依頼内容がこんだけ違つと学園に報告するとき面倒なのよね」

わたしは思いつき大きく溜息をついた。前回、前々回とそんな目に合っているわたしたちはレポートの面倒臭さが身にしみている。

「でも学園に報告すればこの依頼は立ち消えよね。どう考えても契約違反だもん」

ローザがわたしに続く。

「……それだけ普通だつたら受けられない貴重さはあるんじゃないかな」

ヘクターがそつと意見した。確かにヤッキさんがしっかりと話を伝えていたらわたしたちに回つてこず、もつとベテランな？？六期生や卒業生の中で学園にクエストを求めてきたようなパーティーに回っていた話だろう。わたし達に来るのはせいぜいお使いやゴブリンなどのモンスター掃除なんかだ。

「行くとしたらこのままそつと出発だね」

フロロがにやりと笑う。

「受けてもらえるんすね！うれしいなあ」

「まだ何も言つてない！」

ヤツキさんに向けたわたしとローザの声が再び重なった。しゅんとするヤツキさん。とはいえヘクターの意見にも心動かされるわたし。わたしだって出来れば大きなクエストを経験してみたいもの。何よりギターを辞退した吟遊詩人が残した言葉から、何とも言えぬオカルトちつくな匂いがするではないか。

「イルヴァ、お前はと思う？」

アルフレートに突然話題を振られ、イルヴァは大きな瞳をぱちくりとさせた。

「イルヴァは行ってみたいですよ。強そうなモンスターと戦える予感がしますもん」

「決まりだな」

アルフレートはにやりと笑った。イルヴァに聞けばそう答えるに決まってるじゃないか。知っていて聞いたな、このエルフ。

流れはどうあれ、じゃあ行くか……という雰囲気になったところで、ヤツキさんが再び歓喜の声をあげた。

「ありがとうございます！ いやー正直、これで断られてたらまた一年待つはめになるかと思いましたがよお。あ、今年テストクリアする人が出てたら来年のチャンスも無いっすよねー」

またも不思議な笑い声をあげるヤツキさん。問題は今日から数日、この人のこのノリに付き合わなくてはならないことかも知れない。

ウェリスペルトのメシ屋兼酒場に移動したわたし達。とりあえず移動は腹ごなしの後にする。

「バンダレンまでの乗り合い馬車って無かったっけ？」

わたしがシーフードリアをつつきながら言った言葉にフロロが反応しポシエットから何か取り出す。

「……ああ、ある。結構出てるみたい」

彼の取り出した手の平サイズの本の背表紙には『ローラス路線図』と書いてある。便利なものを持っているものだ。

「移動にはどのくらいかかるの？時間的に今日出て行けそう？」

ローザの質問にフロロは本のページをパラパラとめくった。

「大型バスなら夕方には着くよ」

バスを引っ張るコルバインという動物は馬より大分大きい。その分スピードも速いのだ。

「乗り合い馬車ってイルヴァ始めてです」

イルヴァも珍しく声が弾んでいる。

「あゝ」

ヤツキさんが怖ず怖ずと手を挙げた。

「なんです？」

わたしが聞くと申し訳なさそうな声を出す。

「移動のお金って、僕が出すんですかね？」

彼の質問にわたし達は顔を見合わせた。

「……本当に学園に依頼したんですか？そういう話しも受けてるはずですけど」

わたしの声が冷やかなのに気付いたのか、ヤツキさんは慌てて手を振る。

「ち、ちゃんと依頼しましたよお。嘘じゃないですよ」

じゃあ受付の話をちゃんと聞いてなかったということだな。

「移動に掛かる料金は依頼人持ちが基本です。もちろん徒歩って選択肢もありますよ?」

わたしが言った言葉にイルヴァは肩を落とす。バンダレンは近いので歩いて行ってもせいぜい一泊野宿すれば着くだろう。

「ただ、依頼料以外の必要経費は申請すれば補助を受けられたはずなんですよ。もちろんわたし達の分だけですけど」

わたしはヤッキさんの顔を伺った。彼は見るからに初めて聞いた、という顔だ。そんなはずは無い。他の人なら受付のミスを疑うところだが、どうも怪しい。

「後からじゃダメなんですか?」

後日申請、というのはどうか知らない。というよりその辺の話し合いは本来、わたし達はノータッチな部分なのだ。あくまでもわたし達は学園の学生という身分なので、依頼料だって貰わない。学園に払われるだけだ。

「じゃあこうしようじゃないか」

アルフレートが人差し指を立て、ヤッキさんとわたし達の顔を見回した。

「今回は旅の経費はこっち持ち、そのかわり炭坑とやらで見付かった金目の物を譲渡すること、っていうのはどうだ?」

アルフレートの意見には悪巧みを感じるのは彼の人徳からか。

「……それっていいの?」

ローザが気まずそうに尋ねるとアルフレートは鼻で笑った。

「ここにいる七人が黙っていれば何も問題ないじゃないか」

本来、わたし達は冒険中手に入るような金銭的に価値のある物というのは全て依頼人に渡すことになっている。トラブルを起こさない為らしいが、学生がやるクエストで価値が高い物を手に入れることがそもそもあまり無い。しかしアルフレートがこんなことを言い出す、ということは……あるのかも知れない。わたしは思わず無言になり、事の成り行きを見守った。

「いいっすね!それでお願います。早くバンダレンまで行きたい

「すみません！」

ヤツキさんは明るく答えた。アルフレートの黒さを知らないせいだろう。

「炭坑に入れるのは試験を受ける人たち一斉になるんですけど、早く行けばそれだけ町で情報収集出来ますよ！」

ヤツキさんは嬉しそうだ。アルフレートがにやりと笑う。

「交渉成立だな」

この二人以外のメンバーは顔を見合わせ、無言で料理をかきこんだ。

「バンダレン行きはどれっすかね!？」

ウェリスペルト最大のターミナル駅にやって来た途端、ヤツキさんがテンション高く駆け出した。

「あれかな? こっち? あっちは人がいっぱいいますよ! あっちなんじゃないかな!？」

「フロロ、捕まえろ」

アルフレートの命令にフロロが心底迷惑そうにヤツキさんを追いかける。声が聞こえない距離まで離れていたヤツキさんにフロロが飛びつき、頭を叩く。それを見守るわたし達。フロロに引つ張られヤツキさんが戻って来たところで、全員で案内図の看板に移動する。

「……バンダレン行きは七番乗り場だからあっちね」

わたしは二頭引きの乗り合いバスが丁度停まっている辺りを指差した。あれがそうなのかもしれない。

「あれっすか? 僕、聞いてきますよ!」

再び駆け出そうとするヤツキさんをローザが襟元を掴んで止める。

「いいからあんたは黙ってなさい!……少しはうちのイルヴァ見習って静かにしたら!？」

「イルヴァももうちょっと喋った方が良いですか?」

イルヴァが言う。

「違うわよ!」

「そうっすね、僕もこのお嬢さんぐらい、少しは服装に気使った方が良くも知れないっす」

「それも違う！」

疲れる旅になりそうだ。叫ぶローザを見てわたしは旅のこれからを思った。

乗り合いバスは二階建てで、しかも広い。引つ張るコルバインの足音の大きさも桁違いだ。でっかい馬が二頭並んで走る姿は迫力を感じる。

わたしは揺れに身を任せながら窓からの景色を眺めていた。ふと座席に座るメンバーの顔を見て疑問を口にする。

「イルヴァとフロロは？」

「二階のバルコニーに行ってみたみたいよ」

ローザが寝る体勢を整えながら答えた。

「えー！教えてくれれば良かったのに……。わたし達も行くっよ」

「あたしはいいわ……。別にそんな面白くないわよ？」

二階の車体後部は小さいバルコニーのようなものが付いている。そこから表の景色が見られるのだ。ローザやアルフレートは乗り馴れているのか冷めきった様子で寝る準備をしている。わたしがブルー垂れているとヤツキさんを含めた三人が戻ってきた。

「すげー早かった！」

イルヴァに肩車されたフロロがはしゃいでいる。

「暖かい時期でよかったっすね！風がすごかったですよ！」

ヤツキさんも興奮気味に言うわたしの前席に腰掛けた。

「行って来なさいよ」

そわそわしたわたしを見たのかローザはそう言うと言つとブランケットに包まる。アルフレートが隣りに座るヘクターを肘で突いた。

「このお嬢ちゃんを連れてってやれ」

「……えっ？何？」

考え事をしていたのかヘクターはびっくりと肩を震わせ上半身を起す。

「え、二階のバルコニー？そんなもんあるの？」

アルフレートから説明を受けてヘクターは立ち上がった。

「行こう、リジア」

いつもの優しい顔で声を掛けられわたしは立ち上がるが、さっきの物思いにふける表情が気になってしまった。

「うわ！すごい！綺麗！」

目の前に広がる景色にわたしは思わずはしゃぎ声をあげる。今までに体験したことのないスピードで馬車は進んで行く。下を見るとすごい土煙だ。一階部分にはバルコニーが無い理由がわかる。流れるように移り変わる景色はローラスの初夏の植物で彩り鮮やかだ。

アルフォレント山脈にかかる薄雲の色に目を奪われていると、がたん、っと馬車が傾いた。「おっと」と言いながらわたしはバルコニーの柵に掴まる。するとヘクターがわたしを包むように両手を柵に置いた。

ぶわつと顔が赤くなるのが分かる。両腕に挟まれる形になったわたしは動けなくなった。無言のまま遠くなるウェリスペルトの町を眺めるだけだ。

「寒くない？大丈夫？」

頭の上から響いて来たヘクターの声にわたしは首を振った。まさに顔から火な状態の自分が寒いわけがない。……あ、もしかしてヘクターが寒いと感じていたりするのかも。とわたしは慌てて振り返った。が、向き合ったことで尚更恥ずかしい状態になったことに気付き、うつたえる。密着しそうな体にヘクターも驚いたような戸惑ったような顔だ。

「も、戻ろっか……」

わたしはヘクターの体を押して馬車の方へ促した。

バルコニーを出たところで出くわした顔に、わたしは一瞬息を飲む。向こうも同じだったらしく少しだが肩が震えるのを見た。緑の目立つ頭に細身の体、鋭いというより常に睨みつけるような瞳。アントンだ。

「……なんだ、お前らもこの馬車だったのかよ」

意地悪そうな表情に戻ったアントンの言葉にわたしは眉根を寄せた。言い方が引つかかる。

「バンダレンに行くのか？」

ヘクターがわたしの腕を掴み、わたしは静かに背後に引き寄せられた。

「『行くのか？』って、何？この人たち何も知らないの？」

アントンの後ろから現れた一人の少女があきれ顔で聞いてくる。赤いロングヘアーに黒いローブ姿、アントンと並ぶと妙に絵になる。

「セリス……」

わたしと同じクラスのソーサラー、セリス・ミユラーだ。同じクラスだがあまり話したことは無い。特に悪い印象があるというわけではないが、何となく仲良くはならなかった、そんな存在だ。それゆえかセリスがアントンと同じパーティーとは知らなかった。

「こんにちは、リジア。あなたたちも音楽祭に行くんでしょ？依頼人はどんな方？」

セリスの言い方には少しからかうような空気を感じる。それに腹が立つより、彼女の言葉にわたしは驚いてしまった。

「それって……！セリスたちも音楽祭に参加するってこと？」

「あ、やっぱり知らなかったんだ？」

わたしの驚きにセリスはけたけたと笑った。

「……それでリジアに絡んで来たのか」

ヘクターの顔はわたしから伺えないが、声の調子から昨日のような

ものになっているに違いない。空気もぴりぴりとしたもの変わる。
「そう恐い顔するなよ。あんただって楽しみになってきただろ？俺と勝負出来るんだから」

アントンが口元を緩ませ、しかし目付きは睨みつけるような顔で言った。勝手に燃え上がるのはいいが、付き合わされて不愉快な気分になるのはゴメンだ。

「……っか！何が『俺と勝負出来るんだから』だ！偉そうに！」
わたしが噛み付くと、アントンは面食らったように目を丸くする。
「いいこと！？状況はわかったけど、わたし達は単に音楽祭での『テスト』で競うことになっただけ！どんな恨みがあるんだか知らないけど、余計な因縁つけてこないでちょうだいっ！胸糞悪い！」
わたしが言い終わってから一呼吸置き、アントンの顔が赤くなっていた。

「……んなっ！なんっ！」

「行こう！」

わたしは何かを言おうとするアントンを無視し、ヘクターの腕を引っ張る。一階へと戻る階段を下りていると、セリスの笑い声が聞こえた。

「……どうしたの？」

不穏な空気を感じたのか、ローザがブランケットから顔を出した。わたしは席に戻ってから大分経つというのに、今だカッカとする頭を振って答える。

「別に。……クラスメイトからの自分の評価に『見てろよ』って気分になっただけ」

ローザは「……はあ？」と呟くが、深く聞いてはまずそうだと思っただのかブランケットを被り直した。

昨日、アントンは仲間が言っていた、とわたしにこう言ったのだ。

『あんだ魔法の腕は酷いんだってな』

思い出して再び頭が茹だってきた。言っていた仲間はセリスに決まっている。わたしは立ち上がると前の座席の背もたれを掴み、ヤツキさんに頭の上から声を掛けた。

「絶対ギター持ち帰りましようね！ヤツキさん！」

「うえっ！？そ、そうっすね！はい！」

慌てふためきながらも元気の良い返事が返ってきたことにわたしは満足し、鼻息荒く席に座る。

「……どったの？」

「さあ……？」

後ろからフロロとイルヴァのひそひそ声が聞こえてきた。

馬車を降りるとすっかり暗くなった空に、バンダレンの町並みが作り出す光の粒が浮かび上がっていて思わず目を奪われた。バスターミナルはウエリスペルトと同じ位広くて立派だ。こんな時間でも何台もの馬車が入って来たり、出ていく馬車もあったりと忙しい。誘導の係も何人もうろついている。祭があるから特別賑わっているのかもしれないが。

「じゃあ町に入りますか」

ヘクターが言った言葉に全員が頷いた時だった。

「ローザちゃんじゃないの」

見覚えのある顔が駆け寄って来た。栗色のふわふわとした髪が揺れている。ローザと同じような白のローブ姿の女の子。

「あらら、サラじゃない」

ローザと手を取り合った。サラはわたしに向き直るとわたしの両手も取ってぶんぶん振る。

「リジャー、元気してたー！？」

「サラも来てたのね！」

わたしは二期生の時はクラスメイトであった少女との再開を喜んだ。彼女はブリストであり、ソーサラークラスと分かれてしまっ

らは顔を合わせることも無くなってしまっていた。優等生だが親しみやすく、明るくみんなに気配りをしてくれるような子だ。きやいのきやいのはいしゃいでいたわたし達だったが、サラの後ろにいる人影に思わず固まってしまった。アントンにセリス、他にも学生らしき姿が三人。そこに一緒にいる男性は依頼人だろうか。

「……えーっと、サラのお仲間？」

わたしがアントン達の方に目配せするとサラは思いつ切り首を縦に振る。

「うん！そうよ！」

元気の良い返事にわたしはショックを受ける。……といったら失礼過ぎるだろうか。アントン達のパーティー、というと勝手に『目付きの悪い極悪パーティー』という想像を作り上げていたので、人当たりの良いサラが仲間だということに動揺してしまった。

「フツキさんじゃないですかあ！」

わたしのショックを吹き飛ばす大声でヤツキさんが駆け出す。近寄る先にいる男性は明らかに退いた様子だ。

「……やっぱり来ていやがったか、ヤツキ！」

フツキと呼ばれた男性はそう叫ぶと顔をしかめた。ヤツキさんと同じくらいの身長でやや堅太りな体型。やっぱり薄汚れた格好はなんだかヤツキさんと親子のようだ。声の様子からそこまでの歳では無いようだが、髭がもじやもじやとしていてドワーフのように見える。

「あれが依頼人？」

サラに聞くと「そうよ」という返事が返ってきた。見た目はアレだが、ヤツキさんよりは落ち着いた雰囲気にはんの少しだけ羨ましくなる。

アントン、セリス、サラ以外のメンバーはいずれも知らない顔である。軽戦士風の男に、隣りには大きなアックスを担ぐ体格のいい男、盗賊らしき美人さんもいる。ヘクター達なら知っているのかもしれない。その中のアックスを担いだ戦士がヘクターに近付くと握手した。

「話しには聞いてたけど、お前と競うことになるとはなあ!」

「お互い楽しもう、デイベス」

ヘクターもデイベスと呼んだ彼の手を強く握る。彼とは仲が良いのかもしれない。

「そうだな! どうだ? 今晩はお互いの仲間と一緒に飯食わないか?」

デイベスは笑顔でわたし達を見遣った。日に焼けた笑顔に短く刈り上げた金髪がカッコイイ。

「馴れ合いは御免だぜ、俺は」

アントンが掴みかかる勢いで場をぶち壊す。

「アントン!」

サラが窘めるがアントンは尚も悪態をついてくる。

「仲良くして何のメリットがある? 数日後には競争相手になるっていうのにおめでてえな!」

彼に続いたのが向こうの依頼人フツキさんだった。

「そ、そうだ! ヤツキ、お前はライバルになるんだからな。もう気安く話し掛けるんじゃないぞ!」

サラとデイベスが顔を見合わせると二人揃って肩を竦める。依頼人に言われたら従わざるをえないのだろう。サラは「御免ね」と言う。とメンバーの元へ戻っていった。去っていくアントン達を眺めてアルフレートが呟く。

「青春というやつか。……気持ち悪いな」

「ひでえな」

フロロはそう言いながらも笑っていた。

町の中に移動すると、すぐに食事処を探すことにする。馬車での移動で動いてはいないものかなり空腹だった。

「なるべく安そう、でも美味しいところがいいわね」

わたしはぼやいた。なんせ今回は食費も自分達持ちだ。隣を歩くローザが肩を叩く。

「まあまあ、最悪あたしが出すわよ。貸しだけど」

「……まじ？」

「まじ」

今のは『貸し』という部分を確認したくて聞いたのだが。……いくらなんでもそこまでローザを充てにするわけにもいかないか。

「イルヴァ、食いしん坊の嗅覚で良さ気な店、探せない？」

わたしが冗談で言った一言に、イルヴァは本当に鼻をクンカクンカさせる。そのままふらふらと通りをさ迷うと、一軒の店の前で止まった。

「……ここなんかどうですか？ 良い匂いがしますよ」

若干引きつつもわたしはイルヴァの後ろからその店を覗き込む。入り口の前にスタンドを出していて、そこにメニューが置いてある。

ローザと一緒にそのメニューを眺めていると、他のメンバーも集まってきた。

「山賊風料理ですつて。いいんじゃない？ 値段も手頃だし」

ローザの言葉にわたしも頷いた。肉や山菜、キノコがメインの店らしい。断然魚派のわたしだが山菜やキノコは好きだ。量も多そうなのが良い。何より山賊風、というネーミングが気になるではないか。

「じゃあ此処にしようか。異論、ある人？」

特に声はあがらない。一番いちゃもんの多そうなアルフレートが静かなのが決めてとなって、この店に入ることにする。わたしはイルヴァの頭をいい子いい子してやった。

店の入り口を潜ったところではつとし、慌てて店内を見回す。暗めの照明にゴツめの木の家具で統一した中々良い装飾だ。

「ど、どうしたんすか？」

わたしの後ろでヤツキさんが戸惑いの声をあげる。

「一応、アントン達がいらないか確認したのよ」

「いいじゃないのよ、別に」

ローザの呆れ声にわたしは首を振った。

「駄目よ！またどんなにちやもん付けられるか分かんないじゃない」

「だからそれがどうでもいいことなんじゃないか」

アルフレートが鼻で笑いながらわたしを押し退ける。ムツカー、とするが万が一の場合は彼の減らず口が役に立つのか、と思い直すことにした。

「いらつしやいませ、こんばんは！」

元気よく迎えてくれた店員は、見てすぐに張りぼてとわかるシミタ―を背負った男性だった。山賊……というコスプレなのだろう。飲食店には珍しい無精髭といい、薄汚れた感を出したダブダブのシャツといい徹底している。案の定目を輝かせているイルヴァの腕を引っ張りながら、席を案内する店員の後をついていく。

「注文お決まりになりましたらお呼びください。ハイホー！」

店員が叫ぶと、店内にいた従業員全員が続いて叫んだ。

『ハイホー！』

アルフレートが露骨に顔をしかめる。

「こういう系の店か……。苦手なんだよな」

少し気持ちが分かるわたしは彼のぼやきを咎めなかった。

熱々の肉とキノコの串焼きにかぶりつきながら、わたしは思っていた疑問を口にする。

「アントン達はどうして今回の依頼を受けられたのかしらね？」

「どうして、って？」

山菜のピラフをばくつきながら言うローザの問いにわたしは説明を重ねた。

「わたし達の場合はヤツキさんの説明不足から偶然来れたわけだけど、本来なら音楽祭への参加って学園が受けるような依頼じゃないわけでしょ？だからなんでかなーって」

「フツキ先輩も僕と同じで貧乏つすからねー。やっぱり学園みたいに格安で頼めるところは貴重なんすよ」

ヤツキさんはまた「えっえっえっ」と不思議な笑い声をあげる。

「故意に学園への説明をごまかしたって訳か」

アルフレートが言うとフロロが苦笑した。

「学園もマヌケ。音楽祭って毎年やってるんだろ？気付きそうなものなのに」

確かにそうかもしれない。……知っていて泳がせてる、とかは無いよね。

「アントンなら喜んで飛びつくだろうな。危険を感じる話し程受けたがる奴だし」

ヘクターが呟く。

「で、アントンって誰なの？」

ローザの質問にわたしは眉間に皺寄せた。

「サラの仲間に緑色の目立つ頭の奴がいたでしょ？こんな目付きのわたしは指で目尻を引っ張り上げる。

「ああ、あのピリピリした子かあ」

同じ年のローザに『子』扱いなのはどうかと思うが伝わったようだ。

「あんまり評判良くないですよー、アントンさん」

クラスが違うはずのイルヴァにすらこの言われようなのか。振られたヘクターは困ったように「まあ、個人主義な奴だから」と言葉を濁した。

「話が出たところで向こうのメンバーのこと教え合わない？あたし、サラぐらいしかよく知らないし」

ローザの提案にわたしも深く頷いた。ライバルは彼等だけではない

が、情報は多いに越したことはない。

「まずは向こうの依頼人のことが知りたいな。さつきは『先輩』なんて言い方していたが？」

アルフレートがヤツキさんに目を向けながら質問する。

「フツキ先輩っすか？ 僕の先輩なんすよ。ギターは上手いっすよ！ ヤツキさんはエールの入ったジョッキを置きながら答えた。

「……で、何の先輩なのかを聞いているんだが」

アルフレートはこみかめに筋を浮かべつつ、ゆっくりと聞き直す。

「ああ！ 音楽のいろはを教わる教室に通ってた時のっす！ 先輩は僕が習いに行ってた時にはすでに生徒っていうよりはアシスタントの先生みたいになってましたけど。他には流れの弾き語りみたいなことで生計立ててるらしいっす。……先輩はずっと音楽祭には参加してるらしいんすよね。落ち続けてるって噂は聞いていたんで。ただギターのテストじゃなくて、その前の段階で落ちちゃうんで、本人も諦められないらしいっす」

「へえー、まあ気持ちはわからなくないかな」

わたしは呟いた。自分の腕を試すことも出来ずに終わってしまったては消化不良なのかもしれない。ただ、だったらお金出して腕の良い冒険者を雇うべきじゃないか、という気もするが。ローザが腕を組み指を振る。

「あとは……アントンって奴のことは何となくわかったから、もう一人戦士っぽい人いたわよね」

「デイベイス？」

ヘクターが聞き返した。

「そう、あの体が大きい人」

「でかいアックス持ってたやつか。乗り心地良さそうなやつだったな」

フロロが勝手に肩車要員に認定する。

「デイベイスさんは良い人ですよ。イルヴァも一回、武器の扱いで褒められたことがあります」

一度でも褒められれば良い人認定の、意外と人懐こいイルヴァの意見は余り参考になるとは思えないが、彼に關してはわたしも好印象ではあった。アントンとなぜ組んだのか不思議に思ったくらいだ。ヘクターが口を開く。

「デビスは見た目通りの奴だよ。人が良くて豪快、でも意外と気配りが上手いって感じだな。アントンのことも気に掛けてたし。俺も手を合わせたくないのはデビスの方かな」

「ま、まさかそんな物騒な話しにまではならないでしょ？」

ローザが縮こまった。わたしは「だと思っけど……」と自分自身に言い聞かすように呟いた。

「あのソーサラーの娘は？名前が出てこないんだけど……」

「セリスね？」

ローザの言葉をわたしは受け継いだ。

「わたしと同じ、攻撃型に特化したタイプの魔法使いよ。まあわたしよりは器用だけど」

「お前より不器用だったらこの場にいないだろ」

アルフレートの意地悪なツツコミは無視する。

「サラについてはわたしは知ってるけど、みんなにはローザちゃんからお願い」

わたしはローザに手で促した。

「そうね……。あたしと同じプリーストで、信仰神はラシャ。ラシャの神官らしく真面目で優等生タイプね」

ラシャとは六大神に数えられる神で信仰者も多い、一番ポピュラーといってもいい神だ。宗教画も多く、その全てが右手が光る男性で描かれる。『全ての存在に光を宿す右手を持つ』という言い伝えかららしい。

「可愛かったっすよね！」

「あら、ヤツキさんはああいうタイプがお好み？」

ローザのからかいにヤツキさんは慌てて手を振った。

「違っつすよー！そんないやらしい意味じゃないっす！それに僕が

手出したら犯罪になっちゃう！」

えと、ヤツキさんっていくつぐらいなんだろ。顔がよく見えないせいで読めないんだけど。

「あと女の子もう一人いたよね」

ヘクターが言っているとフロロが顔を上げる。

「あいつ、俺と同じクラスだ。俺は苦手」

「なんで？綺麗な人だったけど」

見事なプラチナブロンドに整った顔立ちをした彼女を思い出し、わたしが聞くとフロロは露骨に嫌な顔をした。

「何かっていうと『盗賊とは』とか持論語り出すし、真面目に授業うける、とかうるさい」

「……なんか持論を語るわりに盗賊らしくない人ね」

ローザの呟きに全員が頷いた。

「あと一人、どんな奴がいたっけ？」

首を捻るアルフレートにわたしが答える。

「アントンの隣りに軽戦士っぽい人がいたじゃない。黒い髪した人」
アルフレートはぼん、と手を叩いた。

「ああ、あの男か。あいつは確か特殊系クラスのやつだ。私と同じ校舎にいた」

「……じゃああんたが一番知ってるはずじゃない」

アルフレートは吟遊詩人という特殊なクラスにいるので、わたし達とは違う校舎にいる。バードクラスのように少人数のクラスが集まっている建物だ。

「どういう人なんです？」

イルヴァが聞くがアルフレートは首を傾げる。

「さあ……」

興味ないってことか。勝手に影の薄い人認定をされた彼のことを思い、そっと涙した。

宿屋の窓から通りを見下ろす。古めかしい雰囲気が漂う町はどこか時空を超えて迷いこんでしまった錯覚を引き起こしてくれる。

「自由を謳うバンダレンに唯一厳しい法律がある。古い建築物の保有だ」

わたしの後ろから外を眺めるアルフレートが教えてくれた。

「建物の改築、新築には厳しい基準があつて、それをクリアした場合のみに認められるがその場合も外観に厳しいチェックが待っている。過度な色彩使い、装飾は許可されない。……音を基準にしているんだ、この町は。音楽を聞く厳かな雰囲気壊すことは一切認められない」

「へえ、徹底してるんだ。だから中で楽しむのかな？」

わたしは先程までいたレストランの遊びの部分を思い出して言った。山賊のコスプレに明るい掛け声、成りきって遊ぶ店員には仕事を楽しむ姿勢を感じた。

「かもしれないな。ただ町の景觀に気を配るといふのは良い効果が付いてくる。『町を綺麗に』という意識からか、犯罪が少ないんだ」なるほど、常に襟を正した状態ということだろうか。肩が凝りそうな気がしなくてもないが他の部分で自由を楽しんでいるのかもしれない。通りを歩いていても警備員を見掛けることが少ないことから、この町が上手く回っていることがわかる。

「イルヴァ臭いぞ！」

フロロがベットの上でマニキュアを塗り始めたイルヴァに文句を言う。今晚は予算の都合から大部屋に皆で泊まる。騒がしいっတာらない。

「ヤツキさん、音楽祭について詳しく聞いておきたいんですが」ヘクターの一言に皆の視線が部屋の中央に集まった。皆に見られたからか、ヤツキさんはどうしたものかときよどきよどきとするのが手に

取るようにわかる。

「いつから始まるんですか？」

見かねてわたしが質問した。ヤツキさんは指を折ると答える。

「……三日後っすね！」

ということは明日明後日と丸二日は空くことになる。情報収集なんかはフロロに任せた方が良さだろうし、結構暇になるかも。

「一つ気になってたんだけど、フツキさんみたいにテストを受けるのが初めてじゃない人も結構いるはずよね。やっぱりそういう人の方が有利なんじゃない？テストは毎年同じなんですよ？」

ローザの問いにヤツキさんは再びもじもじした。

「それが……、毎年テストの内容はエントリー者にしか発表されないすよ。祭自体は三年前から毎年通ってるんすが、一回もテストの内容は漏れてきませんでした」

エントリーした人間全員が頑なに口を閉ざしているとは思えない。きつと噂程度ならあるはずだ。

「そのへんは俺にまかせてもらえばいいよ」

フロロの頼もしい台詞が聞けた。

「じゃあテストの内容はわからないけど、炭坑について何か知ってない？」

わたしはヤツキさんの顔を見た後、つついアルフレートを見てしまう。

「そうっすねえ、エルフさんの方が詳しいかもしれないっす」

ヤツキさんは頭を掻いた。彼の場合、知識がどうというより話し方が問題なのだが。その点アルフレートは話し方が上手い。歌は下手だがやはり吟遊詩人なのかもしれない。アルフレートはふう、と溜息をついた。

「『砂漠の石』は知っているか？」

アルフレートの言葉にローザが唯一手を挙げる。

「宝石でしょ？結構貴重なんであたしも一度しか見たこと無いけど」

「そう、希少価値の高い宝石だ。砂漠のような砂色に自ら光を放つ

珍しい石。まるで太陽に照らされた砂が光を反射するかのようだから『砂漠の石』。別に砂漠で採れるわけじゃない。世界のあちこちで見つかる割りには一箇所で採れる量が極端に少ない。だから金持ちの間では人気があるな。世界の誰もが知っているのに所有者は少ないからだ。要は自慢になるからだな」

アルフレートはそう言う「おっと」とおどけて見せた。

「お前らが知らないからといって物を知らないわけじゃないぞ？そのくらい金持ちの間にしか流通しない宝石なんだよ」

こういう余計な一言が無ければ良いのに、とは思う。

「そんな希少価値の高い宝石がバンダレンで見付かったのが大分昔の話。西にあるタージオ山という小さな山でだ。可哀相なことに小さな山は穴だらけにされてしまう。結局見付かった『砂漠の石』は最初に見付かった一握りのみ、というオチを残してバンダレンの短いゴールドラッシュは終わるんだな。あとは用が無くなった廃炭坑が不気味に残るのみ、と」

「じゃあモンスターの巣になってるかも知れないんだ？」

わたしの言葉にイルヴァが妙に嬉しそうな顔をした。

「だろうな。今回ばかりは多少覚悟して乗り込んだ方が良い。どんな意地悪なテストなんだか知らないが、炭坑の中を歩き回るのは確かなんだ」

「そ、そうっすね。僕も足手まといにはならないようにしなくちゃ

……」

それはわたしも同じかも、とわたしは不安になってきた。洞窟のような狭い場所ではただでさえ使える呪文が制限されるのだ。今更ながら経験が少ないことに不安を覚えてきてしまった。

翌朝、わたしはベッドの上で伸びをすると部屋の反対側のベッドで丸くなるヤツキさんの姿を目にした。勝手なイメージで彼は物凄いいびきを撒き散らすんじゃないかと心配していたのだが、布団の中

で猫のように丸くなる姿は微かな寢息を立てるだけだ。ゴメンナサイ。心の中で謝罪するわたし。

「おはよ」

後ろから掛けられた声に振り向くと、すでに身仕度を終えたローザが立っていた。

「珍しく爆睡だったみたいね。あたしはイルヴァとアルフレート起こしとくから、顔洗ってきなさい」

お母さんのような言葉を頂き、わたしはのっそりベッドから出ると服のシワを払う。自宅とは違って寝間着に着替えるわけにはいかないので、昨日のままの格好なのだ。ローブは流石に脱いだ姿だが。

お風呂の時に下着は変えたとしてもシャツぐらいは着替えたい。そんなことを考えながら部屋の入り口方向へ向かう。

安い部屋を！といっても共同のトイレ洗面台はわたしとローザが嫌がったので、それらが付いたタイプの部屋を借りたのだ。わたしは洗面所の入り口を開けた。すると先客がいたことに足が止まる。洗面台にはヘクターが顔を洗う姿があった。きゅ、と蛇口の栓を捻る音を立てて彼は振り向く。

「あ、おはよ」

ずぶ濡れの顔で挨拶される。妙に照れくさい。わたしはなるべく平静を装いつつ挨拶を返した。

「……タオル忘れた」

わたしの手元を見るなり呟く。わたしは部屋から持って来たタオルを差し出した。

洗面台を代わってもらい顔を洗いだすがヘクターが出て行かないことに気がつき動揺し始める。……いやっ、見ないで！ローザに『おっさんくさい洗い方ね』と言われた洗顔を！自分でも気持ち悪いくらい遠慮がちにちょびちょびと洗うと振り向いた。

「はい、ありがとう」

タオルを返されるわたし。……ああ、そうか、この為に待っていたのか。他のメンバーなら頭の上に投げ返ってきて終わりだというの

に。

「どけ」

不機嫌顔で洗面所の扉から現れたのはアルフレート。いくら朝が苦手といっても周りに対する気遣いは捨てないで欲しいなあ。ドス黒いオーラを放ちまくるアルフレートに呆れながらわたしは扉を開けた。

部屋に戻ると眠気眼のイルヴァが豪快にシャツをめくり上げ、上半身を晒しているところだった。

「ぎゃー！見ちゃ駄目！」

わたしは扉を出る瞬間のヘクターを慌てて洗面所に押し込む。「うお！」「ぐえ！」と嫌なうめき声が響いた。

「……喧嘩売ってるのか？」

倒れ込むヘクターに押しつぶされ、洗面台に顔を埋めるアルフレートが呪いの言葉を吐き捨てる。

……やっぱり部屋は分けるべきなのか。

ほかほかと美味しそうな湯気を立てる朝食を前にローザのお説教が延々続く。

「まったく！信じらんない！」

「寝ぼけてたんですよお、いくら私でも恥じらいは捨ててませんか」

イルヴァが弁解を述べるが誰も信用しないだろう。

「ローザさんはイルヴァの裸見ても何も言わないんで麻痺してた部分もありますし」

「あたしはあんたの裸見ても欲情しないもん」

「おい、私だつてしないぞ！」

アルフレートがムキになって叫ぶ。

「わかんないじゃない。とにかく、男はおっぱい見たら欲情するもんなんだから見せちゃいけないの！これはマナーです！」

ローザがびしっ！と指を突き付けると、イルヴァは「はい」とのほほんとした返事をした。そしてヘクターの顔をじっと見る。

「ヘクターさんは欲情しますかね？」

ぶっ！イルヴァ以外の全員が口の中の物を吹き出した。そして反射的にヘクターの顔を見やるわたし達。ヘクターは何か答えようと口を開けたまま固まる。沈黙が続いた。

「するの！？」

思わずわたしは立ち上がり叫ぶ。

「しないしないしない！」

ヘクターは慌てて両手を振って否定した。

「……とにかく！悪いのはイルヴァなんだから、話し変えて誤魔化さないの！」

ローザが上手くまとめくれるが、フロロとヤッキさんは大きく溜息をつく。

「モロに見ちゃった俺らはどうすんだよな」

「気まずいっす！」

あーもう！朝っぱらからなんでこんな会話を展開しなきゃなんないのよ！

「あつと、そういえば今日、僕は早速祭りの開催者側にテストのエントリーを申し込んでこようと思います！」

ヤッキさんがようやく会話の流れを変えてくれたことで、一同どこかほっとする。

「皆でそろそろ行ってもしょうがないわよね」

わたしが言うとなヤッキさんは頷いた。

「そうっすね。だから皆さんは町を見てくると良いつすよ！音楽祭が近いことで、もうお祭りムードに成って来てると思うんで！」

確かに昨日の夜からこの町に漂う浮ついたような空気は感じていた。すれ違う町人がスキップこそしていないものの、今にもしだしそんな笑顔ばかりだったのだ。

「じゃあ、たまには羽根伸ばしますか」

ローザの一言に全員が笑顔になった。

魔女っ子、のんびりする

ヤツキさんを見送ってからバンダレンの街に出ると、フロロがわたしを見上げ言った。

「俺、用があるから別に行く」

「用？」

わたしが聞くとニヤリと笑う。

「盗賊には色々あるんだな」

なるほど。ギルドに挨拶回りというわけか。駆けていくフロロを見送っていると今度はアルフレートが、

「私も少し用事がある」

と言いながらどこか消えて行ってしまった。残された四人で顔を合わせる。ローザが首を竦めて言った。

「少し…自由行動にする？」

それにイルヴァも同調する。

「そうですね…。イルヴァも衣装を新調したいですし。どなたか一緒にします？」

それには三人とも首を振らせて頂いた。

わたしもせっかくの機会だし、この街でいくつか行ってみたい店などがある。待ち合わせ場所をすぐ目の前にあった食堂に決めると、わたし達は思い思いの方向へと歩き出した。

一度は訪れて見たかったバンダレンの魔術書専門店『暗雲堂』。ネーミングセンスはさておき何かと名前を聞くこの店に、一度来ておきたかったのだ。店を外からじつくり見る。

「……何かいかにも、って感じね」

集客などおおよそ考えていなそうな暗さといい、入り口も狭い。カラフルさは皆無。ある一部の人には落ち着くことこの上ない雰囲気だ。

足を踏み入れると何人かのお客と見られるローブ姿の人が、朝という時間にも関わらず棚を見上げたり書物に目を通している。奥から店員の「いらつしゃい」ともそもそ呟く声がかろうじて聞こえてきた。特に目当ての本があるわけではないので、端からじっくり見させて貰うことにする。

『サラマンダー召喚から始まる』だの『バロンは何処にいった』だのといった読み物としての色が濃いものから、『精霊大事典』『初級古代語事典』といった辞書。古代語の表紙の本が鍵付きのガラスケースに入っていたりもする。いかん、一日中いられるぞ、ここ……。

そういうわけにはいかなないので棚を見るピッチを少し上げる。何冊かめばしい本を腕に抱えると、スタート地点である棚へと戻ってきた。持ってきた本三冊を見比べ、財布の中身を思い浮かべる。よし、これにしよう。

二冊を棚に戻すと『四大元素の応用と法則』という本を買うことにする。丁度集めていた著者の本だ。少しばかり無理をすることにした。わたしは軽くなった財布と重くなった鞆を持ち、店を出た。

懐具合からしてあまり他に店を覗く気にならないが待ち合わせ場所に移動するには早過ぎる。

暫くぶらぶらと歩いていくと一軒のカフェが見えてきた。たまにはこういう所でぼんやりするのも良いかもしれない。この先こんなんびりとした時間が取れるとは限らないのだから。

「いらつしゃい！」

中に入ると若い女性店員の元気な声に迎えられた。カウンターで飲み物を注文すると、すぐに生クリームたっぷりのホットドリンクが出てくる。

「若いのに一人旅？」

店員さんに聞かれ、わたしは手を振った。

「まさか！今は自由行動の時間なんです」

「なるほど。この街は楽しめた？」

「はい！いい所ですね、お店は多いし町は綺麗で」

店員さんと暫し会話したのち外の席に移る。この気候だ。表の方が気持ちが良い。席に座り先程買った本を取り出そうとし、少し考えてから仕舞い直した。どうしても勉強になってしまふ。今は止めておこう。

一口目のカフェモカを飲み込み、安堵の息をついたときだった。ぽん、と軽く頭に触れる。なんだ？と顔を上げると向かいの席によく知った顔が腰をかけた。

「ヘクター！どうしたの？」

「よつ。……今そこに剣の研ぎを頼んで来た。有名な店で一度来てみたかったんだ」

指差す先を見ると、一軒の武器屋の看板があった。

「へえー……。その待ち時間？」

「そう。リジアは？何か見れた？」

「わたしは本を買って、予算も無いから時間潰そうと思って」

ヘクターは何かのソフトドリンクを飲みつつ頷く。

「じゃあこのあとリジアも来る？つまらないかも知れないけど……」

「うん！行く！行きます！」

ヘクターの言葉を最後まで待たずに即答した。

「そ、そう。そんなに行ってみたかったなら良かった」

その時、先程の店員さんがテーブルにコトンと皿を置いた。

「サービス。可愛いお二人さんにあたしから。特別よ？」

見るとおいしそうなクッキーが数枚。……ハート型なのが気になる。深く考えすぎなのはわかつてはいるものの、わたしは固まってしまった。ヘクターがお礼を言う声が聞こえ、慌ててわたしも頭を下げる。

「旨い」

ヘクターが一口かじるなり感想を漏らした。そうよねー。普通ハ―

ト型のクッキーが現れたぐらいで動揺しないわよねー。というか祭りのシーズンのサービスなのか、他の客のテーブルにも同じ皿が置かれているじゃないか。自分の馬鹿さ加減に呆れつつわたしも頂くことにする。

「んまい！」

大きめのチョコレートの塊が良い感じ。

「本って何買ったの？」

ヘクターの質問にわたしは先程買った本を取り出した。

「うわー、全然わかんねえ！」

パラパラとページをめくりながらヘクターは笑った。

「わたしだって半分ぐらいわかんないよ。……だから勉強するために読むんだもん」

「なるほどー。リジアは良いこと言うなあ」

そ、そんなにしみじみ言われると恥ずかしくなる。

「いや、でもさ、毎日大変だろうなって。宿帰っても俺みたいに寝るだけじゃないんでしょ？」

「そりゃあ……そうだけど好きでやってるし、そのかわり普段はお世話になりっぱなしだし……」

う……ちよつと自虐的だけど、実は日頃から気になっていたことだ。自分で言いながら暗い気持ちになってきたわたしは、気づくと目線が下へ下へ……。と、その時、ぼんぼんと頭を撫でられた。

「俺、結構リジアに助けられてるのになー」

「うそっ！ 例えは！？」

思わずわたしが身を乗り出すとヘクターは少し考えるような顔つきになる。そして、

「んー……ないしょ」

出てきた答えにわたしは口を尖らせる。

「……思い付かなかったんじゃないって？」

「いやいや、違う違う。……そろそろ取りにいつてもいいかも」

「あ、オッケー。じゃあ行こうか」

残念、もう少し突っ込みたかったが。

すぐ向かいにある店へとヘクターに連れられ、普段のわたしには縁遠い武器屋の扉をくぐる。

「うわあ……」

カウンターまで続く剣の列。大小様々なタイプのソードが並んでいる。ソード専門店らしく、ショートソードぐらいの小振りなものからわたしの身長を越えるようなグレートソードまである。

「お、来たな。かわいいの連れて」

店主らしき髭がかっこいいおじ様が奥から顔を出した。ヘクターの人柄のせいだろうか、二人は随分フランクに話した。まるでずっと知った仲のようだ。

「どうなった？」

店主のおじさんはヘクターの問いに頷くと彼のお馴染みの剣柄を持ち上げた。

「普段の手入れが良いみたいだな。綺麗だったよ」

「ばちん、とソードが柄に仕舞われる音の後、ヘクターはそれを受け取った。」

「ありがとう。また頼むよ」

「そうしてもらえると嬉しいね。……どうだい？新しい武器も検討してみたら」

「いつかね。まだそこまで余裕ないよ」

「そうかい？お前さんぐらいタツパがありや大剣なんて持ったら、そりゃあ映えるぜ」

店主の言葉にわたしも思わず想像する。……うん、いいかも。

「お嬢ちゃんもいかが？この辺のなら非力な女性でも護身にピッタリだよ」

そう言っって綺麗な柄のショートソードを見せてくる。と、ヘクターが手で制した。

「彼女には、いない」

店主のおじさんは一瞬目を丸くすると大口で笑い出した。

「こりゃ失礼した。俺も馬鹿だね」

そう言つて尚も笑い続ける。わたしは珍しく強い口調のヘクターに少し驚いてしまった。いや、いないけどね。剣なんぞ到底使いこなせないし。

店を出るとヘクターが深い溜息をついた。彼にしては何か後悔するようなマイナスの空気を感じてわたしは尋ねる。

「……どうかした？」

「いや、……何でも無い」

「またそれ！ 良くないよ、その台詞」

わたしの言葉にヘクターは目を丸くした後、ふつと笑う。

「また来たいな、と思ったただだよ、この町に」

ヘクターの答えに納得はいかなかったが、それにはわたしも同感だ。暫く歩くと街の案内図が大きく描かれた看板が現れた。二人とも自然と足が止まる。

「何処に行きたい所ある？ 今度は俺が付き合うよ」

「うーん、じゃあお言葉に甘えて……ここ」

わたしが指差すのはマジックショップ。買い物は出来そうにないが、品揃えなど見ておいた方がいいかもしれない。ヘクターの快諾を聞くと店の方向へ歩きだした。

「へー……すごい」

ヘクターがマジックショップに入るなり声を漏らした。彼からしたら訳のわからない植物やらが乾燥したものがやたらとぶら下がっていたり、何に使うのかもわからない道具に溢れかえっているように見えるのだろう。店に充満する、甘いような柑橘類の匂いにも似た、しかしながらスパイシーな感もあるお香も妖しい。

「……これ、何に使うの？」

ヘクターが眉間にシワを寄せる。彼の目線の先を見ると、ポーシヨン系に使う植物の種やモンスターの爪、角の粉末が小袋に入って売られている。うーん、新鮮な反応。「煎じて飲んだりするよ！」と言いつうになるが、彼の為を思つて止めておく。

商品を順に見ていると、トンガリ帽子にローブ姿の店員に声をかけられた。

「冒険者の方ですか？」

「……の卵です」

この答え方が正しいのか分からないのでわたしはゆっくり答える。

店員は笑顔のまま質問を続けてきた。

「学園の方？」

「はい、そうです」

「あら！じゃあ手続き取つて頂ければ支給品が受け取れますよ。ロース内内の学園ならどこでも大丈夫！」

思わぬ幸運にわたしは手を叩いた。このような学生限定でサービスを受けられるところはたまに見つかる。他の職業に比べて金銭的に負担が大きいソーサラーに国が援助してくれるのだ。

「二階のカウンターになります」

店員の案内にヘクターの顔を見ると、彼は小さく頷き手を軽く上げた。

「じゃあ俺、ここで待つてるよ」

「ごめんね。じゃあ急いで済ませてくる！」

わたしは小躍りしたい気持ちを押さえつつ、階上へと駆け出した。

学生証を見せるなどの手続きを済ませ、貰う物貰ったわたしはホクホク顔で階段を下って行った。魔法陣を描く際に使うチョークなど、なかなか良い品揃えだった。もっとこういう店があちこちにあればいいのになあ。学園の売店よりデザインも可愛いんだもの。

中程まで来た時、一階にいるヘクターとカウンターの店員が話しているのが見えた。何やら親しげ？というジェラシーを一瞬沸き上がらせそうになるが、二人が同時に振り向いたので慌てて平静を装う。軽く報告をした後、店を出る際に店員から掛けられた、

「頑張ってくださいね！うふっ」

という言葉に、ソーサリーであるわたしに向けられたと思いわたしは振り向き返事をする。

『アリガトウ！』

ヘクターと声が重なる。少しびっくりするが、冒険者であるわたし達二人に掛けられた言葉だとすれば、何も不自然なことではないか。わたしはそのまま流そうとした。が、ふと見上げたヘクターの顔が真っ赤になっているのを見て、再びびっくりする。

「ど、どうしたの？」

一瞬『そんなに店員の子が可愛かったのか！？』とも思っただけで、ヒヤリとしてしまうわたし。ヘクターは口元を手で押さえながら、

「いや……、気にしないで」

と呟いた。そんなに気にする間違いないよ！と声をかけるべきか迷ったが、言えば言う程ドツボにはまる予感がして、やめておいた。

店を出るとどこかの店から良い匂いがする。お昼の時間が近いというのだ。わたしとヘクターは皆と待ち合わせ場所に指定した食堂へ

向かう。

道中も祭の準備をする町民の姿をいくつも見かけた。ポスターを貼ったり、色紙で装飾されたランタンをロープで吊したりと楽しげだ。ただいずれも黄色と青で統一されていることから、アルフレートが話していた町の景観を守るという法律をきちんと守っている姿勢が見えるのが面白い。

「なんか楽しみになってきちゃったなー、お祭り」

わたしが言っているとヘクターが笑う。

「今までは楽しみじゃなかったの？」

「だって、一応ヤツキさんの護衛で来てるんだし……。モンスターの巣になってるかもしれない所に突っ込むのは、やっぱり怖いのが分つていうか……」

そうごによごにと言いかけたところで、前を歩くローザを見つけた。フロロも一緒だ。わたしが指差すとヘクターが声を掛ける。

「おい」

二人が同時に振り向き、わたし達に向かって手を振った。

四人揃って食堂の扉を潜る。お昼時だから人々の話し声でこた返っていて店内はかなり賑やかだ。フロロが店内を一周して戻ってくる。

「アルもイルヴァもまだいない」

「やっぱり遅いのはその二人か」

ローザが大きく溜息をついた。わたし達はとりあえず席に着き、先に注文を済ませることにする。

「わたしイカフライとエビピラフ！……：そういえばヤツキさんは？」
「エントリーの申し込みってそんなに時間かかるものなのか。わたしは疑問を口にした。」

「あたしはグラタンと甘いものにしようかなー。……：そういえば待ち合わせ場所も伝えてないんじゃないかなかった？」

ローザがメニューをめくりつつ、眉根を寄せる。それってまずいんじゃない？と言おうとした時、食堂の入り口からヤツキさんが現れたではないか。イルヴァも一緒に二人で荷物を抱えながらやって来る。

「買い過ぎちゃいましたあ」

イルヴァが荷物を床に置くなり言った言葉にわたしは頬を引き攣らせる。これ、全部が新しい衣裳なんだろうか。持って帰ることを考えているのだろうか、この娘は。

「ヤツキさんに丁度良いところでお会いして、付き合ってもらってたんです」

「いやー、良い荷物持ちにされちゃいました」

自分で言って頭を掻くヤツキさん。依頼人だということをここにいる誰もが忘れている、そんな気がする。

「あとはアルフレートだけか」

ヘクターが一つ空いた席をちらりと見て呟いた。

「遅くない？」

もう料理は半分以上片付いてきているというのに、今だ姿を見せないアルフレートを思ってたしはばやいた。

参謀長である彼が戻ってから、とフロロからまだ何も聞いていないせつかく昼食を取りながら話を聞きつつ今後の展開を考えようとしていたのに、ヤツキさんのギターに関するあまり興味の無い話を聞かされてイライラとしてきてしまった。

「アルにはもう一度話すからいいよ。どうせ大した話し聞けたわけじゃないし」

フロロはそう言って不思議な色の炭酸飲料を飲み干した。

「あら珍しい。フロロが情報聞き逃すなんて」

ローザも食後のお茶に入っている。

「誰に聞いても口が堅いんだ、これが。多分箝口令ひかれてる感じ

だね」

「そんなに徹底してるわけ？」

わたしは少し驚いてしまった。

「テスト期間中以外に炭坑に入ろうとする奴がいたら、禁固刑なんだってさ。これだけは皆はりきって教えてくれた。牽制の意味が強いだろうけど」

フロロの言葉に皆顔を見合わせる。徹底しているというより、ここまできるとおっかないではないか。

「で、これが唯一収穫出来た情報なんだけどさ」

フロロは声をひそめる。メンバーはテーブル中央に顔を寄せ合った。いかにも地元の人間、という風体の若者二人組の話を隠れて聞き耳立てて手に入れた情報だ、とフロロは前置きした。

「始めは『祭りの準備に男手ばかり借り出されて疲れちまう』、とかの愚痴を言ってたんだけどさ、『しょうがないだろ、タージオ山を鎮める為だ』とか言い出したんでこりや聞き逃せないなって思ってたんだよね。その二人も聞かれちゃマズい話だからか大分小声だったけど」

「よく聞けましたねえ……。どんだけ近くに寄ってたんです？」

ヤツキさんが感心気に聞いたのでわたしが答える。

「フロロはちよつと特殊な耳をしてるのよ」

「そ、俺に掛かったら陰口なんて……。まあいいや。で、『早く解決してほしい』だとか『ギターなんかくれてやる』とか『昔の奴らも余計な事してくれるよな』とか言ってたね」

「さっぱりわかんないですう」

イルヴァがイルヴァらしい台詞を言った。フロロはにやりと笑う。

「俺の解釈で申し訳ないけど、ようするに『タージオ山には呪いがかけられていて、そのままだと町に都合が悪いもんだからギターで釣れた冒険者にどうにかして欲しい』って話してみたいだよ？」

「な、な、な」

ローザの顔が怒りに変わっていった。気持ちはわかるが「なるほど

ね」という思いの方が強いわたしはローザの肩を叩く。

「これで少し納得いったじゃない。ギターを掛けた競争なのになんで炭坑に潜ってこなきゃ行けないのか、ってこと。よく考えると不自然なもの」

わたしの言葉にローザは「確かにね……」と頷いた。ヤツキさんは流石にシヨックが大きかったらしく、呆然とした様子だ。暫くした後、口を開く。

「……で、でも、なんでわざわざそんなことを……。ちゃんと頼めばいいじゃないですかあ」

「悪いけどヤツキさんもそれは言えないんじゃない？」

ローザが意地悪な目でちらりと見た。何だかわかっていなそうな彼にわたしが言葉を続ける。

「ようするに、こういうイベント事にしちゃえば、冒険者を雇うお金は掛かんないどころか祭りで盛り上がってお金入ってくるじゃない」

ヤツキさんは話しが飲み込めたのかがつくりと肩を落とした。

「やっぱり怒ってるんすかあ？」

「当たり前でしょ！」

眉を吊り上げるローザをヘクターが「まあまあ」と諫める。

しかしそうなると、ますますアルフレートの話しを聞いてみたい。

彼ならまだ何かを知っているかもしれないし。わたしは未だ埋まらない空いた席を眺めた。

わたしは再び一人になってバンダレンの町を歩いていた。アルフレートを探すことがまず第一だ、とバラバラになって町を歩いてみることにしたのだ。青と黄色の旗が並んで揺れる通りを歩く。先程の話しを聞いた後だと祭りの準備に盛り上がる町をどうしてもどこか冷めた目で見てしまう部分もあるが、やっぱりお祭りは良いものだ。駆けていく子供達を見るとそう思う。楽しんでいる心は本当なのだから。

さて、目的はアルフレートだ。彼の行きそうな所、といってもわたしにはなかなか思い浮かばない。楽器屋……とも考えたが、どうもしっくりこない。しかし覗いてみるだけ覗いてみることにした。

「やっぱりないか」

町で一番大きな店、と聞いて答えのあった店に来たのだが、目立つ風貌のはずのアルフレートの姿はなかった。彩り豊かな店内を後にしながらふう、と嘆息。期待は薄だったので落胆は無いものの、次の目的が浮かばない。こうなったらレビテーションの魔法かなにかで町を上空から見みたいな、と考えたところである建物が目についた。古い建物が多いこの町で唯一によつきり頭を覗かせている建物。教会だろうか。近づきながら建物の様子を観察していると随分大きな教会だとわかった。

教会も祭りの会場に使われるらしく、多くの人が出入りしている。わたしもその流れにのって中に入ると上に行ける階段は無いものかとうつつく。誰かに聞いた方がいいかな、と思ったところで奥に続くらしき廊下を見つけた。普段なら許可を取らないことには入りずらそうな雰囲気ではあるが、祭りの準備で騒がしい中、わたしに注目する人もいなかった。そのままお邪魔させてもらう。

「あ、これかな？」

昔の教会にありがちな狭くて急な階段を見つけ、わたしは呟いた。かなり上まで行けそうな気配ではある。

「うわあ、きつつ……」

階段をのぼり続けて太腿が張ってきたところでわたしは唸ってしまった。しかしゴールは近いようで頭上が明るくなってくる。気合いを入れ直し一気に上りきったところで小さな扉が目に入ってきた。少し様子を窺った後、扉を開けた。ふわっと風が体を押してくる。明るさに目を細めた。バルコニーのように壁の無い開けた場所だ。鐘楼、っていうんだっけ。目の前にぶら下がる鐘を見て考える。今鐘の鳴る時間になったら少々マズいことになるわね、と思いつつ下を覗く為に柵の方へ足を進めた。胸のあたりまでくる高い柵から身を乗り出し、表を覗いた時だった。

「何かあったか？」

見知った声にわたしは思わず飛び上がる。

「うわわっ！びっくりしたあ！」

柵の表側、わずかな隙間に腰掛けていたアルフレートが立ち上がった。

「ちょっと、危ないわよ」

わたしが言うとはいい、と柵を乗り越えてくる。

「もう、探したのよ？こんなところで何してたの？」

「……少し考え事をしていたな。そんな時間だったのか、気づかなかった」

雲の流れにぼんやりと目をやりながらアルフレートは答える。なんだか珍しく神妙な空気にわたしは戸惑ってしまった。

風が気持ち良い。でもそんな感想も言い難い空気の中、

「何かわかったのか？」

アルフレートがようやくわたしの顔を見ると聞いてきた。

「ちょっとね。アルフレートを探そう、ってことになった話があるのよ」

わたしは先程のフロロの話しを聞かせる。アルフレートはふう、と息を吐いた。

「なるほどね、まあ大体想像してた通りの展開ではあるな」

「やつぱり？」

わたしも何となく疑ってはいた話した。アルフレートが考えないはずがないだろう。

「それでアルフレートなら昔、この町に起きた『何か』を知ってたんじゃないかって話してたのよ」

わたしの話しに「ふーん」とあまり気乗りのしない返事をする。何か変だな、アルフレート。わたしが疑うような顔をしているのに気づいたようで、アルフレートは首を振った。

「残念ながら知らないな」

その様子が『知らない』という返事の意味合いよりも、ぼんやりする頭を振り払う様子に見えた。

「普通に考えれば精霊が怒っているのかもしれないな。山を散々掘り返して、そのまま放ったらかしにしたんだ」

「それで何か町の人に危害を加えたりしているのかも……」
わたしが言つとまた首を振る。

「……と思うだろ？残念ながら精霊だつてそこまで暇じゃない。『馬鹿な人間どもだな』ぐらいにしか思わんさ。精霊の力が働かなくなつた土地で、困るのは人間なんだから」

「じゃあなんでそんな話したのよ……」

わたしの真つ当な突っ込みにアルフレートは肩をすくめた。

「とりあえずそれは無い、って言いたかつたんだよ。そんな精霊の姿は見えていない」

そうか、アルフレートは精霊の姿が見えるんだつた。それなら町に入つた時点で気づいているか。

「じゃあ他に何か事件があつた、とか知らないの？関係ないような

ものでも実は根っこで繋がっていたりするかもよ？その時代に書かれた本とかにヒントがあったりするかも」

「うーん……」

唸るアルフレート。

「物語の類いは読まないもんでわからないが、知っている範囲では無いな。……ということは、結構小さい事件だったりするかもな。誰も目にとめないような……」

誰も目にとめない小さないざこざ。それが膨れ上がってはじける。何かざわついたものがわたしの心に残った。

「とりあえず皆の所、戻ろうよ」

わたしが言くとアルフレートは再び空に視線を移す。わたしは思わずそちらに目を向けた。……何も無い。ただ綺麗な雲が流れる景色が広がるだけだ。遠くにアルフォレント山脈が見える。その手前にあるのが廃坑のあるタージオ山だろうか。

ピン、と不意に聞こえた弦のはじける音に驚いて、アルフレートを見る。彼が小さなハープを手にして弦をはじいていた。一瞬身構えてしまったが、歌うことはせずにただただ弦をはじいている。目を瞑り風に髪をなびかせながら奏でるアルフレートの音楽は、信じられない程美しい。わたしは思わず魅入ってしまった。

「……エルフっばいだろう？」

にやりと笑うアルフレートに、わたしは苦笑する。

「そういうこと言わなければね」

「だから私らしいんだよ。……さ、行くか」

教会を出たところで目に入った、通りにいる人物にわたしは「あ」と声を漏らす。白いローブ姿の少女が見るからに「困った」といった様子で辺りをきよるきよると窺っていた。

「あれ、サラじゃない？」

「誰だ？」

アルフレートの返事にわたしは呆れて溜息をつく。

「だから昨日会った学園のグループいたでしょ？その一人よ。ラシヤのプリーストのサラっ」

「ふうん……」

「ふうんって何よ、もう……、サラ！」

わたしが声を張り上げるとサラが振り向き、こちらに駆け寄ってきた。

「リジアーっ、悪いんだけどさ……、フツキさん見なかった？」

サラの言葉にわたしは首を傾げる。

「フツキさんって、サラ達の依頼人の人でしょ？見てないけど……」
「そっかあ」

サラは眉を下げて肩を落とした。わたしは深く聞いていいものか迷う。何しろ昨日の事があったばかりだ。サラに協力してあげたい気持ちはあるものの、そのせいでサラが仲間から怒られたりしたら悪い。

「いい大人がいなくなったぐらいで慌てなさんな」

きっぱりと言うアルフレートにサラは目を丸くした。

「ま、まあそうなんですけど……」

「ちよつとアルフレート！ごめんね、サラ」

謝るわたしにサラは手を振る。

「うっん、私こそごめん。いきなり説明も無しに聞いて。……実はね」

「サラ！」

後ろから掛けられた声にサラはびくりと肩を震わせた。わたしはサラの背後に視線を走らせる。眉間に皺を寄せたアントンが立っていた。

「げ」

思わずわたしは顔をしかめる。サラは困ったようにわたし達とアントンを見比べ、

「ごめんね」

そう呟くとアントンの方へと走っていった。アントンはわたしとアルフレートを睨みつけるとそのまま去っていく。その後を追いかけるサラを、わたしは掛ける言葉も無く見つめていた。

「不安定な二人だな」

アルフレートが言った言葉の意味は「不安定な関係」だと言いたかったのか、よくはわからなかった。

「何かあったのかなあ……」

わたしが言うところアルフレートはにやりと笑う。

「その内わかるさ」

ようやく彼らしい顔つきに戻った。頼もしいというべきか。

「あー、疲れた疲れた。誰かさんのせいで今日はしこたま歩いたわー」

夕食の席に着くなり嫌味をまき散らしたのはローザ。ばらばらに宿に戻ってきたメンバーの中で一番最後に戻ってきたのが彼女だったのだ。何気に心配だったのかもしれない。

「なんだ、私も意外と人気者だったんだな」

アルフレートはズレた感想を漏らしローザに睨まれる。

各自注文を済ませて一息ついた時だった。アルフレートがヤツキさんに向き直る。

「エントリーは済ませてきたのか？」

「はい！ばつちりつすよ！」

「それは結構。さて、少し聞きたいことがあるのだが」

アルフレートの威圧感にやられたのか、ヤツキさんがもじもじし始める。

「な、なんすかね。もう黙ってたことは無いつすよ！」

「別に尋問しようとしてるわけじゃない。今日あったことを一から話してくれればいいんだ。エントリーの受付はどこであったんだ？」

「町の中心にある役場つす。役人さんが……5人ぐらいいたつすかね？書類書かされて、楽器の演奏のスキルを簡単に聞かれて、これ貰ってきたつすよ！」

ヤツキさんが差し出したのはピカピカと光るバッジ。丸に花が彫られたなかなか素敵な物だ。アルフレートは手に取ると両面をちらつと見てすぐにヤツキさんに返す。

「これがエントリー者の証つてわけだな」

「無くしたら大変つすよね！渡しておきましょうか？」

「……自分で持つてなさい。いい大人なんだから」

アルフレートは呆れたように言いつつも、こめかみを引きつらせて

いた。

「これはテストが始まってから着けるの？」

わたしが聞くとヤツキさんは首を振った。

「いや、別に今から着けてても良いって言ってたっすよ。でもテストが始まったら必ず着けるって言われたっす」

「エントリー用紙があつたと言ってたな？何を書かされた？」

そう聞くアルフレートの目がきらりと光った、ように見えた。

「えっと、名前と職業と、協力者の人数と、出身地、……だったと思うっす」

それを聞くと満足そうにアルフレートは手をこすり合わせ、椅子に深く座り直す。

「なるほどね、よく分かった」

何が、とわたしが聞こうとした時、わたし達のテーブルに近寄ってくる人物に気がつき言葉を飲み込んだ。日に焼けた肌に刈り上げた金髪、鍛え上げられた体はつい魅入ってしまう。

「……デイベス」

ヘクターが驚いたように声を掛けると、デイベスは昨日とは違って真剣な面持ちで軽く手をあげた。

「……ちよつと話せないか？」

ヘクターは少し迷ったようにわたし達を見ると口を開いた。

「ここのなら」

それを聞いてデイベスは一瞬困ったように眉根を寄せるが、深く頷く。

「わかった。隣り、いいかな？」

そう言つてわたしの隣りの空席を指差した。わたしは「どうぞ」と席を引く。

「依頼人は見付かったのかね？」

アルフレートが聞くとデイベスは面食らったように目を大きくした。

「知つてたのか！」

「実は……」

わたしは昼間会ったサラの話を言っただけ。アントンの下りは告げ口するようで気が引けたが、話しの腰を折られた理由を説明するために全て有りのまま話すことにした。聞き終わるとデイビスはふう、と溜息をつく。

「ったく、アントンはどうして……」

頭を掻いてから愚痴を続けそうになるのをわたしの視線に気づいて止めるデイビス。

「悪かったな、その……」

「ううん、いいいいいよ」

この人から謝られても困るだけだ。わたしは慌てて手を振った。

「実はまだ見つかっていないんだ」

「えっ！」

わたしは暗くなった町を食堂の窓から眺め、声をあげてしまった。

「まだって……本格的にいなくなっちゃった、ってことじゃない？」

わたしの言葉にデイビスはゆっくり頷いた。ステーキ肉を頬張りつつイルヴァが口を挟む。

「どこ行っちゃったんれふか？」

「エントリーの申し込みに行く、って朝出て行ってそれきりなんだよ……」

だから昼過ぎの時点で少し慌てていたのか。わたしは来たばかりのチーズフライに息を吹きかけながら顔をしかめた。

「ただの祭事参加だとは思わない方が良いな、とは思っていたんだが……」

そのデイビスの呟きにわたし達は顔を見合わせる。

「にいちゃん、その話し続けたいなら俺らの部屋に来てくんないかな」

フロロが言つとデイビスはきょとん、とした後、周りを見渡した。

「ああ……そうか、後でお前らの部屋に行くよ」

そう言つと席を立つ。

「一緒に食べて行けばいいのに」

わたしが言つと首を振るデイベス。色々あるんだろうけど、面倒だなあ。

コンコン、と遠慮がちに響いたノックの音にヘクターが扉を開ける。

「悪いな」

顔を見せるなり謝罪するデイベスにヘクターは苦笑した。

「入れよ」

ヘクターがそう言つて部屋の中を指し示すとゆっくり入ってくるデイベスと、彼の後ろから隠れるように入ってくる黒髪の男。

「えっと……」

結局名前もわからなかった軽戦士風の男だ。わたしが困つたように見るとデイベスが紹介してくれる。

「仲間のイリヤだ」

ぺこ、と頭を下げるイリヤ。なんだか大人しそうな人だ。二人がソファに座るなりアルフレートが口を開く。

「まず確認しておきたい。我々に望む事はなんだ？」

「フツキさんの搜索を手伝ってもらいたい」

デイベスははつきりと言つた。

「見つからなかった場合は？」

「明日一日、手伝ってもらうだけで構わない。元からそのつもりだ。見つからなくてもお前らはテストを受けに行つてくれ」

デイベスの答えに満足したのかアルフレートは頷いた。

「二人で来たつてことは、あのピリピリしたお兄さんはまだ揉めてんの？」

ローザの質問にデイベスは頭を掻いた。

「実はそうなんだ。今はサラ達がなだめてる。明日までにはよく言い聞かせておくから、お前らには絶対絡ませないようにするよ」

「それは気にしなくていいよ」

ヘクターは手を振り笑う。

「なんだ、仲悪いのか？」

アルフレートの遠慮無い質問にわたしはヒヤリとした。ヘクターは曖昧に笑うと口を閉ざしてしまう。やっぱり話したくないんだ……。……まあいい、それよりさっきの話したが『ただの祭事参加だと思わない方がいい』とか言ってたな？ん？」

アルフレートはデビスに詰め寄った。デビスはイリヤと顔を合わせる。そしてヤツキさんの方をちらりと見た。

「な、なんすか？」

ヤツキさんは戸惑ったように手足をばたつかせる。

「……フツキさんが過去にこの町で何かあったか知っていたりしません？」

イリヤの声をようやく聞けた。静かだがよく通る声だ。ヤツキさんは「え？え？」と顔を突き出す。この様子だと何も知らないようだが。

「何故そんなことを？」

ローザが聞くと再びデビスとイリヤは顔を見合わせる。

「行きのバスの中で聞いたんだ」

イリヤがわたし達の顔を見回し言った。

「誰も聞いてないと思つての独り言だったみたいだけど、『ようやく裁きの日が来る』って言っただけ？」

わたしは思わず腕を擦る。何だかひどく黒いものの気配を感じたからだ。

「エントリーの申し込みに行った後、何かあったんじゃないかと思つて心配なんだよ。何て言うか、その……余計ないざこざ起こしたか何かで捕まっていたり……」

イリヤの話したいことはよくわかる。わたし達はすでにこの祭りの裏にあるものを嗅ぎ取っているのだから。わたしはフロロの顔を見た。視線に気づいたフロロは頬を掻いた後に口を開く。

「不安にさせるようで悪いんだけどさ」

そう前置きした後、彼は昼間の話を二人に話して聞かせた。祭の

準備に愚痴を零していた若者二人の話だ。二人は眉間に皺寄せながらもあまり驚いた様子は無い。やっぱり何か感じるところはあったのかもしれない。

話を聞き終わった二人は揃えたようにふう、と大きく息を吐いた。「やっぱり何かあったんだろうな……」

デビスは肘掛けを指で叩く。アルフレートが再びヤツキさんに向き直る。混乱しないよう、ゆっくりと質問していった。

「大した話しは期待していない。知っている範囲でいい。フツキ氏は何年前から音楽祭に参加しているんだ？」

「ぼ、僕がまだ音楽の教室に通っている時からだと思っんで、5年前からっすかね……？」

「音楽祭自体の始まりが確か10年前からだから半分は参加しているわけか。3年前にギターを演奏した吟遊詩人がいたと言っていたな？その時もいたのか？」

「いたっすね。フツキ先輩を慰めに行ったんで覚えてるんすよ。演奏も隣りで聞いてて、あんまり見事な演奏なんで先輩も『こりゃあ負けちまったな』って悔しそうに笑ってたっす」

「今何と？」

アルフレートに人差し指を突き付けられ、ヤツキさんは慌てる。

「い、いや先輩は立派だったっすよ！悔しそうなのは確かだったんですけど、笑顔で『負けだ』って……」

「余計な脚色はいらん。笑顔だったって言ったな？3年前は純粹に楽しんでたわけだ。その後、その吟遊詩人がギターを辞退して町を去った、という話しの時はどんな様子だ？」

アルフレートの質問が段々キツイ口調になっていく。

「ヤツキさん、覚えている範囲でいいんだからね？」

わたしが声をかけるとヤツキさんはほっとしたように息を吐いた。やっぱりテンパってきてたか。

「正直、僕もショックだったんで覚えてないっす……。ただ喜んではいなかったんじゃないっすかね。他の冒険者の人でいたんすよ。」

『これで来年もチャンスがあるぜ』って喜んでるのが。なんだか無性に腹が立ったんで覚えてるんす……。先輩はそういうのが無かったんで」

「その時、何か疑問に思うことがあったのかもね、フッキさん」

ローザの意見にわたしも頷いた。わたしは吟遊詩人が呟いたという台詞を思い出す。

『私には弾けない』

どういう意味なのだろう。

「……とりあえず、明日はフロロが忙しそうね。フッキさん探しに、祭りの真相も探ってもらわなきゃ」

わたしが言っているとデビスが身を乗り出した。

「それならうちの盗賊も協力させるぜ。やっぱり情報収集といったら盗賊だよな」

よかれと思って発言したデビスに、フロロは思いっきり顔をしかめた。

見えない全貌

翌朝、よく晴れたバンダレンの町、中央広場に13人が集まった。わたし達6人にヤツキさん。明らかに不機嫌顔で少し離れたところにいる緑頭の戦士アントン。ヘクターと話している体格の良い戦士デビス。わたしとローザに「ごめんね、ありがとう」と繰り返すかわいこちゃん、プリーストサラ。噴水の淵に座り気配が消え気味の軽戦士イリヤ。そのイリヤの傍らに立つ魔術師セリス。

フロロの隣りにいるプラチナブロンドの美人シーフ、ヴェエラを見てわたしは不安になる。彼女、明らかに緊張しているのだ。両手の指を忙しなく合わせたり爪をいじったり、顔色がどう見ても良くない。人見知りするのか？とも思ったが、どうもこれからの動きに不安を持つているように見える。隣りでその様子を見るフロロが露骨に嫌な顔をしている。何度か彼女に話しかけ確認を取っているようだが、こくこくと頷く以外の動きが無い彼女に呆れたように首を振っていた。……大丈夫なのか？

「さてと、予定外にも協力しあうことになったわけだが」

アルフレートがわたし達に言い聞かせるように声を響かせた。

「同じ学友のトラブルを我々としても放っておくわけにもいかない」

「んなこと言って恩売るつもりなんだろ」

アントンが彼らしい暴言を吐き、デビスが咎めようと向き直った時だった。アントンの目の前に火柱が現れ、「ぎゃあ！」という彼の悲鳴が広場に響いた。

「私は話しの腰を折られるのが大嫌いなんだ」

アルフレートの突き出した指先から煙のようなものが立ち上り、消えた。セリスがケタケタと笑う。彼女、どうやら根っからのドSのようだ。

「昨日少し話し合ったことを確認させて貰おう。まず、フロロとそちらの盗賊には個人で動いて貰う。目的はとにかく情報を集めるこ

と」

フロロとヴェラが頷いた。

「次に私とヤツキ氏が組んで動く。目的は主に役場を中心にした情報集め。エントリーに関する問い合わせという名目で音楽祭の主催側に近づく」

ヤツキさんがアルフレートを見上げてこくこくと頷く。

「残りは4つにバラけて東西南北に散ってもらう。これでいいかな？」

デイベスが大きく頷いた後、一歩踏み出した。

「みんな聞いてくれ。まだ状況もよく分からない中、雲を掴むような話で戸惑っていると思う。ただ何か掴んだとしても深追いはしないでくれ。これ以上の混乱に陥る事だけは避けたい」

皆がデイベスの話しに頷く中、アントン一人が「けっ」とそっぽ向いた。

「次の昼休憩に集まる時には必ず顔出してくれ」

デイベスの言葉にわたしは手を挙げる。

「その場所だけど、良い店があるわ」

わたしは到着した日に入った山賊料理の店の名前を出す。

「騒がしい店だから、話し合いにはもってこいだと思うけど」

あそこなら周りに会話を聞かれることを警戒する必要が少ないだろう。皆の了解を貰い、わたし達は町の中に散ることにした。

「南ブロックってあの武器屋のある方か」

隣りにいるヘクターが通りを眺めながら呟いた。わたしと回る事になったのがその商業地区なのだ。一緒に回るメンバーを決める際に「くじ引きにする？」という提案があったのだが、アントンなどと一緒になる可能性を考えてわたしが激しい拒絶を見せたらこういう組み合わせになったのだ。……皆には悪いが幸せを感じていたりする。

「どこから回ろうか」

とりあえず南ブロックまで来てみたものの、何をどうしたらいいのかさっぱりなわたしは、隣りを歩くヘクターに声を掛けた。

「望み薄かもしれないけど、あの武器屋の親父に聞いてみない？」

ヘクターの言葉にわたしは首を傾げる。その様子に彼は話しを続けた。

「少しでも顔見知りだったら何か聞かせてくれるかもしれないし」

「あ、なるほど」

人間不思議なもので、名前も知らない相手でも『全く知らない人』

よりは冷たくあしらえないものなのだ。幸い武器屋は南ブロックに入ってすぐだったはずだ。手始めに行ってみることにする。昨日はポスターが張つてあるぐらいだったはずの通りが、かなり賑やかな事になっていた。上空には黄色と青の旗が揺れていて、店という店の壁に楽器を象ったハリボテがくっ付いている。

「……こんな状況じゃなかったら楽しめたのに」

わたしのぼやきにヘクターが笑う。

「いいよ、別に。はしゃいでも」

「流石にそれはちよつと……」

ただでさえあまり関係性の無い人の搜索、ということまで気が緩むと緊張感を無くしそудだというのに。ただ、少し意地悪なことを言うヘクターにわたしはなぜかときめきを感じてしまった。すでに緊張感が無いのかもしれない。

「あ、あつた。ここだよね？」

一軒の店を指差し、わたしは声を弾ませた。が、準備中を告げる札を見て肩を落とす。と、そこに扉からお髭の素敵なおじさまが顔を覗かせたではないか。

「お、どうした？昨日の今日で。今から掃除して、そっから開けようと思つてたのに」

「荷物持ちなら手伝うからさ、何か話しが聞けないかと思つて」

ヘクターが言うとおじさんは「いらんいらん」と言いつつ笑顔で店

に入れてくれた。ソードが並ぶ店内に入ると、わたしは再び見回してしまう。独特の匂いは革の匂いなのだろうか。

「で、何の用件なんだ？」

カウンターに入り用具を片しながらおじさんは尋ねる。

「あんたの立場が悪くなるなら無理に聞かない。音楽祭について何か知らないか？」

ヘクターとおじさんはしばし目を合わせる。するとおじさんはやつ、と笑ったではないか。

「あんたついてるよ。『余所者』扱いの俺の所に来るのが、一番良い方法だ」

わたしとヘクターは思わず顔を見合わせた。

「どうせ町の連中は口閉ざしたまんまだっただろ？」

「そうなんですよ。うちのシーフが『箝口令が敷かれてる』とか『テスト期間以外に廃坑に入ったら禁固刑』とか話してて。……随分厳しいですよ」

わたしは勧められた椅子に座りつつ言ってみた。おじさんはうんうんと聞きつつパイプを口にくわえる。

「この町はな、移住者が多いんだ。自由な町に憧れて遠くから移ってくる奴が多いんだな。それだけ聞くと良いように感じるかもしれないが、実際は元々住んでる『地元民』と『余所者』、はつきりグループが別れちまってるのさ」

おじさんはそう言うのと煙をふー、と吐き出す。わたしに遠慮してか顔を背けながら。

「祭の主催なんかを担ってるのは全部『地元民』だ。金出してるのはこっちも同じだっていうのに口出し許さねえ雰囲気作っちゃまって、感じ悪いんだこれが。……まあ祭りの最中は売り上げも上がるし、それは別にいいんだけどよ」

「どうして音楽祭が始まったか知ってるか？」

ヘクターが聞くとおじさんはパイプを口元に運ぶ動きを止めた。

「……なんだ、あんたらが知りたいのはそっちか。なら尚更話しは

早い」

そう言うのと再びにやつ、と笑うのだった。

「てつきり廃坑の内部が知りたいんだと思っただぜ。それを聞きにくる冒険者は多いからな」

おじさんは髭を触りつつ「でもまあ」と続ける。

「そっちは聞かれても、正直知らないんだよな。祭りの参加者だけでなく、普段から廃坑は立ち入り禁止だ。毎年 of 参加者の話し聞く限りじゃ結構荒れてて、帰ってくるのも大変みたいだな」

「モンスターがいるの？」

わたしが聞くとおじさんは頷く。

「しょうがない事だろうねえ。荒らすだけ荒らして管理もしてない状況じゃ、そりゃモンスターも住み着くわ、って話だよ。それを定期的に駆除してもらう意味もあるんだろうな。ま、お嬢ちゃんは大丈夫。ここに立派なナイトがいるじゃないの」

そう言うとおじさんの肩を叩いた。思わずわたしは顔の頬が熱くなる。

「それよりさっきの話の続きを」

ヘクターが静かに軌道修正する。おじさんはつまらなそうに舌打ちした。

「少しは楽しませろよ……。まあいいや、それで音楽祭の始まりだったよな」

おじさんはすつ、と目を瞑った。

「10年前だ。俺がこの町でまだ店を構える前、露店業で食い繋いでた頃だな。毎日のように夜になると不気味な唸り声、っていうのかな、そんなものが聞こえるようになったんだ。原因はすぐに分かった。タージオ山の廃坑だ。穴ぼこだらけになっちまったせいで風が吹くとそんな音が聞こえるんだよ。それまでそんな事はなかった、って話しだったけどきつと気象が変わったのか、今までは気付かなか

ったかどつちかだろうな。

俺みたいな移住者は割と冷静な目で見ていた。ただ、地元民の怯えようは異常だったよ。教会にやたら人が詰めかけるし、民家は呪い返していうのか？そういう類いのお札で埋め尽くされて、そっちの方がよっぽど気味悪いしよ。

タイミング悪いことに当時の町長が死んだ。『呪いだ』とか騒ぐ奴らが余計増えて軽くパニックになってたな。移住者の間じゃ鼻で笑ってる奴らが多かったけどよ。だってすごいじいさんだったんだぜ？それからすぐだよ。町長が管理してた、ってギターをひっぱり出してきて音楽祭が始まる。歴史も無いのにいきなりそんな祭り始めて、人なんか来るのかよ、って言ってたら結構賑わうんでびっくりしたな。音楽の都に住んでるのにそっち方面は疎いんで悪いんだが、有名な職人なんだってな。……そうそう、ビョートルっていうんだっけ。

二、三度遠巻きに祭りを見てて気付いちまったんだが、必ずギター争奪の為に廃坑に行った奴らは、3分の1は減ってるんだよな。当たり前だけどそんだけ危険な場所に行かせるんだ。それで疑問に思ってたんだ。『人数をふるい落とす為とはいえ、そんな危険を冒させて良いもんなのか？』ってね。売りもんにしてるのがギターなんて楽器だろ？当然参加者は音楽家が多いわけだ。最近じゃ冒険者連れてくる奴らの方が多くなったが、それでも命落とす奴はいる。始めは『それだけ祭りを引っ張りたいんだろうな』と考えてたさ。こんだけ集客望めるようなお宝、他にないだろうしな。でも最近思い始めてきたんだ。

『廃坑に行つて命落とす奴がいる。それこそが目的なんじゃないか？ってな』

「生け贄って奴ね」

ざわつく気持ちを押さえ、わたしはなるべく冷静に口にした。

「だってそう思わないか？参加者はギターに目眩んで冷静になれない奴ばかりだ。音楽祭には矛盾が多すぎるんだよ。俺は関係ない振りしてどうにか遠巻きに見ることに徹してるがね。正直早く無くなっちまえって思うよ」

おじさんはふー、と溜息なのか煙を吐き出した。

「その不気味な唸り声って何なのかしら。……あと町長が死んだっていうのも本当に呪いだったりするのかな」

「おいおい、お嬢ちゃん、おっかねえな。どうしてそんな風に考えるんだ？」

「実は……」

ヘクターがおじさんにフツキさんのことを説明する。『裁きの日にくる』という言葉と、いなくなってしまったということを言うとおじさんは目を丸くした。

「ありやりや、そんなことになってんのかよ。俺の考えだけど間違いないな。そいつ、捕まってると思うぜ？」

「やつぱり？何か踏み込んで行ってしまったんだと思うんだけど」わたしは唇を噛み締めた。

「何か堪えきれなくなる事があつて暴言でも吐いたかな？いいかい、あんたらに俺から助言できるのは『祭りの主催者共に気をつける』ってことだ。大方の町の奴らは祭りを楽しんでるだけ、もしくは善かれと思ってるだけだ。実情を知っているのは中心で音頭取ってる奴らだけなんだ。搜索を続けるにしても、なるべく隠れて行動した方がいい」

おじさんの言葉にわたしもヘクターも頷くしかなかった。

「あ、もし捕まっているとしたら何処に連れてかれるんだ？」

ヘクターの問いにおじさんは何とも答え難そうな顔になる。

「普通は北にある留置所に行って、刑が決まったら本格的に刑務所
だろうけどね。……ただ、凶悪犯の扱いには一つ噂がある」

「何？」

わたしは身を乗り出した。

「……廃坑に連れて行ってるんじゃないか、って話があるんだよ。
あそこは何の準備も無しに入り込んだら、それこそお終いだろうか
ら」

何度もお礼を言った後、わたしとヘクターは店を出た。もちろん、
何事も無かったような顔をしつつ。

「……どうしよう、北にある留置所に行ってみる？」

北ブロックにいるはずのローザとイルヴァを思い出し、わたしが小
声で言うのとヘクターは首を振る。

「行動起こすのは一度他の奴らに話してからにしよう。それよりア
ルフレートとヤッキさんは大丈夫かな……。大丈夫か」

主催側に近づくというさっきの話だと一番危険を冒しているのは
その二人だ。が、アルフレートがいるというだけでヘマは犯しそ
うにない。そう思ったのだろう。

「でも話し聞いちゃうと余計に動き辛くなっちゃったわね……。他
の皆は大丈夫かな？」

わたし達が武器屋のおじさんを訪ねたのは本当に幸運だったのだろ
う。もし主催側の人間にフッキさんを探しているだとか、音楽祭の
裏側を探っているような言葉をにおわせたら。

「大丈夫、信じよう」

ヘクターの笑顔にわたしは頷いた。わたしを安心させようとしてく
れる、そんな彼をわたしは信じればいいんだ。

「ちよっと早いけど店に行こうか」

ヘクターの意見にちよっぴり肩を落とすわたし。もうちよっと歩き

回りたい気もするが、遊びに来てるわけじゃないし、しょうがないか。

「……中央広場の方通って行こうか。そしたら誰かしら会うかもしれないし」

待ち合わせの山賊料理屋はバスターミナル側、東ブロックだ。直線で行けば早いけど遠回りの申し出にわたしは「うん！」と答える。わたしに尻尾があればブンブンと振っていたに違いない。

広場まで戻って来ると食べ物匂いが漂ってきた。

「うわあ、もう出店は出てるんだね」

わたしは立ち並ぶ出店を指差した。何となく二人とも足が止まる。

「……買っていいんか？」

一軒の店を指してヘクターがわたしの顔を見る。甘い匂いにすでにやられていたわたしは大きく頷いた。砕いた氷の上に果物とシロップを掛けたそれを二つ注文する。

「お兄さん達、明日は参加するの？」

鉢巻き姿の勇ましいお姉さんに聞かれ、ヘクターが「はい」と答えると、

「そう、がんばってね」

とサクラノボを追加してくれた。

広場の噴水に座り、氷を食べているうちに『アントンとかに見られたらうるさそうだ』と考えたりする。ここぞとばかりにいちやもん付けてくるに違いない。まあいいよね、こっちは協力してる立場なんだし！と開き直り、がばつと口を開けた時、ヘクターの手が止まっているのに気が付いた。

「どうしたの？ 食べないの？」

「あー、いや、『がんばってね』で思い出した……」

ぼつり、と呟くと氷の入ったカップを脇に置く。ジャケットの内ポケットを何やら探っているようだ。なんだなんだ、と見守っていた

わたしの顔の前に、何かが突き出された。

「あ、これって……」

銀のチェーンに楕円型のペンダントトップが付いたそれは、魔術師が着けるアミュレットだ。ペンダントトップは護符の力がある石を埋め込む窪みがいくつもあって、魔術師は自分で精製した石をはめ込んで使う。このアミュレットがどれぐらい強力な物かがその魔術師の力を計る一つの指標になったりするのだが、このアミュレット自体が中々お高かったりするので見習いには手が出なかったりするのだ。

「え、え、え、え？何これ、なんで持ってるの？」

わたしは上手く働かない頭をどうにか正常に保ちつつ聞いてみる。

「昨日のマジックショップで買ったんだ。リジアが二階に行ってる時」

わたしは昨日、ヘクターに付き合ってもらって入ったマジックショップを思い出す。とんがり帽子の店員がいた店だ。支給品があるので手続きに行ったんだっけ。

「え、えー！なんで！なんで！どうしてえ！？」

思わず叫んでしまうわたし。『高いのに』だとか『なんでコレを知ってるの』だとか聞きたいことは山程あるが、上手く言葉が出て来ない。

「……そんなあんまり聞かないでよ……」

わたしにアミュレットを差し出しつつ、ヘクターは片手で顔を押さえてうずくまってしまった。ぼーっとする頭で手を出すとかちやり、と手の中にアミュレットが落とされる。……これ、貰っていいんだよね？

「ありがとう……」

わたしがそう呟いた時だった。

「あー！ずるいですう！」

聞き覚えのある声に二人ともびくん！と体が跳ねる。

「イルヴァも食べたいですう、アイスー！」

バタバタと駆けてくる足音。イルヴァはヘクターのほとんど手の付いていない氷を指差した。

「これ、食べないんですか？」

「あ、いいよ、食べて」

ヘクターが言うなりかき込むイルヴァ。その後ろから彼女と二人行動していたローザが顔を出す。

「なんで冷たい物食べて、そんなに顔が赤いのよ、二人共」

ローザがわたし達を見て呆れたように聞いてきた質問に、わたしもヘクターも無意味に首を振るしかなかった。

「お先頂いてまーす」

サラがわたし達に向かってグラスを掲げた。待ち合わせに指定した山賊料理店、店員に案内された部屋に入るとすでにサラとデイビスが待っていた。

「個室なんてあったんだね、ここ」

わたしが席に座りながら言うサラがメニューを配ってくれる。

「人数聞かれて『13人』って言ったら、ここしか無いってさ。でも丁度良かったよね」

サラの言葉に皆が頷いた。かなり大きなダイニングテーブルにわたし達が座った時、続けてフロロとヴェラ、アルフレートとヤツキさんも入ってくる。珍しく不機嫌顔のフロロが気になる。何かあったな。わたしがフロロの顔を見ていると、気付いたのかわたしを見て意味深に首を振った。

「……どうしたの？」

「どうもこうもないよ。このねーちゃん、頭おかしいぜ！」

わたしの小声の質問に、フロロは大声を張り上げた。ヴェラが身を小さくしつつメニューで顔を隠している。

「面白そうな展開だな」

アルフレートがにやにやと笑った。こっちは上手くいったらしい。

「最悪だったことは間違いないね」
フロロは舌打ちしつつメニューを捲っていく。わたしが聞いていいものか、と迷っているのと店員と一緒に残りのメンバー、アントンとセリス、イリヤが入ってきた。セリスとイリヤが席に着くと、残る席がヘクターの隣りしか空いていない状況を見たのか、アントンは眉間の皺を深くする。が、サラとデイベイスが無言で睨みつけるとどさっ、と乱暴に座った。

でっかいクレマー

「じゃあ各自報告していこうか」

全員の食事が揃ったところでデイベイスが皆を見回した。

「じゃあ俺たちからいくぜ？俺とサラはこの辺り、東ブロックを見て回ったんだが」

デイベイスの隣りでサラが頷いている。

「正直、どう動いていいものか分からなくてさ。というのも下手に音楽祭について嗅ぎ回ったら、今度は俺たちが目を付けられる可能性があるしな……。そんなわけで丁度東ブロックにある図書館に行ったんだよ。俺はこういうの苦手だったんだが、サラが色々調べてくれた」

デイベイスの後をサラが受け継ぐ。

「調べたのは主に新聞ね。タージオ山が廃坑になった経緯と、楽器職人ビョールトのことを調べてみたの」

サラの話しはアルフレートが言っていた『砂漠の石』に始まったゴールドラッシュの話し、そして今はモンスターの巣窟になってしまったタージオ山の有様を嘆く新聞記事の話しだった。

「ビョールトの方は思ったより収穫無かったのよね……。バンダレンの町の新聞なのにあんまり記事が無かったのよ」

「砂漠の石の時代の方が新聞なんて無い時代じゃないの？」

わたしが聞くとサラも首を傾げた。

「うん、回顧録じゃないけどそういう類いの記事はあったのよ。それなのに新聞がすでにある時代のはずのビョールトの方は全然。唯一『新鋭の楽器職人が選んだのは同じく新鋭の楽器ギターだった』とかいう当時の流行通信だけだったのよね」

「……当時はあんまり騒がれてなかったのかな？死んでから有名になるってやつ」

イリヤがぼつりと言った言葉にヤツキさんが首を振る。

「おかしいっすねえ、ビョールトは生きてる当時から売れっ子だった、って話だったはずですけど……」

「故意に消されたんじゃないか？」

アルフレートがさりと云った。皆押し黙ってしまふ。なんだか調べれば調べる程、気味の悪い町に思えてくる。わたしがそんな事を考えていた時だった。

「じゃあ次は俺が言う」

フロロが眉間に皺寄せつつ口を開いた。が、

「特に無し。以上。……あ、ついでにこの姉ちゃんも何も無いからそうきっぱり言って、ヴェラを指差す。」

「何だよそれ」

アントンがムツとしたように口を尖らせた。

「文句ならあんたの仲間に言えよ。俺は感謝して貰いたいぐらいだ」
「なんだか随分とやさぐれてしまったフロロにわたしは戸惑いっつもヴェラを見た。」

「……だってしょうがないじゃないですか！学園じゃ聞き込みの仕方なんて教えて貰えなかったですし！」

涙目で立ち上がるヴェラにフロロは舌打ちする。

「あんたはそれ以前の問題だよ。……バカみてーに本名言おうとするわ、事情をぺらぺら喋ろうとするわ……、あげくの果てにギルドに挨拶してないっつーじゃん。俺が止めてなかったらあんたらパーティーまとめて町追い出されてたんだぜ？あんた盗賊向いてねーよ」
静まり返る室内。ヴェラは顔を真っ赤にしながら椅子に崩れ落ちた。

「……何か、よくわかんないけど、その、ごめん」

サラが頭を下げる。

「じゃ、じゃああたしが次、報告させてもらうわ」

気まずさを払うようにローザが手を上げた。

「あたしもはつきり言って、イルヴァが服屋だ食べ物屋だっとうろちよろするもんだから大して調べられなかったんだけど」

そう言ってイルヴァを睨む。イルヴァは素知らぬ顔で鶏の足にかぶ

りついているが。

「北ブロックにこの町の留置所があるのよ、知ってた？」

その言葉にわたしとヘクターが「あ」と声を漏らした。ローザはにっこりと笑う。

「その様子じゃ聞いてきたみたいね。でもそこにフッキさんはいないわよ」

「どうしてわかったんだ？」

デビスが驚いたように顔を上げた。

「単純に中を見せてもらったからよ」

「見せて、って……簡単に見せてもらえるもんなの？」

セリスがいぶかしげに尋ねる。

「所長がお父様の知り合いだったのよねー。赴任したばかりでこの町のことはよく知らないみたいだったけど、『興味あるから見せて』って言ったら見学させてくれたのよ。檻の中全部見せてもらったけど、フッキさんはいなかったわ」

流石ローザ。こういう人が仲間にくれたのは心強い。

「でもそれじゃおかしいわよ」

セリスが再び詰め寄った。全員が彼女を見る。

「私たちが聞いてきた話と違うじゃない」

「セリス達は西ブロックに行ったんだよね？」

デビスが尋ねる。セリスとイリヤが頷いた。アントンはただ腕を組んでテーブルを睨んでいる。

「私達は酒場に行つて、同じような冒険者から話し聞いてきたんだけど、その中でフッキさんっぽい人が連行されるの見たって人がいたのよ。『エントリーの申し込みに行ったら不正でもしようとしたのか、ドワーフみたいな親父が捕まってたぜ』って。どう考えてもフッキさんでしょ？警備員の制服着た人間が両脇抱えて連れていったんですってよ」

「何気なく制服の特徴聞いても間違いなかったよ。紺に白い線が入って背中に鷹のシンボル」

イリヤが指を振って説明した。わたしも見掛けた町の警備員の特徴ときちんと合っている。

「ふ、フツキ先輩捕まっちゃったんすか……？」

ヤツキさんが弱々しく呟いた。

「それからだって大変だったんだから」

はあ、とセリスは息をつく。

「その冒険者が『ライバルが一人減った』とか余計な事言うから、アントンが絡み出すし……」

セリスはそう言うのと隣りのアントンの頭を叩いた。それがあからむつつり黙っていたのか……。

「ちゃんと息の根止めてきたんだろうな」

アルフレートの言葉にアントンとセリスの頬が引き攣る。この返しは予想外だったらしい。

「中途半端な事をするから目を付けられるんじゃないか」

「アル、それ以上言うのと引かれるから止めとけて」

フロロがフローにならない台詞で止めた。勘違いされそうで怖いので止めて欲しい。

「でも、それなら何処行っちゃったのよ、フツキさん。留置所にいなかったのは本当よ？」

ローザが語気を強めた。わたしとヘクターは顔を合わせる。

「……次は俺らが言った方がいいな」

ヘクターが口を開いた。わたしは彼に任せることにする。自分が喋ると余計な感情が入りそうだ。

「顔見知り、とまでいかないかもしれないけど知り合った店主に聞いてきた話した」

そう前置きするとヘクターは先程聞いてきた武器屋のおじさんの話をしをする。

この町には『地元民』と『余所者』とされる二種類の人間がいること。音楽祭の主催側は地元民とされる人間で固まっていること。10年前の不気味な唸り声、町の混乱、店主が語った祭りの目的は『

廃坑から帰れなくなる人間がいるということ自体にあるのではないか』という考察。そして、

「普通、連行された犯罪者は留置所に行って裁判を待つ。でも凶悪犯とされるような人間は廃坑に連れて行かれるっていう噂があるらしいんだ」

誰かの息を飲む音が聞こえた。「わお、人柱だあ」というフロアの能天気な声が響く。

「それって……かなりまずいんじゃない？」

ローザが乾いた声を上げる。

「まずい、だろ」

デビースも心配顔だ。彼らにとっては依頼人がなくなったところか、依頼人がいないと廃坑には入れないというのにその廃坑にフツキさんはいるかもしれないのだ。

「ぼ、僕が助けにいきます！明日、必ず先輩を助け出しますよ！」

ヤツキさんが立ち上がり叫んだ。

「まあまだ廃坑にいと決まったわけじゃない」

冷静に言うアルフレートにわたしは問いかけた。

「アルフレートたちはどうだったのよ？」

「うん？じゃあ私が話しをするか。役場に行つて来たんだがな、馬鹿正直に探りを入れるわけにもいかないんでクレーマーになってきたんだ」

一同「はあ？」と声を出す。

「少々頭の痛い奴、という設定でとにかく喚き散らしてやった。そうすれば多少しつこくしても怪しまれはしないからな」

なるほど、それでクレーマーか。

「明日は何時からなんだ、から始まって『食事は保証されるのか』

『怪我を負ったら治療代はどうなる』『どのくらい危険か』『協力者の人数を書かされたが、最大何人まで許されるのか』『出身地を聞くんなんて差別じゃないか』『物を取りに行くらしいがソレは何個あるんだ、複数人持ち帰ったらどうするんだ』他にも色々喚いてや

ったぞ」

うわあ、何か対応した人が気の毒になってきた……。

「そ、それで何かわかったの？」

サラがおずおずと尋ねるとアルフレートはにやつ、と笑う。

「色々ね。まず明日の参加グループは8組。それが全部バラバラの入り口からスタートして廃坑の中を探索する。ゴールに行き着かないような入り口は無い、と言っていたがどうだか。……そして持ち帰るものは『砂漠の石』」

「そんな事までわかったの!？」

わたしが驚くとアルフレートは指を振った。

「対応の奴も大分意識が朦朧としてたんで口滑らしたが『タージオ山に縁のある貴重なもの』っていったらそれしかないだろ。あと、これは私の推測でしかないが、3年前の唯一のテスト通過者、ギタ―を放棄した吟遊詩人だな。あれはやっぱり主催側には想定外の事だったようだ」

「合格出来ないようになってるってことかよ」

イリヤが怒ったように身を乗り出した。

「そりゃそうだ。なぜならこの町にはもう『砂漠の石』は無いんだからな」

アルフレートの言葉に室内がざわつく。

「あーもう!はつきりと言ってよ!」

セリスが声を張り上げた。アルフレートのもったいぶりは今に始まったことではないが、馴れてない人間にとって苛つきは大きいに違いない。

「タージオ山で発見された砂漠の石は当時の領主の物になった。当時はまだそういう時代だ。そしてこの国にも貴族制廃止の波がやってくる。その混乱の中に無くなってしまったんだよ。疑うなよ?私が生き証人だ」

セリスはアルフレートの耳をはっとした様子で見た。そう、彼は長寿の種族エルフなのだ。こう見えてアルフレートはわたし達より何

倍も歳を重ねている。

「で、でも3年前のあの人は……」

ヤツキさんが震える声で問いかける。

「偶然見つけたんだろ？な、まだ残っていた『砂漠の石』を」

イリヤが言つとアルフレートは頷いた。部屋の中は静まり返ってしまった。そりやそうだ。明日から始まるはずだった音楽祭も、参加の意味があるのかわからなくなってしまったのだ。

「どうするの？ヤツキさん」

ローザが静かに尋ねる。合格出来ないとわかりきったテストに、本当に参加するのか聞きたいのだろう。しかしヤツキさんは拳を握りしめるとテーブルに身を乗り出した。

「僕は参加しますよ！だって、まだ有るかもしれないっす！あの吟遊詩人が偶然見つけたんなら、きつとまだあるっすよ！それに、それにフツキ先輩を助けなきゃ！」

わたしは勢いに押されながらもちよっぴり感動してしまった。そうだ、まだフツキさんを探すという目的もあるんだった。

「俺も参加するぜ」

意外な所からの声に全員が振り向いた。アントンが腕を組み、テーブルを睨んだまま口を開く。

「俺も参加する。ギターなんかしらねえよ。……ただ、明日のテストには参加してやる」

はつきりとそう告げると、アントンは立ち上がり隣りに座るヘクタールを睨みつけた。一瞬の沈黙の後、踵を返すと部屋を出て行ってしまう。

「ちよつと……」

セリスが慌てて後を追いかけて行った。残されたわたし達は、ただ扉を見つめるだけだった。

「アントンの名前で参加することにしたんです」

「へえ……」

わたしはヴェラの言葉に気の抜けた返事をした。別に興味が無いわけではないが、何だか疲れてしまったのだ。あの後、一応町中をうるついでフツキさんを探してみたものの、やっぱり姿は見られなかった。

「で、なんであんなに此処にいるの？」

ローザが冷たく問いかけるとヴェラはぎくりと肩を震わせた。昨日と同じ宿屋に戻ったところで何故かプラチナブロードの美人シーフ、ヴェラがわたし達の部屋を訪ねてきたのだ。……もう『おつちよこちよいシーフ』に枕詞を変えるべきかもしれないが。

「どうせ皆に責められるのが怖くて逃げてきたんだろ？」

フロロがベッドの上で転がりながら溜息をつく。

「別にいいですけど、寝る時には帰ってくださいね？ベッド余分に無いんですから」

イルヴァが言うとうヴェラはさめざめと泣き出した。

「ここの人達も冷たい……」

『じゃあ帰れよ』

ヘクターとヤツキさん以外のメンバーの声が重なる。

「参加することに決めたんだったら、やっぱりライバルになるわけでしょ？だったらこっちに来るのはおかしいじゃない」

ローザの言葉にフロロが頷いた。わたしはまあ、どうでもいいけど、「いたけりやいて良いが、一つ聞いてみたい。あの緑頭の剣士くんはなんであそこまでうちのヘクターに絡むんだね？」

アルフレートはすぐ横にいるヘクターを指差し尋ねる。ヘクターは「はあ」と溜息をつく窓の外へ目を向けてしまった。皆が見つめる中、ヴェラは半分口を開けたまま固まる。しばらく沈黙が続いた。

「……知らないなら知らないって言えよ」

フロロが言つとヴェラは頭を下げた。

「すいません、知らないです。……元々私だけ、そんなに仲良くないんですよ……。あのグループにシーフだけ足りない所に入れてもらっただけなんで……」

「あんた友達いねえもんな」

容赦ないフロロの突っ込みにローザが「うわあ……」と声を漏らした。

「あ！でもデイベスさんがアントンさんに注意してる時に言つた言葉を覚えてますよ。『いつまでもぐちぐちと……』」

「やめてくれ」

ヴェラがヘクターの言葉に動きを止める。ヴェラだけじゃない。メンバー全員が固まってしまった。

「す、すいません……」

ヴェラが半泣き顔で謝罪するが、ヘクターは無言で立ち上がると部屋を出て行ってしまう。ばたん、という扉が締まる音に、わたしは弾かれたように立ち上がった。追いかけてようと一歩踏み出したところで、足に絡み付くものに動きを止められ、床に転げる。

「ご、ごめんなさい！ゆるしでえ！」

わーわー泣くヴェラがわたしの足を掴んでいた。

「わーかったから！放してよ！」

泣きたいのはこっちだ！わたしはヴェラに怒鳴りつけた。

「いいから放しなさい！あんた友達出来ないの、その空気読めなさすぎるからよ！」

ローザがヴェラの背後から羽交い締めにすることうややくわたしの体は自由になった。起き上がると扉に飛び付く。転げるように外に飛び出すが、廊下にはすでに彼の姿は無かった。

宿を出た所で鉢合わせした人物は、わたしが今一番会いたくない人

だった。

「おい」

ぶつきらぼくに声を掛けてきたのは細身のカタナを携えた男、アントン。

「丁度いいや、ヴェラが来てなかったか？」

「……二階の部屋にいるわよ」

そう答えるとわたしはそのまま横を通り過ぎようとした。が、アントンに腕を掴まれ体が硬直する。そんなに力は感じないのに、ひどく腕が痛い。

「あんたに一つ忠告しといてやるよ」

刺すような目つきでわたしの顔を覗き込んでくる。わたしは言葉が出て来なかった。

「あいつを追いかけろの、もう止めときな。あんた絶対傷つくことになる」

「な、……なによそれ」

わたしの擦れた声にアントンはに、と口角を上げる。

「あいつが偽善者だからだ」

わたしは思わずアントンの手を振り払い、駆け出した。

夜の町、立ち並ぶ店からは光が漏れ通りを照らしている。前夜祭というもののなか、人もまだまだ夜を楽しむ雰囲気は溢れてた。誰かの弾き語りが耳に流れる。笑い声が聞こえる。ランタンが燃えている。風が吹く。山の泣き声が聞こえる。

怖い、怖い、怖い、怖い。

わたしはただそれだけしか頭に浮かばなかった。足がふわふわとしてすっかり踏み込めない。今どっちの足を出しているのか、それすら曖昧だ。どうしてそこまで憎むのだろう。どうしてそこまで人を嫌いになれるのだろう。わたしはただ、アントンが怖かった。嫌いだ。嫌い、いけ好かない。そんなものを吹き飛ばす程の冷たい瞳。逃げなきゃ。逃げなきゃいけない。追って来ていないことなど分かっているのに、何故そう思うのだろう。ただ少しでも離れておかなくち

やいけない。

気が付いた時、わたしは中央広場に立っていた。

息があがっているということは立ち止まってから時間が経っていないということだ。なのに随分と長くぼんやりしていたような感覚だった。ふらふらと噴水脇まで行くと淵に腰を下ろす。顔を上げると色紙を貼付けたランタンがいくつも浮かんでいた。綺麗だ。ぼんやりと浮かび上がる教会も、町の明かりも美しい。でも、何だか全てどうでもよかった。

男の子って怖いんだな。

わたしは全て投げ出したい気分になってしまっていた。同い年のはずなのに、何だかとても怖い。未知の生き物のようだった。わたしは今まで、周りにいる男の人といえばお父さんに教官、アルフレートにフロロ、クラスメイトの男子が少々、そのくらいしかいなかったもの。ヘクターと知り合って、彼は優しく、体も大きくて、手も大きくて温かかった。でもきつと、それは一部分でしかなかった。もっと知りたい。そんな気持ちより、もう傷つきたくない。その気持ちの方が大きくなってしまった。アントンにも、あっちのメンバーにももう会いたくない。……もう帰りたい。

途中で投げ出したい気持ちに初めて襲われた。でも、投げ出すということにも勇氣はあるんだな、とも。

どのくらいぼんやりとしていたのだろう。ぽつぽつと町の明かりが消え始めてきた。

「リジア！」

呼び声にわたしは顔を上げる。息をあげたヘクターがこちらを見ていた。わたしの顔を見るとほっとしたように近づいてくる。

「よかった……」

彼の言葉の意味をわたしは暫し考える。探しに来てくれたのだろうか。なんだかあべこべだ。

「顔……どうしたの？」

わたしはヘクターの赤くなった頬を見てびっくりしてしまった。

「いや、ローザに、ちよつと……。『なんでリジアがいないんだ』って怒られた」

珍しくもそもそと喋るヘクターにわたしは苦笑する。きつと一度部屋に戻ったんだろう。ヘクターを探しに出ていったはずのわたしがいないんで驚いたのはわかるが、何もひっぱたくことはないのに。それよりも彼が一度部屋に戻ったということに安心した。

「帰ろう」

ヘクターに言われてわたしはゆっくり立ち上がる。さっきまでの反動が足がひどく重たい。

前を歩くヘクターの背中を眺めながら、わたしは無性に腹立たしくなってしまうた。彼は何も言わない。わたしが何も聞かないからだ。だから当たり前のこの沈黙にわたしはイライラする頭をふり払った。でも何か言って欲しい。言い訳を重ねるようにでもいいからわたしの機嫌を取って欲しい。

なんて勝手なんだろう。わたしは自分に嫌気が差して涙が目に滲んだ。

無言のまま宿に帰ると入り口にヤツキさんが待っていた。

「よかったす……。入れ違いになったみたいで心配したすよ。よかった……」

何故か涙を拭うヤツキさんの肩をわたしは叩いた。

「やめてよー、わたしだってソーサラーなんだから一人で町歩くぐらい大丈夫だって」

「だって、こんな夜遅くに……。女の子一人で……。ぼ、僕がこんなこと頼んだばかりに」

ぐじぐじと泣くヤツキさん。たぶんわたし達の混乱に動揺してしまったのかもしれない。わたしが「ヤツキさん」と呼びかけると顔を

上げた。

「絶対にギター持って帰りましょう。フッキさんも絶対助けます！」
わたしが顔を真っ直ぐ見ながら言うと、一瞬の沈黙の後、ヤツキさんはぶんぶんと首を縦に振る。

「そうっすね、絶対、諦めません！」

わたしがヘクターの顔を見ると彼も微笑んでいた。

正直、わたしはすつきりとはいかなかったけど気持ちが落ち着いてくるのを感じた。代わりにふつつと沸き上がるのがやっぱりアンソンへのむかつきだった。サラ達には悪いけど、絶対に負けたくない！本当にゴールがあるのか怪しい明日のテストではあるけど、やれることはやってやる。わたしはひっそり拳を掲げるのだった。

翌朝、宿の部屋の中で支度を進めるメンバーにわたしは声をかける。

「円陣組むわよ」

「はあ？」という顔が何人かいるが気にしない。隣りにいたローザと喜んで駆けてきたイルヴァの肩を掴む。渋々、といった感じのアルフレートが入るとフロロがヘクターの肩に飛び乗った。フッキさんがにこにこしながら声を張り上げる。

「絶対、テスト合格しましょう！」

『おう！』

気合いを入れると皆の顔を見回した。おし、良い顔してるじゃないか。

わたしは背中の中の短剣を確認すると鞆から昨日貰ったアミュレットを取り出し、首にかける。

「あら、素敵」

ローザがちらりと見て言ってくれた言葉にわたしは頷いた。

「まだ石が入ってないから、砂漠の石が見つかったら魔法陣組み込んでめ込もうかな」

「おい、勝手に決めるなよ」

アルフレートが文句を言いながらも笑っている。

「早く行こー」

フロロの言葉に全員がわたたと部屋を出た。廊下にいた清掃のおばさんが箒を動かす手を止めて手を振ってくれる。

「がんばってきなさいね」

わたし達はそれに答えると、日差しが降り注ぐ宿の外へ飛び出した。

「流石に人の数が違うーう！」

人の波に揉まれながらローザが叫んだ。バンダレンの中央広場に向

かう通り道は、昨日までとは比べ物にならない人の数だった。その上あちこちに弾き語りをする吟遊詩人がいるので、その度に道幅が取られてしまっているのだ。響く歌声、ギター、ハープ、リュート、管楽器の音も聞こえる。揺らめく旗を見上げながら足を進めていた時、わたしの手を取り握りしめる感覚に思わず隣りを見た。

「はぐれそうだね」

ヘクターが苦笑しながらわたしの手を引いた。確かに人混みからきちんと頭が出ている彼と違って、わたしは完全に埋もれている。

「ごめんね、小さくて」

わたしは頬を膨らました。本当は恥ずかしさに身悶えそうなのだが、何とか誤魔化す。

「お邪魔して悪いんだけどさ、俺も限界……」

フロロがヘクターの肩に飛び乗ってきた。背の低い彼にはこの人の波はキツいに違いない。

中央広場まで出るとようやく隙間の空いた開放感に安堵の息を漏らす。前を歩いていたローザがこちらに振り返ると呆れたように溜息をついた。

「引率の先生みたいになってるわよ」

肩にフロロ、更にわたしの手を引くヘクターを見て、イルヴァが羨まし気に指をくわえる。

「イルヴァも手、繋ぎたいですー」

イルヴァから手を差し出されたアルフレートが黙ってその手をパチン、と叩いた。

教会前に来ると巨大な壇上が目に入って来た。それを取り囲むように人が集まっている。上に掲げられた弾幕には『ビョールト杯』の文字。

「あ、ここじゃない？」

わたしは壇上を指差した。もしかしてここに上がらされるのか？……ちよつと嫌だな。そちらに向かおうとしたところで男の人にチラシを渡された。

「オッズと予想はこちらだよ」

男はその言葉を連呼しながら腕に抱えた大量のチラシを通る人間にばらまいている。わたしは貰ったチラシに目を落とすと眉をひそめた。『ビヨールト杯エントリー者』とある。ヤツキさんの名前に初参加に文字。内容にざっと目を通した感じだと、どうやらこのイベントが賭けの対象になっているようだ。殆ど合格者が出ないイベントで賭けの意味があるのかどうか疑問だが、気になるヤツキさんのところを読む。

『初参加の実力が読めないグループ。代表者であるヤツキ・ホフマンは若手ながらも実力のある演奏家として頭角を現してきている楽しみな人物。問題は第一テストになりそうだ。協力者はいずれも若いこれからの冒険者パーティ』

とある。まあこんなものかな。わたし達の評価はこれでしょうがないとしても、ヤツキさんって意外と腕の良い演奏家なんだ。今回は残念ながら『何かあると危ないので』と楽器は置いてきてしまったけど、一回ぐらい聞かせてもらえば良かった。

アルフレートが言っていた通り、全部で8組参加するらしく名前が並んでいる。フツキさんのところが太線で消しており、アントンの名前が代表者として書かれていた。

『もはや常連となったフツキ・ベントル氏。今回こそは第一テスト通過なるか!?!』

……って、これ内容はフツキさんのままじゃない。こういう所を見るに公式のものでは無いのだろう。だったら尚更掛け金の行方が心配だ。

「おい、行くぞ」

アルフレートに言われてわたしはチラシから顔を上げる。気が付くと参加者らしき冒険者達がすでに壇上に並んでいるではないか。わたしは慌てて駆け出した。

「参加者は急いで集まってください。まもなくスタートになります」

声を張り上げている女性は係員なのだろうか。わたし達が女性の前に行くと言ッキさんの胸元に着いたバッジを見る。

「お名前は？」

「ヤッキです！」

「ヤッキ・ホフマンさんね？お仲間がにーしー六人、と。はい、じやあ壇上にお上がりくださいーい」

手で指し示されたアーケードを潜り、壇上の裏手に回ると舞台上上がる階段があった。そろそろと壇上へ上がるわたし達。参加は8組といえど、各グループ6、7人はいるのだ。なんだか狭苦しい。わたしは居場所が定まらずよろよろとはじへ寄った。すると、

「あーら、ごめんなさい」

どん、と誰かにぶつかり危うく壇上の下へ転げ落ちそうになった。ヘクターが腕を掴んで引き寄せてくれる。

「で、出たわね……」

わたしは声の主を睨みつけた。腕を組み、わたしを見て微笑むセリス。なんだか昨日より生き生きとした顔なのは気のせいかな。

「もー、何やってんのよ！」

サラがセリスの頭を軽く叩いた。わたしにごめん、というポーズを取る。なんだか彼女達本来の姿を見るようではある。気付かれないぐらいいちらり、とアントンを見た。真っ直ぐ前を見ていてこちらに興味も無いような顔をしている。

「やな感じ！」

わたしは思わず鼻息荒くなってしまった。

暫くすると突如、教会の鐘の音が響き渡った。それに合わせるように観衆が沸き立つ。

「お、始まるか？」

フロアの眩きを肯定するように先程の係員の女性が壇上へとやって来た。

『お待ちたせいたしましたあー！』

異様な程大きな声にわたしは肩がびくりとなる。

「な、何コレ？」

ローザが聞くとアルフレートが鼻をならす。

「単なる『ウインドボイス』だ。風に音を乗せる精霊魔法だよ」

「変な悪戯考えないでよ？アルフレート」

わたしが言つと何も言わずに首をすくめた。否定しないってことは考えていたんだな。

こんな会話をしている内に係員の話しは『ビョールト杯』の説明に入っていた。

『ビョールトが生涯手放そうとしなかった一本のギター。それを賭けてこちらに集まりました皆様！争って頂きます！さあ、まずはそのビョールト最愛のギターをご覧ください！』

その言葉に再び沸き上がる歓声。進行をしていた女性と同じ黄色と青の制服姿の男性が二人、何か布が掛けられた物を台車に乗せて運んできた。壇上中央までくると布を引き揚げ、そこに一本のギターが姿を現す。

「お、おお……」

ヤツキさんが声を漏らし首を突き出しているが、わたしにはその、古そうだな、ということしかわからない。飴色に輝く姿はわたしが見掛けたことのあるギターよりも重厚感はあるものの、至ってシンプルな形、装飾だ。

『さあ、こちらのギターを賭けて皆さんにやっていただくことがあちら！恒例になりましたタージオ山の散策です！』

進行の女性がびし！と町の北東を指差した。山としての大きさは大したことはない。しかしここから見るだけでもいびつな形に歪んで木が覆い茂る様子は明らかに人の手が入っていないことがわかる。どこか不気味に見えるのはわたしの予備知識が邪魔をしているからだろうか。

『あちらのタージオ山は元は炭坑として開発されていた経緯があります。今は廃坑となつてしまいましたが、過去の鉱夫達が掘り進めた穴が残ったままとなつて入ります！そこに入って持ち帰って頂

くのが『砂漠の石』と呼ばれる幻の宝石です!』

「本当に幻なんだがな」

アルフレートがぼつりと呟いた。

『あらかじめ中には砂漠の石が私どもの手で、最深部に設置してあります!』

アルフレートの声が聞こえたわけではないだろうが、女性の台詞にわたしは眉根を寄せる。

「……本当に無いんすかね、砂漠の石」

ヤツキさんが言うが誰も答えられなかった。わたしはアルフレートの腕を突く。

「思ったんだけど……、三年前に吟遊詩人が持ち帰った砂漠の石は?それを設置してたりするかもよ?」

わたしが小声で尋ねるもアルフレートは黙って壇上の中央にいる進行の女性を指差した。

『探索に行く皆様に実際にお見せいたしましょう!こちらが砂漠の石です!』

再び現れた制服姿の男性が今度はガラスケースを抱えてやってくる。用意した白い机の上にそれを置くと、どうだ、といわんばかりに手を広げた。ガラスケースの中で煌めくのは砂色というよりは綺麗な黄色。子供の握りこぶし程のものが太陽の光が当たる角度に関係なく発光しているではないか。

「あれがそうなの?」

わたしはガラスケースに目を奪われながら擦れた声を出す。

「そう、普段は見物料を取って展示している『砂漠の石』だ」

アルフレートの言葉にわたし達は全員呆れ顔になっていたに違いない。

「なんかとことん……、どうしようもないわね」

ローザのぼやきが歓声に紛れていった。

『さあ、今からエントリー者の方々にはタージオ山の方へ移動して頂きます。町の出口ではくじを引いて頂き、その番号の入り口から

各グループ出発することになっています。よろしいですか!？」

『おおー!』

周りのグループからあがった勇ましい返事にわたし達は少々押されてしまう。みんな目付きが真剣だ。そりゃ他の人たちは砂漠の石が無いかもなんて知らないだろうし。わたしといえんどちらかと言うとフツキさんを探す方が重要になってきていたりする。皆には言わないけどね。

タージオ山に移動することになり、壇上を降りてぞろぞろと町の通りを揃って歩く。通りには町の人達が路肩に避けてこちらを見守っていた。

「なんか見せ物っぽくて恥ずかしいな」

フロロがヘクターの肩の上で顔をしかめている。

「イルヴァは気分良いですよ」

「そりゃああんたはね」

イルヴァはローザの返事に不満なのか首を傾げた。

町の北口に着いた所で再び進行の女性が前に出てくる。

「さ、順番にくじを引いてくださーい」

カラフルな箱の頭から数本のガラス棒が覗いている物をわたし達とは反対側のグループに手渡す。代表者と思われる人が順に棒を引き抜くと隣のグループに渡していった。

アントン達の番になる。アントンは二本残った棒の片方を抜くと女性に、

「5番だ」

と伝えた。

「はい!ということは残りは……」

女性がヤツキさんに箱を向ける。ヤツキさんが残った一本を引き抜き頭上に掲げた。

「……1番っす!やった!」

単に炭坑の入り口の番号なのだが、なぜか喜ぶヤツキさん。

「5番と1番じゃ遠かったりするのかな」

サラがわたしに小声で聞いてきた。

「全部繋がってるんだから、中で会えたりするかもね」

わたしが答えるとサラは笑顔になる。わたしとしてはあんまり会いたくないような気もする。本当になんでサラがアントンなんかと同じパーティーなんだろう。はあ、とわたしは溜息を隠せなかった。

意地悪な廃炭坑

「いよいよっすね」

乱雑な字で『1』と書かれた看板が立つ炭坑の入り口を前に、ヤツキさんは誰に言うというわけでもなく呟いた。さて入ろうか、という雰囲気になったわたし達をヤツキさんが止める。

「皆さんにお願いがあります。……実は昨日までのことで僕の中ではビョールのギターはすでに諦めているところがあるんす」
皆、少し戸惑ったように動きが止まった。

「……正直に言って僕はフツキさんを助けることの方が目的に変わってしまってるんす」

ほぼ同じ気持ちだったわたしは大きく頷いた。尚もヤツキさんは言葉が続ける。

「でも、まず第一に考えて欲しいのは皆さんの安全です。僕は戦う力は何も無いっす。剣を振るう力も無ければ呪歌の類いも知りません。こんな僕がこんな事を言うのはお門違いかもしれないっすが、今回一緒にここまで来てくれただけで嬉しいっす。だから皆さんには無事に帰って欲しい」

初めて見せる真剣な面持ちにわたし達は暫し無言となってしまうた。
「……じゃあ行きましょーか」

ヤツキさんがそう締めたことで、わたしはようやく我に返る。ふと上げた目線の先にいたヘクターと目が合う。

「……行こう」

そう言って炭坑へと踏み出した。例の如くフロロが先陣をきるかと思いきや、眉を寄せたままだ。

「盛り上がったところで悪いんだけどさ、あんまり入りたくない雰囲気なんだよね」

フロロの言葉にわたしとローザは思わず手を取り合った。フロロがこんな事言っなんて、よっぼじゃないか。

「入り口から近くに何かいるな。何の気配だ？」

アルフレートが耳に手を当て、フロロに尋ねる。二人共わたし達人間に比べて耳が良いのだ。フロロも両耳を炭坑の方へ向けて目を閉じている。

「……何か虫つばい？わかんないや。でも相当な数いる」

うぞぞぞぞぞぞ！わたしは鳥肌の立つ腕を摩った。やだよー、入りたくないよー。虫は嫌いなんだよー。

「あ、わたしがファイアーボール撃ち込むのはどう？こっから」

わたしのアイデアはアルフレートに一笑に付される。

「地滑り起こして穴が埋まるだけだろ」

「わかんないじゃない」

「もったとしても入るの嫌よ。大体熱くて入れないんじゃない？」
ローザにまで言われてわたしはふて腐れた。ちよつと軽い冗談だったのに。

「取り敢えず入ってみようよ」

リーダーであるヘクターが申し訳なさそうに言ったところで皆我に返る。確かにここでぐずぐずしていても仕方ない。揃って暗がりへと踏み込んで行った。

わたしとアルフレートが呼び出した『ライト』の光が照らす中を皆で歩く。思ったより狭い道だ。腰を屈める程……というわけではないが、一番背の高いヘクターが一応真っ直ぐ歩ける程度、横幅も二人並んで歩くにはきつい。先頭からフロロ、アルフレート、イルヴァ、ローザ、わたしと続き、ヤツキさんはわたしと最後尾のヘクターの間に入ってもらった。

土が剥き出しの洞窟はなんだか湿っぽい。心なしかひんやりとしている空気が肌を撫でる。

「……何もいないみたいすけど」

ヤツキさんが呟くとフロロが足を止めた。『静かに』という合図にヤツキさんは慌てて口元を手で押さえる。次の瞬間、
カサッ

わたしの耳にも聞こえる音があった。

「これのことか……」

ヘクターがわたしとヤツキさんの腕を取り、引き寄せる。ヤツキさんと二人で背中に隠れた。アルフレートが光を前方に向けたことでわたしの目にも音の元凶が見え始める。

「……さ、サソリ？サソリじゃない？」

手のひらに乗る程度の大きさのサソリが数匹、地面にうろついているのがわかった。ほんの少し「なんだ」という安堵の気持ち芽生えた瞬間、わたしは背中まで鳥肌が立つのがわかった。道の先、見える範囲まで壁や地面がうねっている。土が動いているように見えるのは……土ではなくサソリだからだ。何十、何百、いや下手したらもつというかも。そんな数のサソリがうずうぞと蠢く光景に、わたしとヤツキさんはヘクターにしがみついた。

「ファットテール種のスコープオンだ。見かけ倒しじゃなく猛毒持っているから気をつけろよ」

アルフレートがいないアドバイスをくれるが、どうしろっていうんだ。

「さ、サソリってこんなところに住むわけ……？」

ローザが上擦った声をあげる。アルフレートが鼻で笑った。

「そんなわけあるか。こいつらは砂漠に住むタイプのサソリだ」

「それじゃ……」

わたしは言葉を飲み込んだ。言いたくなかったからだ。

「そう。人為的に置かれたものだ。この先も色々用意されていると考えた方がよい。泣ける演出じゃないか」

聞きたくなかった答えをアルフレートは淡々と言ったのける。隣りでヤツキさんが息を飲むのがわかった。

「正直、ここまでする？って感じね」

はあ、とローザが溜息をつく。イルヴァがローザの肩を叩いた。

「イルヴァがハンマー振り回しながら進んでいくっていうのはどうです？」

「命中率低そうだから却下」

ローザに即答され、口を尖らせる。

しかしどうやって進めというのだろう。下手に手を出せば一斉に襲ってくるかもしれない。走って通り抜けるなんて不可能だろうし……。それこそファイヤーボールで一掃、というのが一番現実的な気がしてきた。

「アルフレート、何とかならないかな？」

ヘクターが聞くとアルフレートはにやりと笑う。

「そこで震えているお嬢さんに言ってみる。こいつは熱さより冷えに弱いぞ」

わたしは「あ」と声を漏らすとヘクターのジャケットを掴んでいた手を緩めた。

「スモークブリザーアアアド!!」

大げさな身振りを交えつつ、思いきり呪文を飛ばすわたし。アルフレートからの「思いつきり」というお許しが出たの魔法なので張り切って声をあげた。ゴオオ、という台風の中心にいるかのような轟音がお腹に響いてくる。我ながら大した威力だ。細かい氷のダストを含んだ風が螺旋状に伸びていく。こちらにも冷気の風がやってくるが、ローザの張った結界のお陰で寒さを感じる程度だ。

「おおー、すげー」

フロロがイルヴァの背中に張り付きながら感嘆の声をあげた。風が収まった後に現れたのは、別世界にきたような氷の世界。天井からは氷柱が垂れ下がり、氷のトンネルへと変わっていた。サソリは全てが氷に埋まってしまったはずだ。あんまり見たくないが一応確認のために近づく。

「……うん、オッケーよ」

みっちり隙間なくサソリが固まった氷のオブジェをちらつと確認すると、わたしはすぐに視線を反らす。

「すごいじゃないっすかあ！」

ヤツキさんの純粋な賛辞に、思わずわたしはニヤついた。

死臭を撒き散らしながらよたよたと近寄ってくるグールの集団に、わたしは総毛立つ。

『いやー！！』

わたしとヤツキさんの悲鳴が炭坑内に響き渡った。

「ちよつとは落ち着きなさいよ……」

呆れた声を掛けてきたローザの背後でイルヴァがめこめここと生ける屍を薙ぎ倒していった。

「まだそんなていたらくなのか。もう慣れてきてもいいんじゃないか？」

アルフレートが無茶を言うが、わたしは首を振って言い返す。

「皆と一緒にしないでよ！わたしはこんな本格的なダンジョン初めてなんだからね！」

そう、わたしの経験したものといえば前々回の演習のクエストで、バレットさんの『おふざけ』に付き合っただけ。経験が徹底的に不足しているのだ。

「悪魔退治までの経験値はどうした」

尚も言ってくるアルフレート。あれはエディスさんという媒体があったから奇跡的に倒せただけじゃないか。自分でも嫌になるほど理論だけはいつちよ前に出てくるのが嫌になって、わたしはふて腐れる。

「まあまあ、さっきはリジアのお陰で先に進めたんだし……」

「そうすつよー、リジアさん凄いつすよ！」

ヘクターとヤツキさんの励ましにアルフレートは醒めた目つきだ。

「どうでもいいけど、敵が出てくる度に悲鳴あげないでよね。耳がおかしくなっちゃう」

ローザが両耳を摩った。

さつきから立て続けにグールが土からはい出てきているのだ。もう五回程、悲鳴をあげている。ゴブリンなんかと違ってグールのようなモンスターはどうやっても目に慣れてくれない。まず見た目のグロさ！土気色に変色した肌に原形を留めない歪んだ顔、窪みだけが際立つ目元、人体としておかしい構造に曲がった体！そして臭い！夏場に腐った肉の比じゃない重たい腐臭がのしかかってくるのだ。無理！

「冒険者は大変なんすね、はあ……」
ヤッキさんもわたしと同じくうんざりとした顔だ。まあ生き生きとしているのはイルヴァくらいだけど。

再び歩き出してすぐ、

「うわあ、遂にこうきたか」

先頭を歩くフロロが落胆の声を上げた。

「どうした？」

ヘクターが尋ねると振り返り先を指差す。わたしも皆の背中越しに前方を覗き見ると、道が分かれているのがわかった。二股ならまだしも四方向に枝分かれしているのだ。

「俺、道覚えるの苦手」

フロロが意外な事を言う。てっきり得意なものかと思っていた。『何でも出来る便利屋さん』のイメージがあつたというのに。

「こういつのつてアレじゃない？左手を壁に付けて、ってやつ」

ローザが言うのは『左手の法則』というやつだ。ダンジョンなどで迷った際に、左手を壁に付けて歩き続ければそのうち出られるというものだ。

「それは駄目だろ」

アルフレートの速答にわたしも頷く。

「今回は出口……っていうか入り口がいっぱいあるような所だし、出口に行くことが目的じゃないしね」

「あ、そっか」

ローザがわたしの説明に頷いた。

「何が駄目なんです？」

イルヴァが首を傾げる。わたしは彼女に向き直ると「いい？」と指を立てた。

「ここでは闇雲に出口を探すっていうんじゃなくて、砂漠の石を探す目的があるわけ。……まあわたし達の場合はフッキさん探しな訳だけど。どこに行けばいいのか分からないけど、とにかく隅々まで探索して内部の構造を知らなくちゃ搜索出来ないでしょ？マップ作

りでもした方が良さそうね」

「……よくわからないですけど、イルヴァには向いてなさそうなのでお願いします」

……説明しなきゃよかった。

「マップなんていらん。私が覚えれば済む話しだ」

アルフレートの自信満々な台詞に一瞬「おお」となるが、直ぐに不安が押し寄せる。完全に信用してはいけないのがアルフレートだ。

「……ま、一応目印付けておきましょう」

ローザが簡単な呪文を唱えると土が剥き出しの壁に光る文字を描いていった。自分の名前をバラのイラスト付きで印するのがローザらしい。

「じゃあ何処から行くっすか？」

ヤツキさんに聞かれ、誰も何も言わないのを確認してわたしは言った。

「とりあえず右から行ってみようか」

細長い道を歩きつつ考えた、長い道程を歩かされたあげく行き止まりだったら嫌だな、という懸念は直ぐに消え去った。その行き止まりが直ぐ現れたからだ。

「格子？」

わたしは目の前に立ち塞がる鉄格子を見て呟く。通路をみっちりと塞ぐ、銀色の無機質な物体は何となく嫌な気分にした。フロロが鉄格子を調べ始める。左右を見て上を見て、はいつくばったり地面を叩いたりしている。

「開きそう？」

わたしが尋ねるとフロロはすっ、と立ち上がった。

「んー……、隣行こうか」

その言葉にわたし達は顔を見合わせる。『開かない』と言っているのと同じではないか。

「イルヴァがぶち壊しましょうか？」

イルヴァの物騒な申し出にフロロは首を振った。

「やめときなよ。下手に手出すと厄介そうだから」
どうなるのだろう。いきなり爆発したり……とかはないか。

フロロに言われるまま右から二番目の通路を進んでくると、またしても直ぐに鉄格子に行く手を阻まれた。

「何これ、めんどくさい」

ローザのぼやきにわたしも頷いた。これって他二つの通路も同じだったりするんじゃないだろうか。

「大体わかったよ」

床に這いつくばっていたフロロが顔を上げる。

「何？」

ヘクターの質問にフロロは床を指差した。

「地面にうつすら見える切れ目、四角くなってるそれ、……そうそう、そこ。これを4力所一度に踏まないと開かない仕掛けみたいよ」
わたしは地面を凝視してようやく足拭きマット程の切れ目を見つける。

「4力所って……、通路が4本なんだからバラバラになっちゃうじゃない」

わたしは急に不安が戻ってきてしまった。

「もう、意地悪な仕組みだなあ！」

わたしの苛立にアルフレートが眉を寄せた。

「優しい罠なんて作ってどうする。あわよくばこっちはくたばって貰いたいと思って設置してるのに」

「なんで余計不安になるようなこと言うかなあ!？」

わたしとアルフレートが言い合っているとヘクターに「まあまあ」と止められる。

「とりあえず残りの通路に行ってみて、それからもう一度考えよう」
結果は予想通りというか、わたし達にとっては困った状況になってしまった。

「四手に分かれる？」

ローザがふう、と溜息をつく。道は四つに分かれ、それぞれ先は鉄格子で塞がれた状態。更に鉄格子の前にある仕掛けに四ヶ所同時に踏む必要がある、らしい。天井付近に鉄格子と滑車を繋ぐ鎖が見える。これで引き上げられるのだろう。先は繋がっていたりするかも、という淡い期待もあったが『ライト』の光を先行させるとそれぞれ細長い道が続いているだけだった（呪文で壁壊しちゃえば？という発案は却下された）。フロロが言うには仕掛けの構造的に鉄格子の向こうに入ったらまた、元に帰れないようになっていくかも、という事だった。開いたら奥に行かずに合流して……という案もあったがフロロが首を振った。

「やる前に賭けてもいいけど、間違いなく鉄格子が閉まるだけだと思うよ」

こうして7人で4つの通路を眺めつつ話し合いが始まる。

「7人だから2、2、2、1が妥当よね」

ローザが言うとはクターが軽く手を挙げた。

「俺が一人で行くよ」

これを止めたのは意外にもアルフレートだった。

「戦士には丸腰の依頼人に付いてもらった方がいい。私が行こう」

「でも……」とはクターが反論しようとするのを手で制す。

「この中で一番、単独になっても良いのは私だ。それに戦闘になった時を考えるとヤツキ氏に付くのは戦士の方が良い」

確かにそうだ。それにその戦士役がイルヴァではちよつと不安がある。戦力的に、ではなく落ち着いた行動が取れるかどうかで。

「明かりはどうしようか？」

わたしが聞くとアルフレートが精霊語を唱え始めた。ヘクターとヤツキさんの方へ指を突き出すと光の結晶がキラキラと輝き飛んでいく。光はすう、と空を漂ったかと思うとはクターの周りをくるくると周り始めた。

「ウィル・オ・ウィスプだ。男前の方が良いらしいな」

ヤツキさんが肩を落とす。

「そうなる……あたしとリジアが分かれて、フロロとイルヴァも分かれた方が良いわね」

ローザの言葉の意味は魔術師と前衛になれる人間が重ならないように、ということだ。

「イルヴァはリジアと一緒にが良いですう。最近オカマと一緒にばつかでつまらないですう」

イルヴァに腕を組まれるが眉間に筋の入ったローザに冷や汗が出た。
「俺は別にいいぜ」

フロロがローザの肩を叩く。

「……なんで今更一緒に行動する許可を貰わなきゃなんないのよ」

ローザの怒りも最もだが、イルヴァと行動することになったわたしの方が不安だ。ちらり、と横にいる娘を見る。

「イルヴァと一緒になら大丈夫ですよ、リジア」

「そ、そうね」

人形のように美しい顔に覗きこまれるが困惑しかなかったりする。

皆の心配そうな目がわたし達二人に集中しているのにも余計に不安が増幅した。

そのままイルヴァと腕組みしたまま、一番左の通路に入って行く。

「じゃあくれぐれも気をつけて」

皆に簡単な挨拶を送り、進み出した。

「ちよつと腕痛いです」

「……ごめん」

いつの間にか緊張からイルヴァの腕を握る力が行き過ぎてしまったようだ。自分でも不安から緊張しているのが分かる。

「大丈夫ですよー、すぐに皆と合流出来ますから」

その能天気さはどこから来るのだろう。心底羨ましい。

そんな話をしている間にも鉄格子の前によって来た。イルヴァと顔を合わせると二人で地面に長方形に入った切れ目の中側に足を入れる。一瞬の間があった。遅れている組みがあるのだろう。が、直

ぐに金属の軋む音が響き渡る。

『おおー』

イルヴァと二人、天井の間へと吸い込まれていく鉄格子を見届けた。がこん、という音を最後に動きが止まる。わたし達は再び顔を合わせると通路の奥に足を踏み出した。次の瞬間、ガン！という轟音に心臓が跳ね上がる。振り向くと上がっていく時の何倍ものスピードで元の通路を塞ぐ形に戻った鉄格子があった。

「……何か感じ悪いわね」

「短期は損気ですよお？」

イルヴァのズレた返答と頬をぶにぶにする指に、少し緊張が無くなってきた。しまった。

「大分道が広くなってきたわねー」

わたしは大きく手を広げた。皆と合流することは無かったが、気持ちも圧迫するような狭い道から解放されて首を回す。

「これでハンマーも振り回せますねー」

イルヴァののほほんとした声にわたしは振り返る。

「……ここまで来る間にモンスター出てきたらどうするつもりだったのよ」

「……素手ですかねー」

指を唇に当てて答えるイルヴァ。そんなポーズしても可愛くないぞ！「帰ったらブーツ洗わなきゃ……」

わたしは湿り気のある地面にすっかり汚されたブーツを見た。その時、隣でイルヴァがハンマーを構えるのがわかり、慌てて前方を見る。淡い光がゆっくりと近付きつつあるのがわかった。

動きで生きている人間だとわかり、わたしは少し警戒を緩めた。やがてのそのそと歩く一人の男性がわたし達の前までやって来る。

「おや、こんなところでお嬢さん二人で何しているのかな？」

現れた男性は呑気な声を掛けてきた。黒いハットに黒いローブ。髭が胸元まで伸びている姿は長い旅を続けているのを伺わせる。かなり迫り出したお腹は戦いには向いていなさそうだけど。

「何、って……音楽祭のテストですけど」

わたしの怪訝な顔を見たのか男性は頭を掻いた。

「ああ……、もうそんな時期なのか。どうりで見張りがいないわけだ」

話し振りからして男性は音楽祭参加者ではないということか。

「おじさんこそ何してるんです？こんなところで」

わたしが聞くと男性はえへん、と胸を張る。

「私は生物学者のボン。この炭坑にいる生物を調査しにきた」

ノリからして『ええ！あなたが！？』とでも言ってみたいが、残念ながら全く知らない人である。

「生物調査って……、こんなモンスターしかない所で？」

「モンスターも含めて皆生き物。私にとっては全て興味惹かれる対象だよ」

再びえへん、と胸を張るボン氏。立派なことだがそれにしてもこんな所にこなくても。ふ、と思い付いてわたしはボン氏に質問する。

「ここで『砂漠の石』って鉱物が採れるって話し、聞いたことありません？」

「この炭坑が出来たきっかけだね？でも昔の話じゃないかな。だからここは廃坑にされて封鎖されてるのさ」

やっぱりそうなのか……。ひょっとしたら未発見のものが見付かるかも、なんて期待は持てそうに無いかな？

「じゃあ……、わたし達探している人がいるんですけど、ここまで来る間に見掛けてたりしませんか？」

わたしは髭ぼうぶのフツキさんの容姿を説明する。が、ボン氏は首を傾げるだけだ。

「何組か冒険者らしいのは出くわしたがねー。そんなドワーフみたいのはいなかったな」

その答えに思わずふう、と肩を落とすわたし。ボン氏は言葉を続ける。

「代わりといっちゃなんだが、お嬢さん達に一つアドバイスできることがある」

「何です？」

ボン氏は指をぴつ、と立てた。

「そこのお人形のようなお嬢さん、あんたは人間の女性としてかなり完璧に近い容姿だ。簡単にスケッチさせてくれないかね？そしたら教えてあげよう」

「ちょ……」

なんだかエロ親父のような発言にわたしは慌てた。が、当のイルヴ

アはといえば、

「いいですよ」

と即答する。ボン氏は手を叩いて喜んだ。

「本当かね。嬉しいなあ」

そう言いつつ背中にしょっていた鞆からスケッチブックを取り出した。年季の入ったそれは中もぎつしりと描き込まれている。ページを捲りながらわたしの方をちらりと見た。

「お嬢ちゃんは……顔はかわいいんだけどなあ。背がいかんせん低過ぎる」

悪かったな！一気に不機嫌になるわたし。くびれを強調するポーズを決めるイルヴァと早速筆を走らせるボン氏を横目に、わたしはイライラと足で地面を叩いた。

「さて、出来たぞい」

ボン氏の言葉にわたしとイルヴァは顔を上げる。随分早い仕上がりだ。だがスケッチブックを覗き込むと、ラフながら立派なイラストが目飛び込んできた。

「すごい」

「イルヴァの可愛さがよく出てますう」

わたし達が口々に褒めるとボン氏はえへん、と胸を張る。

「なになに、モデルがよかったからね」

わたしとイルヴァは物珍しさからスケッチを暫く眺めていた。いいなあ、わたしも描いて貰いたい。

「さて、と、アドバイスだがね」

ボン氏がこほん、と咳ばらいし、わたしは顔を向けた。

「この先にある魔法陣には近寄らないように、ということだ」

「魔法陣？」

わたしが眉を寄せるとボン氏は頷く。

「君らが思っている以上にここはたちが悪い、ということだよ」

わたしとイルヴァは顔を見合わせた。ボン氏はスケッチブックを鞆に仕舞うと胸元を探り、何かを取り出す。

「引き止めてしまつて悪かったね。お礼にこれをあげよう」
そう言つてわたしに何か小さな金属の欠片を手渡してきた。

「私の作つたゴブリンのブローチだ」

見るとゴブリンの凶悪な顔をデフォルメしたような絵柄のブローチだつた。思わず頬が引きつる。

「いいなー、イルヴァも欲しいです」

「じゃあお嬢さんにはコボルトのブローチを」

ボン氏に新しく出されたブローチを手渡されてイルヴァは笑顔になるが、

「イルヴァもゴブリンがいいな……」

と呟いた。欲しいんだ……？

「じゃあ交換しましょうよ……」

本当なら『両方やるよ』と言いたところだが、くれた本人の前なので我慢する。

「それじゃあ気をつけて、お嬢さん方」

ボン氏は指を二本立てて格好良く挨拶すると消えていった。

「あ……あつちつて行き止まりよね？」

わたしは鉄格子が閉まつた様子を思い出し、イルヴァに言う。

「そう、ですねえ？」

イルヴァの疑問の声にも、ボン氏はこちらへ引き返してくることはなかった。

「不思議な人でしたねえ」

イルヴァはそう言いながらゴブリンのブローチを眺めている。その彼女の腕をわたしは引つ張つた。

「あれのことだわ」

わたし達の前方、数歩先に地面の土と同化するような色合いで描か

れた魔法陣があつたのだ。あえて同化するような紛らわしい染料を使っているのだろう。わたしは魔法陣のルーンを読み取ると背中に嫌な汗をかいた。

「描かれているルーンからいって、ちょっとマズいやつね」

「踏んじやいけないって言われてたやつですかあ。どうなるんです？」

イルヴァの問いにわたしはゆっくりと答える。

「たぶん……無作為に違う土地へ飛ばすようになってるんだと思う。テレポートのトラップってことね。海の上に移動したり上空に飛ばされたりしたらやばいだろうし。……それに普通に足が地面に着くような土地に飛ばされたとしても、テレポート自体があんまり体には良くないものなのよ」

どういう仕組みで瞬間移動が出来るのか、わたしも詳しくは知らないが体への負担が大きいので便利魔法には使えない代物なのだ。

「聞いたいて良かったですねえ」

「本当。フロロもないのに注意払ってなかったら見過ごしてたわ……」

わたしは溜息をつく。ボン氏への感謝とともに「思っている以上にたちが悪い」という言葉を実感してしまった。

再び歩き出して暫くした頃、イルヴァの足がまたも止まる。「どうしたの？」と聞く前にわたしの耳に断続的に聞こえてくる金属音があつた。かしやん、かしやんと炭坑内に響く音。やがて奥からゆっくりと現れた異様な姿に拳を握る力が強くなる。がしやがしやと軋んだ音を立てながら近付いてくるのは銀色の大きな鎧だった。全身を覆うプレートアーマーが怪しく光る。フルフェイスの鎧のせいで顔も窺えない。わたし達を目の前にしてもただ無機質に歩き続ける様子は生き物の気配が無かった。

「リビングアーマーってやつですね！」

イルヴァがウォーハンマーを握りしめる。相手も無言のまま大きなバスタードソードを構えた。リビングアーマーとは「動く鎧」の名

の通り、無人の鎧だけが魔法の力によって侵入者を排除するように武器を振るう魔物だ。力の持った魔導師が自分の館を守る為に作り出したりする魔法生物なのだが……。

「気をつけて、イルヴァ」

「大丈夫です」

「そうじゃなくて……」

わたしが言うのと怪訝な顔でイルヴァがわたしの顔を見た。

「そいつ、中身があるわ」

わたしの言葉に鎧の肩がぴくりと動いた。

わたしも含め、ソーサリーには魔力の動きを目で追う能力、センスマジックがある。学園でも必ず訓練を受ける技術だ。魔力の働いている場所全てを可視出来るわけではなく、小さな魔力の働きには直接手で触れて確かめたりするのだが、リビングアーマーのように巨大な魔力が必須のものが魔力を目で追えないはずがない。しかし、目の前のものには全く魔力が見えないのだ。倒さなければいけない相手には変わりないとはいえ、中身がいるにも関わらず魔物かのように装い近づく相手には確実にあるものが潜んでいる。すなわち、わたし達に対する悪意。こちらを亡きものにするという悪意が根底にある、ということに注意したのだ。

しかしイルヴァはあっけらかんと答える。

「大丈夫ですよ、リジア」

そう言うのと地面を蹴った。

がつっ！という火花が散りそうな衝撃音が走る。イルヴァのハンマーと相手のバスタードソードがまともにぶつかり合った。よろけたのは鎧の方だ。細いイルヴァの見た目からは想像つかない力に押されたらしく、たたら踏む。

その後も武器をぶつけ合う二人の攻防を見守るわたしは、イルヴァの露出度の高い服が舞う度にドキマギしてしまう。……緊張感が無くて申し訳ない。

全身鎧と軽装のイルヴァ。当然だが疲労の色が見えてきたのは鎧の

方だった。加えて湿り気のある地面に足を少し滑らせる。その隙を見逃すはずはなく、イルヴァのウォーハンマーが鎧の左脇にまともに決まった。辺りに広がった音からして吹っ飛ぶかと思いきや、鎧の方も踏ん張りよるけながらも剣を構え直した。

明らかに無理な態勢から賭けの一手だったのだろっ、ソードを振り回す。それをイルヴァが飛んで避け、上からハンマーを叩きつけた。わたしは思わず目を背ける。

ごりん、という骨を砕くような嫌な音が耳に聞こえてきたのを最後に静かになった。恐る恐る目を向けると、

「イルヴァのハンマーは、フルアーマーにこそ効果を発揮する武器なんですよねえ」

と言いながら、うつとりとウォーハンマーを撫でるイルヴァがいた。片隅に倒れている鎧の首の曲がる方向が不自然なことは、怖さからよく見られなかった。

魔女っ子、迷う

「なんかお腹空いてきましたねー」

イルヴァの声にわたしは首を振った。

「あんなもの見た直後に食欲無いわよ……」

「あんなもの？」

イルヴァは首を傾げる。冒険者としての感覚はイルヴァの方が正しいのだろうか。

ただ一本道が続く炭坑を歩くことに飽きてきた時、こちらの考えを読んだかのように道が分かれる光景が現れた。

「今回は二股か。どっち行く？」

似たような道幅が続く二つの道を前にわたしが聞くと、イルヴァは

「んー」と考える。

「こっち行きませんか？」

右方向を指差した。

「なんで？」

「何だか美味しそうな匂いがするんです」

こんなところで？とは思ったが、正しい道などわからないのだからいいか、と右に進むことにした。

道なりに進んで行くとわたしはイルヴァの嗅覚に驚かされることになる。

「あらー、リジア。二人だけになっちゃったの？」

少し道幅が広がった所にいたのは赤毛のソーサラー、セリス。転がった岩の段差に腰掛けて休憩を取っていたようだ。そういう彼女達もファイターのデビース、特殊クラスのイリヤしいない。三人で簡易食を取る休憩中だったようだ。

「一緒に休んで行けば？」

なんだか似合わない台詞を言うセリス。くんかくんかと三人の手元を嗅ぐイルヴァの首根っこを掴むとわたしは彼らの隣りに腰掛けた。

「……食べる？」

イルヴァの視線に負けたイリヤが食べかけのチョコバーを差し出してくれるがわたしは首を振り、イルヴァの伸ばした手を引つ叩く。

「ちゃんとわたし達の簡易食もあるから！ほら！」

袍をまさぐるとローザから手渡されていたカップケーキのようなものをイルヴァに押し付けた。見た目可愛いケーキだが、「食べると異様な程腹が膨れる」というカミーユさんお手製のものだ。何で出来ているのかはローザも怖くて聞けず終いだという。

「で、なんで二人だけなんだ？」

デビビスの質問にわたしは先程の四つの分かれ道に話しを聞かせた。「初っ端には大量のサソリが出たあげく、みんなバラバラにされちゃって参ったわよ」

「俺達はその作りと同じ、二股で分かれることになったんだよ」

デビビスは苦笑すると言葉を続けた。

「でも俺達がそっちの道を選んでいたら終ってたなあ。うちには単独で動けそうな奴なんていないし」

「アントンが強がって一人で行こうとするでしょ」

セリスが笑う。アントンの名前が出たことでわたしは一瞬肩を振るわせてしまったが、幸い誰も気付かなかったようだ。

「アントンはなあ、どうして強がってばかりなんだろうな。四六時中肩に力入ってちゃ心配になるよ」

デビビスはそう言うと言を掻いた。

「アントンさんってヘクターさんの事嫌いなんですよね？だからイルヴァもアントンさん嫌いです」

イルヴァの真っ直ぐな言葉にわたしはぎよっとする。

「ちよっと……いくらなんでも失礼でしょ！」

わたしはイルヴァの腕を突いた。セリス達三人は顔を合わせると苦笑する。

「何言われてもしょうがないわよ、今回ばかりは。まるっきり手伝ってもらってるのと同じだし」

セリスが肩をすくめるのをわたしはじつと見た。

「何か変なの」

「何がよ」

セリスの言葉にわたしは口を尖らせた。

「意地悪じゃないから」

「どういう意味よ！……まあ今回はアントンが強情張ってるだけで私はこんな祭りどうでもいいし。依頼人がいない状況はマズいからここまでできたけど」

意外だがセリスも目的は依頼人であるフツキさんの搜索にしか興味はない、ということか。

「じゃああんな意地悪止めてよね」

わたしはバンダレンの町で壇上上がった際の事を思いだし、文句を言った。セリスは始め何の話しか分からなかったように眉を寄せていたが、次第に笑い出す。

「ああ、あれ？面白いかなー、と思って」

けらけらと笑うセリスにわたしは確信する。やっぱり彼女は根っからのSであり、それは仲間意識よりも強く働くようだ。

イリヤがチョコバーの残りを口に放り込んだ。口をもごもごとさせながら喋りだす。

「アントンがヘクター・ブラックモアが嫌いなので、あれだろ？前に好きな女取られたとかいうくだらないやつ」

「イリヤ！」

セリスの鋭い叱責が飛ぶ。わたしは喉にケーキをつまらせてしまった。胸元を叩きながら、混乱する頭を振り続けるが駄目だ。イリヤの言葉が脳内をぐるぐると周り続ける。

お、女あ！？取られたって……、なんだそりゃあ！

不穏な空気を感じ取ったのかイリヤの目が泳ぎ始めた。

「う、ごめん……」

「馬鹿じゃないの、あんた……」

セリスはそう呟くとわたしの顔をちらりと見る。

「そこまで言っただんなら最後まで話した方がいいんじゃない？」

セリスのはああ、という溜息にイリヤは再び「ごめん」と言い、眉が下がり続ける。

「……俺が話す方が早いだろ」

デビスが口を開くとイリヤの頭をぺん、と叩いた。

「俺はアントンとヘクターと同じクラスだからな。こいつらに余計な話したのも俺だし。……結構な騒ぎになったからお前も知ってるもんだと思ってたのに」

デビスがイルヴァの顔を見るが、イルヴァはのほほんとしたままだ。

「イルヴァ、他人にあんまり興味ないんです」

あくまでもイルヴァはイルヴァということだ。

「はい」

セリスが水筒のお茶を蓋に入れて差し出してくれた。わたしは「ありがと」と呟くと胸の支えを流し込むように飲み干す。デビスはその光景を見届けてから再び口を開いた。

「うちのクラスにも女戦士がいるんだけどよ、イルヴァとかと違って鈍臭いタイプでさ。良く言えば女の子らしいっていうのかな」

わたしの頭に可憐なタイプの女の子が思い浮かぶ。

「アントンはあの性格だからな、しょっちゅうこの子をいじめて……というかからかってんだ。俺からみれば好意があるの丸判りだったけどな。『剣の扱いがなってない』だとか『うじうじしてる性格が悪い』とか。止めてる奴もいたけど周りにもそう感じるところがあったから、あんまりマジに仲裁する奴もいなくてさ。で、事の起こりはだ」

デビスが炭坑内をぼんやり見つめている。思い出しているのだろう。

「組み手のあった日に、いつも通り組んだ奴みんなにこてんぱんにやられたそいつにさ、アントンが『向いてないんじゃないか』って言っただんだよ。皆、ああまた始まったよ、としか思わなかった。で

もヘクターがあいつにしちや結構な勢いで怒りだして……、その日は教官からも全員説教くらうはめになるぐらいの喧嘩になったんだ」わたしにも紙芝居のように光景が想像出来た。ソーサラークラスの騒動と違って随分騒がしいものだ、という感想とともに。

「それからだな、そいつがヘクターの周りにいつもいるようになったのは。べつたりってわけじゃないぜ？でも目の届く範囲にはいて、アントンがからかう、それをヘクターが止める、また離れなくなるっていう今思うと変な悪循環が出来ていた」

「悪循環？」

わたしが聞くとデビスが頷く。

「そいつの為に止めない方が良かったんだよ。周りが手を出してたらいつまでも強くなれない。精神的な意味でも、戦士としての力の意味でも。ヘクターにもわかっていたんだと思う。でも、目の前でアントンの暴言が始まると言わざるを得なかった感じだった。あいつの性格的に」

「アントンも馬鹿だから、余計言葉も酷くなってたんでしょ？」セリスが吐き捨てるように言った。散々な言われようだな……。

「そう。でももうその頃には止めるのはヘクターの役目みたいな雰囲気が出来ててさ。まあ、その、なんだ『あいつら出来てるんじゃないの』っていう感じというか」

デビスは少し言い難そうに言葉を濁した。

「その後、実際に告白があったらしいんだよ。でもヘクターが断ったって聞いた時が皆大騒ぎだった。『意味がわからん、じゃあなんで優しくしたんだ』っていうのが大半の意見。これは責めないで欲しいんだけど、男なんて皆そんなもんだからさ。……下心で動くというか。女の方も断られるとは思ってなかったみたいで、暫く来てなかったし」

うわあ、思ったよりドロドロの世界じゃないか……。

「変な話ですね」

意外にも真っ先に感想を述べたのはイルヴァだった。

「『優しくされたから好きになる』ならわかりますけど、『優しくされたから相手が自分のことを好きに違いない』と思うんですか？ 変じゃないですか」

イルヴアの言葉はいつも、ひたすら真っ直ぐだ。嘘が無く、飾りも無い。そんな彼女の頭の中も真っ直ぐなのだ。そりゃあ優しくされたら「もしかして……」なんて考えちゃうよなあ、などと思ってい

たわたしはイルヴアの言葉に猛省する。でも、誰が悪いとも言にくい後味の悪い話だ。

「というわけで、あんまり気にしない方がいいわよ」

セリスの言葉にわたしはどきりとする。

「な、何が……？」

「悪いのは全部うちのアントンっていうお馬鹿ちゃんだから、ってことよ」

「ああ、そういう意味ね」

わたしは頬を掻いた。セリスの目が笑っているのは気のせいだろうか。

しかし、アントンとヘクターの確執はそんなものからきたにしては、随分と激しいものな気がする。もう少しデイビスの話が聞きたいな、と思っていると、

「そろそろ行かない？」

イリヤが立ち上がる。わたしとイルヴアが身仕度を整える三人を見ているとセリスが意外なことを口にした。

「どうしたのよ、行かないの？」

「えっ……」

わたしはぼかんと口を開ける。

「人数多い方がいいじゃない。どうせ目的は一緒なんだから」

デイビスとイリヤも頷いている。わたしとイルヴアは目を合わせる

と立ち上がった。何だかセリスのイメージがまたしても変わりつつある。隣を歩く彼女を見てわたしは思った。

「リジアの魔法見るの楽しみだわあ。ね、ね、イリヤもデイビスも

楽しみにした方がいいわよ」

……こういう意地悪さは変わらないのか。

「セリス達が来た方は一本道なの？」

わたしが尋ねると三人とも頷いている。

「鉄格子で閉まっちまってるだけだから、行っても意味ないと思うぞ」

デИБイスが言った。

「じゃあわたし達が来た方向に戻りましょう。分かれ道があったから」

わたしは来た道を指差す。奇妙なパーティーが出来上がった瞬間だった。

「魔法陣？」

「そう」

わたしはセリスの問いに頷いた。

「テレポートのトラップになってるらしくて、見えにくい色合いだから気をつけて」

「そういう罠があるとなると盗賊タイプがないのが辛いなあ」

デビスが呟く。セリス達と合流出たことで『ライト』の光もわたしとセリスのもの二つに増えて明るくなったが、罠を見破ることで自体が素人では辛いものがある。わたしは戻ってきた二股に分かれる道を眺めた。

「……何か聞こえない？」

イリヤが声を潜ませる。わたしは一瞬固まると耳を澄ませた。別に何も、と言おうとした時に耳に微かに響いた音に、わたしは背中がヒヤリとする。聞き覚えのある金属音。あの鎧の歩く音だ。そんなわけではない。イルヴァが倒したりビングアーマーもどきは首の曲がる方向からして確実に絶命していた。本物のリビングアーマーなら分らないが、魔力が感じなかった故に偽物であったことも自信を持っていえる事だ。

じゃあ……、わたしが考えるまでも無く答えがやって来た。鎧の色が明らかに違う、別の個体だ。先程の銀色の鎧よりも黒いものと青銅色の二体。

「この人達は……？」

セリスは物言わぬ鎧に動揺の声を上げた。言い方からしてセリスも生きた人間だと分かっている。鎧達は何も言わないまま、手に持った剣と斧をそれぞれ構えた。

「敵、だろ？どう考えても」

デビスがにやりと笑う。イルヴァもすでに臨戦態勢だ。

「デイベス、気をつける。奴ら明らかに怒ってる」

イリヤが不思議な台詞を言った。それを気にかける暇もなく、にやつと笑ったデイベスが動き出す。

「はああ！」

デイベスが振り上げた大振りの斧が地面をえぐり取る。水飛沫かと思うような勢いで鎧達に降りかかっていた。目眩ましを食らって鎧達が怯んだところにイルヴァが走る。

「ぐっ……！」

黒い鎧がぎりぎりでイルヴァのハンマーをかわし、思わず声が漏れた。どうせバレてはいるとしても声を出すのはいただけない。

「何なの、あなた達！」

わたしが叫ぶと青銅の鎧が怒鳴り返してきた。

「うるせえ！あいつをあんな目に合わせたお前らにはここで眠ってもらう！」

あいつ、とは銀の鎧の事だろうか……。仲間意識は立派だがわたし達を襲う理由には足りないものがある。

「そもそもあいつは何で襲ってきたのよ！」

「タージオ山の為、お前らは犠牲なんだよ！」

またその話し！？ということはこいつらはバンダレンの町の人間か。いい加減話を聞いておきたい。わたしがイルヴァ達にどうにかして二人を捕らえるように伝えようとした時、

「スリーピング・フォッグ」

甘い囁きのようなセリスの呪文が聞こえた。誘眠性の霧が辺りに広がり、全てを眠りに誘う魔法だ。あれ、でもこれって……。

「セリス……」

わたしは隣りにいる彼女の名前を呼ぶのを最後に、深い眠りに落ちていった。

何処かから名前を呼ばれている。しつこいと思える程何度も。

うるさいなあ、聞こえてるよ。

聞こえているけど、返事が出て来ない。

名前を呼ぶ声を止めたくて、返事をしたいのに声が出ない。イライラとし始めた時、肩を揺すられてイライラが倍增する。

「……わかつてるってえ……」

「何がよ、良いから起きてよ」

がばっ！わたしは体を起こした。傍らにはセリスの姿。

「その彼女はリジアが起こしてくれない？全然起きないのよね」

セリスは炭鉱内、仰向けに倒れてぐーすか眠りこけるイルヴァを指差した。

「よ、余計なことを……」

「何が？」

「さっきの呪文よ！何もわたし達にまで害が及ぶようなもの使わなくてもいいじゃない！」

わたしはセリスの横暴すぎるやり方に文句を付ける。先程の呪文、使用者には魔術障壁がかかるという便利なものだが、仲間であるこちらまで土まみれにされるといふのは避けられない。わたしは泥だらけになったローブを叩きながら涙目になる。イルヴァを起こす大変さを知らないから…… ったく。

「うちらはいつもこんなやり方なのよねー」

あっけらかんと言うセリスの背後では、すでに起こされた後らしいデビースとイリヤがわたしと同じ、背中を泥まみれにしながら鎧達を縛り上げていた。

わたしは立ち上がるとイルヴァを起こす作業に入ることにする。ほんつとうに迷惑だ。

「イルヴァ、起きて！」

衿元を掴み、イルヴァの頬を目一杯の力で叩き続ける。こちらの手の平が痛いぐらいなのにイルヴァの頬は綺麗なままなのが、毎度のことながら不思議だ。

「そんなにしちやって良かったんだ？」

セリスの言葉にワクワクしたものを覚めるのは気のせいだろうか。

「こっちは終わったぜ」

イリヤが手足を嚴重に縛り上げた鎧達の兜を取り外しながら言った。見ると鎧の中身は若い男性二人である。首の太さからして体格の良さがわかる。立派な冒険者にも慣れそうだというのに、なぜこんなことをしているのか……。二人の眠りこけた顔にわたしは深い溜息をついた。

セリスはおもむろに鎧達に近付くと、黒い鎧の男の方に座り込んだ。
「起きなさい！」

びびっ！と張り手が飛ぶ。爪が引つかかったのか、男の頬に赤い一筋が走った。男が薄らと目を開ける。びくん、と体を揺らすと周りをきよろきよろと見渡し、隣りで眠りこける相棒を見て目を見開いた。すぐに体の自由が効かないことを理解して鎧をがちゃがちゃといわせ、セリスを睨む。

「どうするつもりだ」

「知っていること洗いざらいぶちまけて貰おうかしらね」

にや、と笑うセリス。それにしてもこういう事がよく似合う人だ。

「言っておくけど、私達はすでにここには『砂漠の石』なんて無いことも知っているし、あんた達が祭り騒ぎを隠れ蓑に何やら企んでも知ってるから」

セリスが淡々と言うと男の顔に少し動揺の色が走った。が、すぐににやにやと笑う顔に戻る。

「そうだよ、ここにはある化け物が眠ってる。……お前らだってすぐにそいつの餌食になる。遅かれ早かれな。俺達はその手助けをしているにすぎない。俺達をどうこうしたって無駄なんだ」

「だからその『化け物』について教えなさいよ」

セリスが顔を近づけると男は目を反らした。

「し、知らねえよ」

「あ、そ」

セリスが立ち上がるとデイベスがアックスを握り直す。

「どうする？消しとくか、こいつ？」

「いいわよ、どうせすぐに効き目が出てくるから。……さつき神経性の毒物打つといたから。素直に喋れば解毒剤もあったのにねえ」
わたしには芝居だと分かる会話だが、怖過ぎる。セリスの嵌り具合がまた怖い。

男は明らかに先程とは変わった様子で暴れだした。

「本当に知らねえんだよ！化け物だって俺が生まれる前に出てきた話した！俺達バンダレンの人間は、何処に行ってもこの化け物に呪い殺されるから、だから生け贄を探し続けるしかないんだよ！」

「セリス、こいつは本当に何も知らないよ」

イリヤが静かに言った。セリスは頷く。

「行きましよう、可哀想な僕達にそこで酔ってるといいわ」

「解毒剤は！？」

「そんなもんねえよ」

男の悲鳴にデイベイスが吐き捨てる。

「死んじゃうんですかあ？この人達」

いつの間にか起きだしたイルヴァの台詞がとどめとなって、男は力無く頂垂れた。

「あのままで良いんですか？」

前を歩くセリス達にイルヴァが問いかけた。わたしが「嘘に決まってるでしょ」と言うときセリスが振り向き笑う。

「いくらなんでもあそこまで夢見の悪いことしないわよ」

「それどころか学園にいられないわよ、毒物の扱いなんて」

わたしは学園の禁止事項の一つであることを言うときイリヤが肩をすくめた。

「俺は脅し文句に使うのも反対なんだけどな。教官達にばれたらうるさそうだ」

「あ、そうだ」

わたしはイリヤに尋ねる。

「さつき、『怒ってる』とか『何も知らない』とかちよつと気になる台詞言ってたけど、まさか心が読めるの？」

いまだに分かつていなかったイリヤの能力にわたしはわくわくしなから聞いた。彼は再び肩をすくめると「まさか」と言った。

「俺は温度変化に敏感なんだ。俺の能力の副産物だけど便利だよ」ということは真の能力は別なんだ。でも地味だけど便利そうだな、それ。

「リジア動物好き？」

セリスに聞かれてわたしは頷いた。攻撃の意思が無ければ大抵の動物は好きだ。フローラちゃんまで爬虫類まで可愛く思えるようになってきたし。

「こ、今度見せてあげるよ」

なぜか吃るのが気になったがイリヤの申し出にわたしは「是非」と答えた。

「こいつは結構、人見知りするからよ。イリヤの能力見られるのは貴重だぜ」

デビスが笑った。なんだか仲良くなれたようで嬉しいじゃないか。

「イルヴァも見たいですー」

「君も、もちろん」

イリヤもなんだか嬉しそうに見えた。

「うひょう、何ここ？」

わたしは広がる光景に声を漏らす。適当に道を選びながら進んできたわたし達がやってきたのは道幅、天井までの高さ共に倍以上に広がった場所だった。皆自然と腕を伸ばす。イリヤだけがじっと前を見ていたかと思うとわたし達の方へ振り返る。

「明かり、もつと出せたりしない？」

わたしとセリスは顔を見合わせると『ライト』の呪文を唱え始めた。
『ライト』

二人同時に出現させた光源は、わたしの物はいつもより特大サイズのド派手版。セリスは二つ同時に出現させるという器用なことをやっている。個人の性格が出るようで面白い。

「うわ、あぶねえな！」

デビスが現れた通りの姿に一步下がった。道幅が広がったかわりに両サイドに底の見えない大穴がぼこぼこ続いているのだ。

「よく分かったわね」

セリスがイリヤに尋ねると彼は穴を指差す。

「何か入れてみなよ」

イルヴァが歩きながら齧りついていたリングを最後の一口を口に入れると、ぽいつ、と穴へと投げた。次の瞬間、ごお！という音を立てて火柱が出現した。穴の奥底からのし上がってくる熱気にただ唾然とする。

「マジで死んじまうじゃねえかよ、こんなの」

デビスの言葉は今更という感じでおマヌケなようでいて、わたし達の気を引き締める効果もあった。

「気をつけて」

イリヤの言葉に皆必要以上に中央に寄りながら歩き始める。

穴が続く大きな通路の見た目半分ほどに来た時だろうか。足の裏に

『かちり』というような違和感を感じた。石でも踏んだのだろうか。ブーツの隙間に入ったら嫌だな、と足の裏を見ようとした。が、
「やべえ！」

デビスが後ろを振り向き叫ぶ。咄嗟の出来事に心臓が飛び出しそうになりながら後ろを見た。言葉無く、息を吸い込む。無かったはずのものが出現しているのだ。

「転がって来てる！？」

セリスが叫んだ。背後には道幅いっぱいのおおきさの巨大な岩が現れていて、更に目に見えて大きくなってきているのだ。穴の上を通過度に火柱を出現させ、どんどんと赤い火の玉に変わっていく。

「走れ！」

デビスの声に弾かれたように五人は駆け出した。足下も怖いけど、後ろの迫り来る恐怖には走るしかない。

駆け出すわたし達に更なる動揺が走る。前方に現れたのは左右に分れた道だったからだ。こういう時は咄嗟にどちらに行くべきか声を出すべきだ。わかってはいる。わかつてはいたのだが、声に出したものと同じ方に自分はちゃんと行けるのか、という余計な考えが脳裏に走ってしまった。「左よ！」その声に出そうとした瞬間、背中に熱気を感じた。大岩がすぐ後ろにあるという恐怖。

「つつ……」

言葉を出す余裕無く、わたしは無我夢中で足を動かして、いや動いているのかも曖昧になる意識の中、無意識に飛んでいた。通路を転がり、脇腹に鈍い痛みを感じられてようやく辺りに響き渡る轟音に気が付いた。岩を擦るような音、破裂音が耳に痛い。

目を開けるとただ闇が広がっていることにぎよつとする。慌てて呪文を唱えた。

「ライト！」

ふわり、と魔法の光源が出現しわたしは息を飲む。

「うそ、でしょ」

その場に立っているのは、わたしただ一人だったのだ。ぺたり、と

地にへたりこむ。

ど、どうしよう……。

岩がすっかり元来た通路を塞いでいる。まさかこの下に誰がいる、ということはないと思いたい。たぶん皆反対側に行ってしまったのだろう。皆の方こそわたしが岩の下敷きになっていると心配しているかもしれないのだ。

しかし寄りによってわたしが一人になるとは。イルヴァやデイビスのようなファイターなら一人になってもどうにかなっただろうが、普段彼らに守られながら横槍しか入れてない自分が一人になったところでどうしろというんだ。心細さが急激に襲ってきた。

もうやだ、帰りたい。いや、帰れるかどうかも怪しくなってきたじゃないか。自分で突っ込んでいくらか落ち着きを取り戻す。

「トンネル掘りの呪文、馬鹿にせずに覚えとけば良かった……」

土の精霊に働きかけて穴を開けて行く呪文があるのだが、見た目の地味さから習得する学生は少ない。学生時代、派手な呪文が人気で卒業すると地味な魔法をカバーしていく卒業生が多い、という傾向が身にしてみわかる。一瞬「セリスが覚えてたりするかも」という期待から待ってみたりするが、何も異変は起こらない。わたしはふう、と息を吐くと、

「しょうがない……、歩いてみるか」

そう呟くと踵を返した。

セリス達に会えたように誰かしらと合流できるかもしれないし。学園の仲間じゃなくてもわたし一人うつついていたら助けてくれるかも、という期待もある。一步、一步、情けないほど慎重になりながら歩き始めた。

「……もう疲れたよー」

わたしは痛む足を引きずるように押し進めながら呟いた。虚しいかな、人は愚かモンスターにまで会わない始末。ただ自分のライトが

照らす中をひたすら歩き続けてきた。一体外の時間はどのくらいになっっているのだろう。物語なんかでは大抵『表に出ると思った以上に時間が流れていて』なんてよく出てくるものだ。相当遅い時間かもしれない。お腹も空いたし、喉も乾いた。

「ちよつと休もうかな……」

良いタイミングで現れた古い木材の山を見つけ、わたしは腰掛けた。「はああ……」

足の裏がじんじんと痛い。足を伸ばしたことで急に睡魔がやってくる。いかんいかん。

……これって、ダンジョンで迷った、なんて格好いいもんじゃなく『遭難』したって言わないか？自分が白骨になった姿を想像し、頭を振った。

もう誰でもいい、モンスターでもいいや、生き物に出会いたい。……やっぱ話しを通じる方が良いかな？皆は今どうしているだろう。

ローザ、イルヴァ、アルフレート、フロロ……。ヘクターとヤツキさんは無事なのかな。ヘクターが一緒だもん、大丈夫だよ。……もしかしてもう、フツキさんが見つかって、町に帰ってたりしないよね？ああ、駄目だ。どんどん不安になる。

ヘクターの銀色の髪を思い出し、不覚にも涙が滲んで来た。どうしよう、もう会えなかったら。でも今会うのも恥ずかしいな。髪もドロドロ、体中泥と汗まみれだ。……なんてこと考えてたら、向こうからやってきてくれたりしないだろうか。

ぼんやりと考えていると、向こうから朧げに見えた光に一瞬にして頭が覚醒する。ヘクターかもしれない。違うかもしれない。でも、明かりを持っているということは人であるということだ。わたしは立ち上がった。よろよろと近づいていくと光の大きさが少しずつ大きくなっていく。

シルエットがはっきりしてくると、わたしはこんな状態でも会いたくない人間もいるのだな、と知る事になった。

「げ、お前かよ」

向こうもわたしを見て露骨に顔をしかめる。細身の体にカタナを差し、手には魔晶石の『ライト』を持っている男。緑色の頭は見間違えようが無い。アントンだ。向こうにも分かるようにわたしはがっくりと肩を落とした。

「こっちの台詞よ。ようやく会えた人影があんだったとは……」
もはやアントンに対してではなく自分への独り言のような声しかない。それでも彼にはばっちり聞こえていたようで、アントンは目を吊り上げる。

「可愛いげのねえ女だな」

アントンの言葉にデイベスから聞いた話を思いだした。話しに出てくるアントンの好きな子って、可憐で弱々しい子だっけ。ファイタークラスにそんなタイプがいること自体不思議だが、だからこそ良く見えたのかも。

なんてどうでもいいことはさておき、とわたしは先に進もうとする。

アントンが来た方向に行くのは嫌味っぽいかもしれない。

「おい、そっちは行くな」

「……なんでよ」

わたしが睨むと意外にも真顔で答える。

「危ないんだよ。色々。まともに進めないと思うぜ」

そう言われてわたしは困ってしまった。アントンが危ないという所をわたしが無事潜り抜けられるとは思えない。が、来た道を引き返すとなるとアントンと同行することになる。うーん。

「大体でいいから道案内しろよ。来た道ぐらいわかんんだろ？あんたが来た方には目的の物は無いってことなんだろうから」

アントンの方が大人、というまさかの自体にわたしは密かに齒軋りした。ここは大人しくしたがっておいた方が良さそうだ。

「わかったわ。分岐には全部印が付いてるから、迷わないと思う」

わたしは疲れた足を隠しながら、颯爽と歩き出した。

唸る混沌、タージオ山

「纏めて来い！うすのろどもがっ！」

アントンがおっそろしい叫びと共に振り回した刀が、ワーウルフの腕を切り落とした。数では圧倒しているワーウルフ達もアントンの勢いに押されっぱなしだ。わたしはバーサーカーと化したアントンをただボンヤリと眺める役になっていた。だって下手に手を出すと怒られるし。

ワーウルフの吠える声が怒りというよりは悲鳴に聞こえ出した時、アントンにも疲労の色が見え始めたことにわたしは気が付いた。少し躊躇した後、わたしは呪文を唱えだす。残り二匹になったワーウルフが同時にアントンへ攻撃を繰り出した。一匹はアントンの返り討ちに会い、もう一体に向けてわたしは呪文を放つ。

「ライトニング・ボルト！」

電流がわたしの手の先から伸びる。激しい光と弾ける音がワーウルフに絡み付き、体が跳ねた。そこへアントンの刀が走る。体の中心を貫かれ、ゆっくりと地に伏せるワーウルフ。

アントンは肩で息するのを隠すようにわたしから横を向いた。それを見るとわたしもどこを向いていいのか分からなくなってしまふ。はあ、この空気、何とかならないかな。妙に殺伐とした雰囲気にし潰されそうだ。わたしも疲れを見せないようにしているのは同じだけに声を掛け辛かったりする。

「助かった」

ぽつり、呟いたアントンの言葉にわたしは振り向いた。アントンはただ空を見つめたままこちらを見ようとしませんが、わたしは苦笑すると「いえいえ」と返す。

「行くぞ」

ぶつきらばうに言うときつさと歩き出した。わたしは少し距離を置きながら彼の後についていく。足が痛くて妙な歩き方になっている

今、この方が気が楽だ。しかしセリス達三人に続いてアントンに会うとは。あとはサラとヴェラに会えばフルコンプだわ。などと考えていてはっ、とする。

「そういえば、なんでサラ達と一緒にじゃないの？」

わたしの質問にアントンは忌ま忌まし気に舌打ちした。

「変な魔法陣に飛ばされたんだよ。……あの盗賊、何の役にもたたねえ」

あれにひっかかったのか……。それにしてもヴェラって……色々心配になる娘だ。わたしはあのトラップがこの炭坑内への移動で済んだことを慰めようか迷う。その時だった。

うおーん……うおーん……うおーん……

微かな風と共に広がる音。羽音にも似た不気味な音色。

「な、なんだよ、これ」

アントンがわたしを見るが、わたしにも答えようがない。音は耳からお腹の底に入ってくるようだ。心臓の鼓動が早まる。なんだろう、この音、すごく不安になる音だ。鐘の音のような綺麗さも無い。人口的にも感じるが、すごく無機質な音。音は徐々に大きくなってきた。わたしは不安から手を固く握る。

わたしとアントンはただ立ったまま成り行きを見守っていた。それしか出来なかったからだ。音の発生源など見当たらないし、たぶん炭坑全体に響いているんじゃないだろうか。

「……止まった」

急に音が止んで、わたしは逆に不安が増す。次の展開が起こるような気がして。しかし静まり返ったままの炭鉱内に、アントンの溜息が響いた。

「何もねえみたいだな……」

アントンも不安はあったようで、刀を握りしめていた。わたしは頭に残った音の残骸に首を振る。まだ聞こえているような気がしてしまふのだ。それに、妙に体がだるい。疲労感はとくにピークまできていたのだが、それに加えて無気力感が湧いてきていた。

これって……精神力の減退？わたしは嫌な予感に仲間の無事を祈るしかなかった。

「ばちん、とアントンがカタナを仕舞う音が響く。

「少し休まないか？」

たった今倒したグール達を見下ろしながらアントンが提案してきた。わたしは首を振る。それを見てアントンが露骨に顔をしかめた。

「俺が休みたいわけじゃねえよ。あんたの足が痛んでるのは俺だつて気が付いてるんだ」

アントンはまくし立てると、わたしの足を指差す。それでもわたしは首を振った。アントンが何か言おうとするのを手で制するとグールの動かなくなった山を指差す。

「どんなに疲れていても、こんなのを目にしながら休むなんて御免よ」

そう言い放つと先に見える岩場を指した。

「あっちに行きましよ」

「可愛くねえなあ」

けつと悪態つくアントン。可愛くない可愛くないうるさいな。

わたしはなるべくグール達の山から離れるとゆっくりと腰を下ろした。冷たい岩肌が気持ち良い。わたしがブーツを脱いでいると隣りにアントンが座る。ゆっくりと唱えるわたしの呪文を聞いて少し驚く。

「回復も出来るんだな」

「出来ないよりマシ、って程度のね……『キュアネス』」

白魔術の一番基礎の魔法を唱え終わると、足に当てた。こんな呪文でも大分楽になってくる。

「あんた、あいつの前でもそんな態度なのかよ」

わたしの半分あぐらをかいた状態がお気に召さなかったらしく、アントンは眉を寄せた。足を治してる間ぐらい良いじゃないか。

「さあね……。まああんたより数倍良い人だから、こっちの態度も良くなるわよ」

アントンの言う『あいつ』をヘクターだと解釈して答える。

「良い人、ねえ」

にやりと嫌な笑いを浮かべるアントンをわたしは睨んだ。

「良い人よ。いつも皆の事を考えていて、優しい。……っ！か女に振られたぐらいでネチネチと、女々しい奴ね」

ふん、とわたしは鼻を鳴らす。が、アントンは一瞬の間を置いた後、

「はあ？何の話してんだ、あんた」

呆れたような顔をした。あ、あれ？違うの？ちよつとした弱みを握ったつもりでいたわたしは内心、動揺する。くそう、イリヤにデИБス……。と理不尽な恨みを持つわたし。誤魔化すように反対の足を治療することにする。

「おい……」

アントンが苛ついたように声を出した時、わたしは動きを止めた。

「……何か聞こえない？」

「はあ？おい、誤魔化すなよ」

「違うわよ！本当に聞こえるんだから」

「……さっきの音じゃないだろうな」

アントンが言うのは先程の不気味な音の事だろう。しかし、わたしの耳に聞こえてきたのはもっと聞き覚えのある人の声だった。

「ヤツキさんだわ！」

彼の必要以上に元気な声が一瞬、聞こえてきたのだ。ヤツキさんがいる、ということはヘクターと一緒にいるはず！

わたしは思わず駆け出した。……つもりだった。後ろからの力にがくん、と後ろにひっくり返りそうになる。

「ちよつと……！」

わたしはアントンと自分の右腕を掴む彼の右手を交互に睨んだ。信じられない彼の行動にわたしはパニックになる。腕を振り払おうとするわたしと、それを拒むアントンとで争っていると背後から声が

かかった。

「リジア」

呟くような声でも、はつきりと響くヘクターの呼び声。わたしは掴まれる腕はそのままに振り向く。一番会いたかった人の姿にわたしは思わず涙ぐんでしまった。

「ど、どおしたんすかあ!？」

ヤツキさんの驚いた声にヘクターがはっ、としたようにロングソードに手をかける。わたしはアントンの行動の意味が少し理解出来て更に動揺した。

「な、何か物騒なこと考えてない!？」

わたしがアントンに叫ぶと、彼はにやりと笑う。しかしアントンの暗い目の光にわたしは背中がひやり、とした。

「リジアさん、無事だったんすねえー!」

駆け出そうとするヤツキさんに、後ろから声が響く。

「リジアの手を放すんだ」

ヘクターの声に、はしゃぎかけたヤツキさんの動きが止まる。静かで冷静な、でもとても冷たい声にわたし、そしてヤツキさんもヘクターの顔を見た。その目にあるのは怒りなのだろうか。アントンといい戦士の真剣な目には言いしれない力がある。見てはいけないよな、そんな気持ちにさせる。

「良い顔するじゃねえか」

アントンは笑うような声でそう言うと、わたしの腕を引っ張った。

「な、何……」

抱きつかれる形で背中に腕は回されて、わたしは混乱する。

もしかして、連れ去られる!?

そう考えた時、わたしは今まで以上のパニックを引き起こすことになる。アントンが口を突き出し、顔を近づけてきたのだ。

『ぎゃー!』

わたしと、なぜかヤツキさんの悲鳴が重なる。わたしは渾身の力で腕を振り回すとアントンの顔を引っ掻いた。

「いつてえ！」

アントンの力が緩み、体が自由になる。少しわざとのような気がしたが、わたしはヘクターとヤッキさんの元へ走った。

「危ないっす！」

ヤッキさんの悲鳴混じりの声にわたしは後ろを振り向く。アントンが刀を抜いて迫って来ているではないか。ち、ちよーっ！

わたしが地面に転がるのと、剣がぶつかる硬質の音が響いたのは同時だった。慌てて振り返るとヘクターとアントンがお互いの武器を合わせている。

「その目を待つてたんだよ！」

アントンが吠える。激しい打ち合いが始まってしまった。

「り、リジアさん」

ヤッキさんに手を貸してもらい、わたしは立ち上がる。

わたし達は二人の攻防を見守るしかなかった。アントンが隙だらけにも見える体勢から刀を振り回すと、ヘクターがそれをソードではじく。彼の反撃もアントンの身のこなしに避けられる。

「な、何なんすか……、あの人」

ヤッキさんが震える声で聞いてきた。聞かれてもわたしにはどう答えていいのかわからなかった。わたしにもわからないからだ。アントンという人が。どうしよう、止めさせなきゃ。どうする？どうすれば……。

「ど、どうしよう」

ヤッキさんのあわあわとした声にはっ、とする。ヘクターの頬から、アントンの腕から赤いものが走っているではないか。二人の銀色に輝く刃が暗がりにも光る度、赤い鮮血が飛び散った。一瞬頭が真っ白になるが、無意識のうちにわたしは呪文を唱え始めていた。

「くそっ」

アントンの呟きが漏れる。何度目かわからない金属のぶつかる音が耳に響いた。

「なぜ本気で来ない！？」

アントンが叫ぶのと、ヘクターの剣が空に弾かれるは同時だった。
「きゃっ」という小さな悲鳴を漏らし、ヤツキさんが手で顔を覆う。
からん、というヘクターのロングソードが地面に転がる音。静寂が
広がる。

「……くそ、良くて相打ちか」

アントンがわたしを見た。ファイアーボールをあとは撃つだけになったわたしは、涙でぼやける視界から二人の見ていた。ここで撃つたら4人とも巻き添えだ。それでも、わたしは撃つつもりでいた。アントンがどこまでわたしの考えを読んでいたのなんてわからない。それでも彼はヘクターの首元に構えていた刀を下げる。

「くそっ」

最後に吐き捨てるアントンは暗がりの道を走って行ってしまった。逃げるように去って行くアントン。それをわたしは目で追うことも出来なかった。

彼の足音が聞こえなくなってから、ヘクターが溜息をつきながら剣をゆっくりと拾いあげる。ぱちん、と鞘に仕舞うと首を振った。そしてわたしの方を見た。わたしは魔法を破棄する為に手を振るような仕種をする。ばうん、という音に弾ける光と煙のようなものが漂った。それを見届けてから、ヘクターがわたしの手を取る。

「……怪我は？」

少し赤くなっているわたしの手首を見て、顔をしかめる。自分こそ血だらけじゃないか。わたしは頼りない自分の回復呪文を唱えると、ヘクターの頬の傷に当てた。その手を更にヘクターに取られる。

「……ごめん」

わたしは背中に感じる彼の腕と、耳元に響く声でようやく体に血が通い出すのを感じた。

「ごめん」

わたしを抱きしめながら再び謝るヘクターの上着を、わたしは強く握りしめた。

「だからどうしてあなたが泣くんです」

ヘクターが珍しく呆れたように言い放つ。

「だって……、情けないけど怖くって……。もしもの事が起きたら、僕はどう謝罪すればいいのか……」

歩きながらメソメソと泣くのはヤツキさん。こんな乙女キャラはわたしに譲って欲しいところではあるが、わたしはヤツキさんの背中を擦りながら歩いた。

「危険は承知に決まってるでしょう。あなたが気にすることじゃない」

ヘクターはふう、と息をつくと言ッキさんに振り返る。

「俺の方こそ、さつきはどうしようもなく甘かった。あの場でやられていたら、責められるのは俺の方だ」

アントンがわたし達を惨殺、なんてあり得ない事だが、それでもヘクターはわたしと言ッキさんに謝った。ヤツキさんは更によよ……

と涙汲む。

「無事だったんだからいいじゃないですか……。僕が連れてきたんだし、僕が悪いんです……」

もしかしてずっとこのノリに付き合わされてるのか。ヘクターの疲れきった顔にわたしは同情した。そこで思い出すのが不気味な音のこと。わたしは二人にも尋ねることにする。

「ちよつと前に変な音がしてこなかった？」

ヘクターと言ッキさんははっ、としたような顔をした後頷く。

「鐘みたいなの……鈍い音だろ？」

ヘクターが言っていると言ッキさんは嫌なものを思い出すように首を振った。

「僕は無駄に耳が良いもんで……吐きそうになりましたよ……」
音楽家である言ッキさんには堪えただろう。

「終わった後、虚無感みたいなんだるい感じにはならなかった？」

わたしが尚も聞くと、二人は顔を合わせた。

「かなり不快にはなっただけ、そういうのは無かった、かな？」

ヘクターとヤツキさんは首を傾げる。アントンも特に言っただけでなかったな……。わたしだけだったんだろうか。

薄暗い道はまた狭いものに変わっていった。転がる石に足を取られるとヘクターがよろける体を受け止めてくれる。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

先程までのアントンとの行中を思い出し、扱いの違いにニマニマしてしまった。

「疲れたっすね。足に来てるんじゃないっすか？」

ヤツキさんが声を掛けてくれるが、わたしは疲れが飛んだような気持ちになりヤツキさんの肩を叩いた。

「大丈夫！がんばりましょう。きっとその内フツキさんに会えますよ」

「そ、そうっすか？」

わたしの押しに引いたのか、ヤツキさんは頬を掻いている。

少し大きな段差が現れ、ヘクターがわたしの手を取ろうとしたのか手を伸ばしてきた時だった。三人同時に顔を上げる。

うおーん……うおーん……うおーん……

「まだだ……」

ヘクターが眉間に皺寄せる。ヤツキさんが不安そうにわたしとヘクターの腕を取った。

「何なのかしら……」

答えなど返ってくるわけがないのだが、わたしは口にせずにはいらなかった。それ程、人の不安感を煽るような音だ。ヤツキさんがぎゅっと目をつぶっている。先程の時より音が大きくなってきた気がする。発生源が近いのか？わたしが辺りを見回したその時、どん！正体不明の音をかき消す爆発音がし、わたしは声にならない

悲鳴をあげた。爆風に体を取られそうになる。

「……………う、く……………」

奥歯を噛み締めながら、ゆっくりと目を開けていった。もうもうと立ちこめる土煙。ぱらぱらと小石の粒が地面に落ちる音。徐々に視界がクリアになっていくにつれて、爆発の原因がわかってきた。歩いていた通路の少し前方、大きな横穴が出現しているのだ。そこからひよい、と顔を出したのはよく見知ったエルフの顔。

「あ、アルフレート！」

わたしはふいに出現した彼の名前を叫んだ。が、

「……………ちつ、ここじゃなかったか」

それを無視して顔を引っ込めるアルフレート。おい！

「ちよつと、アルフレート！」

わたしは今だ煙が漂う横穴から顔を出すと、さつさと立ち去ろうとするエルフの男に呼び掛けた。

「なんだ？」

普段と全く変わらない様子で聞かれ、わたしは頬がひくつく。

「なんだ、じゃないでしょうが。せつかく再会出来たっつーのに！」

「再会って、大袈裟なやつだな。たかだか一日分かれてただけじゃないか。同じこの炭坑にいるのは分かっているというのに」

「そういう問題じゃ……………って、一日い！？」

わたしは時間の流れにぎよつとした。そりゃ足も痛むはずだわ……………。

「見ろ、お前がギャース力騒いでいる間に音が止んでしまったじゃないか」

アルフレートの舌打ちにわたしは辺りを伺う。本当だ。いつの間にか音は止んでいた。

「音の発生源でも探していたのか？アルフレート」

ヘクターも穴を通りやって来る。

「早いとこ何とかしておかないと、あれは少々まずそうだからな」
アルフレートが言った答えにわたしとヘクターは顔を合わせた。

「あれ、何なの？」

わたしが聞くとアルフレートはわたしをじっと見てくる。

「……お前は大丈夫そうだな。まあ化け物じみた魔力だから当たり前か」

その言葉にわたしはヒヤリとした。

「魔力を……奪うの？」

アルフレートは黙って頷く。わたしの頭にローザ、サラ、セリスが順に浮かんでいった。

「大変……、大丈夫かな」

人の体に宿る魔力は生まれつき個人差があり、全く無い人もいる。そしてなぜか『持っている』人間は魔力を消耗すると疲労感に襲われるのだ。激しい消耗では意識を失うこともある。魔力を持たない人間にはなぜ無関係なのかは分かっていない。

「かなりグロッキーになってるかもしれないな」

アルフレートは淡々と言う。

「そんなこと冷静に言わないでよ……。どうしよう」

「だから今、発生源を探していると言ってるだろうが」

アルフレートは「馬鹿め」と睨むとまた歩き出す。わたしたちはヤツキさん呼び寄せると慌てて後を追いかけた。

「頭痛いつす、ぐふう……」

ヤツキさんはわたしに腕を引っ張られながらばやく。

「フロロも心配だな」

ヘクターがわたしの顔を見た。フロロも音楽的なものではないにしても、とにかく耳が良い。わたし達以上に音のダメージは受けているはずだ。わたしはセリス達という時に出会った鎧の男の言葉を思い出す。化け物がいる、その言葉からこの世のものではない生き物が魔力を吸い込む光景を想像してしまった。

それを肯定されるかように少しすると、一人のローブ姿の人間が倒れているのを発見してしまった。一人うつ伏せに倒れる男性を見てわたしは息を飲む。ヘクターが抱き起こすとアルフレートが手を出した。その手は淡い光で包まれている。男性ののど元より下辺りに

突き付けると光が男性へ吸い込まれていった。魔力譲渡だ。驚くような技では無いが、不器用なわたしには出来ないことだったりする。男性がゆっくり目を開ける。わたし達の顔を見回すと慌てて起き上がるが、ふらついている。

「すまない……、魔力が減退するような感覚はあったんだが、倒れてしまったんだな」

「あなたはもうリタイヤするべきだ。ここにいと危ないぞ」
アルフレートが言う。と男性は困ったように頬を掻いた。

「そうしたいのはやまやまだが、すんなり出られるかどうか……」

「ここからまっすぐ、脇道に入らず進んで突き当たったら右。その後の三つ又を左に行ったら崖の上だが空を仰げるさ。『レビテーシヨン』ぐらいは使えるのだろう？」

「え、え、え？ スマン、もう一度頼む」

男性の返答にアルフレートは露骨に嫌な顔をするが、嫌味な程ゆっくりに言い直す。

わたし達は頭を下げながら来た道を戻っていく。男性を暫く見届けた後、再び歩き出した。

「気をつける、何かいる」

アルフレートが炭坑内の奥を見てわたし達に言った。わたしはアルフレートがこんな風に注意を促すことに身構える。かなり広くなつた先の方にうごめく影があつた。

「何すかね、アレ……」

不安そうなヤツキさんの声にわたしは振り返る。

「ヤツキさんはここでわたしと一緒にいましょう」

残りの二人に丸投げするような発言だが、それが一番なのだからしょうがない。案の定、二人はわたし達を手で止めるようなそぶりの後、ゆっくりと広まつた奥へと進んで行く。ヤツキさんがわたしの手をぎゅつと握る。何とも乙女な反応にわたしは少し冷静になつた。

「犬……？」

ヤツキさんの呟きにわたしは背筋が凍る。あのでかさで犬の姿といつたら、魔界の番犬ケロベロスがまず浮かんでしまったからだ。物語の中で歴戦の勇者が苦戦するような伝説のモンスター。近寄るだけでマズインじゃ……。それでも暗がりに進み続ける二人にわたしはこくん、と唾を飲む。アルフレートは暗がりで見えなくはすだし、きつと大丈夫、だよ。

ぶおお、というような獣の音が響いた。息を吐く度に小山のように大きな犬のシルエツトが浮かび上がる。吐く息が発光しているのだ。威嚇するように地に足を踏ん張る姿は美しくもある。

「わわわ、何ですか！大丈夫ですか！二人は！？」

ヤツキさんがじたばたと暴れるがわたしには答えようがない。ケロベロスなのか、別のモンスターなのか。ケロベロスなんて見た事もないのだから。

かつ、と一段と激しい光が広がった。魔物の口から青白い炎のようなものが吹き出される。この炎を吹き出す能力が小さな頃に読んだ

本の挿絵を思い起こす。これって、やっぱりケロベロスなの！？
わたしがヤツキさんの手を握る力を強めるのと、アルフレートの作り出したシールドのようなものが炎を四散させるのと同じだった。ほっと息をつくとアルフレートが踵を返し、こちらに帰ってくるではないか。それを横目で見ていたヘクターも慌てて後ろ向きに下がる。

「ち、ちよつと……」

わたしが予想外の事に動揺しているとアルフレートがわたし達のいる通路に帰ってきた。

「やばいやばいやばい」

「ちよつとお！自信満々に出て行ってそりやないでしょ！大体ヘクター見捨ててこないでよお！」

「あんなのいるなんて聞いてないぞ」

「誰が知ってるんだ！あんなのいるって！」

わたしとアルフレートが言い合っているとヤツキさんが間に入る。

「違う道を探しましょうよ。あんなの危ないっす！」

そう言つてヘクターにも必死に「帰ってこい」と手招きした。その時、後ろから声がかかる。

「何とか出来るかもしれないぜ」

聞き覚えのある声にわたしは一瞬固まった後、勢いよく振り返った。そこへ首が折れるんじゃないかと思う程の勢いで抱きつかれる。

「リジア！」

「イルヴァ！無事だったのね！」

わたしが顔を上げると珍しくイルヴァが顔を歪ませていた。

「良かったです。リジアが岩にぺちゃんこにされたと思っちゃいましたあ」

「だから言つたろ？絶対無事だつて」

そう言いながら姿を現したのはデイビス。後ろではセリスが手を振っている。

「はあい、リジア。大丈夫だった？」

わたしは笑顔で頷くと、始めに発言した人物を見た。

「どうにか、ってどうするの？イリヤ」

わたしの言葉にイリヤが前に出る。頬を掻きつつわたし達を見回した。

「半々ぐらいの確立だと思って、あんまり期待しないで欲しいんだけどね」

そう言いながらもイリヤの顔には自信のようなものがあるように見える。彼は肩を竦めた後、奥にいる魔物を覗くように前を見た。

わたし達は奥へと歩みを続けるイリヤを見守っていた。彼はゆっくりとだが一歩一歩魔物へと近寄っていく。彼が魔物へと近づく度にわたしは手に力が入ってしまう。

大きな犬の姿の魔物は、またも侵入してきた人間に対して息を荒げ始めた。再び発光する吐息によりチカチカとシルエットが浮かび上がる。すると、奇妙な囀りのような音がイリヤから聞こえ始めた。

美しいような面白いリズムの音。楽器のような物を使っているのかと思いきや、イリヤは手ぶらのままだ。暗がりに見える魔物が威嚇は止めていないものの、イリヤに注目しているのがわかる。

「……すごいな、ビーストマスターだ」

アルフレートが彼にしては興奮気味に声を漏らした。

「ビースト……マスター？」

聞いたことはあるが書物等でしか馴染みない言葉にわたしは掠れた声になった。アルフレートが隣で頷いているのがわかる。

「私も本物に会うのは初めてだ」

言葉の通じない動物達とも意思を疎通し、命令一つで行動させたりするビーストマスター。完全なる生まれつきの才能で、その原理も全くの謎。一説には人間ともまた違う種族なのではないか、という仮説もあるのだ。アルフレートが初めて見るぐらいの力だ。普通の人なら出会えないことが大半の珍しい力の持ち主ということだろう。

「でも、あんな魔獣みたいのに通用するんすか？」

ヤツキさんが心配そうにアルフレートの顔を見た。それに答えたのはセリスだった。

「イリヤが言うには、アレは元々は動物なんじゃないか、って。乱れてるけど唸り声から何と無く意味が分かるらしいわよ？」

わたしは発光する不気味な息を吐き出す獣を見た。大きさといい見た目といい、普通の動物には見えない。元々って……、魔法か何かで姿を変えられたりしたんだろうか。

「攻撃はしてこないな」

ヘクターがロングソードを構えつつも上体を起こす。

気付くとイリヤはかなり魔物に近づいていた。わたし達も声を出す者がいなくなり、イリヤの不思議な囁きだけが炭鉱内に響き渡る。聞いている内に気持ちのざわつきが消えて行くような音色に、魔物の方も反応したのか発光する吐息が、どんどんと間隔が長くなっているのがわかった。

どのくらい経ったのだろうか。わたしは意味なく手に力が入っていたようで、手のひらに感じた痛みから慌てて手を開く。すると暗がりからイリヤが歩いて向かってくるのが見えた。誰ともつかない大きな溜息。緊張していたのは皆同じだったようだ。イリヤはわたし達に向かって手を振っている。『来い』と言っているようだ。思わずわたしは隣りにいるアルフレートの顔を見た。アルフレートは肩を竦めた後、すたすたと歩き出す。残りのメンバーも少し躊躇した後彼に続いていった。わたしもヘクターに促され彼の上着を掴むとイリヤの方へ恐る恐る足を進める。

「連れて行って欲しい人間がいるそうだ」

イリヤの言葉にわたしはぽかん、となった。

「あいつの寝床にいるそうだから、行ってみよう」

行ってみよう、って……全然意味がわかんないんですけど。

「どういう事？」

セリスが少し苛ついたように聞くとイリヤは頭を掻いた。

「ああ……えっと、あいつはこの先に入り込む奴を追い払う役目な
んだけど、危害を加えたいわけじゃないらしいんだ。それなのに少
し前に来た人間がここで倒れたから連れて行って欲しいらしい。あ
いつがやったわけじゃなくて……あの音にやられたんじゃないかな
？」

「ちゃんと言つてよね、もう」

セリスが口を尖らせるとイリヤは再び頭を掻く。

「こいつ、皆にも話しが通じてると思っちまうんだよなあ」

デビスがからかった。彼にしてみれば普通に話しているのと同じ
感覚なのだからそういうものなのかも。にしてもあの魔物が侵入を
阻んでいるものはどういう場所で、どんな物なのだろう。わたしは
暗がりにいる魔物の方を見て息を飲んだ。ヘクターの上着の袖を引
つ張る。

「……あ」

ヘクターがわたしの指差す先を見て声を漏らした。先程まで首が痛
む程見上げないとならなかった魔物は、一匹の普通的大型犬に姿を
変えていたのだ。

「あっちだつてさ」

イリヤが指差す方向へアルフレートの操る光の精霊が飛んでいく。
かなり広いホール状のこの場所には、随分とこじんまりとしたよう
に見える通路があった。覗いてみると結構きつい坂になっている。
イリヤ、アルフレートが躊躇無しに入って行くのを見て、わたしは
湿っぽい土質から少し迷う。するとヘクターが手を出してきた。ど
うぞ、というような仕草にわたしは彼の手を取る。

「僕も転びそうで怖いっす……」

とヤッキさんが呟くと、イルヴァが軽々とヤッキさんを持ち上げた。
前から思っていたのだがイルヴァってヘクターに対して変な対抗意
識がある気がする……。あわあわとするヤッキさんを見ていると後
ろから声がした。

「ちよつと!」

セリスが怒ったようにデイスに手を出している。デイスは肩を竦めると「自分から言うんじゃない可愛いわねえなあ」と言いながらセリスの手を取った。

皆して足元を気にしながら坂を下りる。

「どさくさに紛れて変な所触るなですう」

イルヴァの妙に芝居がかった声にヤツキさんが更に慌てる。

「ちよつ、誤解ですよ！」

「……うるさいぞ、お前ら」

アルフレートは振り向くと不機嫌そうに睨みつけた。坂はさほど長いものではなかった。また少し開けた場所に出ると、藁のような匂いがする。先程の犬の寝床ということか？ということは普段はあの大きさなのだろうか。大きいサイズではここに入る前に、通路に詰まってしまふ。

何かの植物の乾燥したものが墓座のように敷かれていた。その隅、倒れ伏している二つの人影にわたしは息を飲む。

「ローザ！フロロ！」

わたしが駆け寄ろうとした時、フロロの方はのっそりと起き上がった。

「おー……、皆さんお揃いで」

随分と覇気が無い。暗がりでも良く見えないとしても顔色が悪い。

「無事……じゃないわね」

わたしが言つとフロロは再びゴロリと寝転ぶ。

「参った……、本当に。……何なんだよ、あの騒音」

やっぱり耳をやられてしまったらしい。可愛いふわふわの耳は垂れ下がり、心なしか毛並みも悪いように見えた。セリス達が少し下がって見守る中、わたしはローザを抱き起こす。

「ローザちゃん！」

揺するわたしをアルフレートが静かに止めると、先程も見せた魔力譲渡の呪文を唱えた。光の粒がローザの胸元に吸い込まれていくとうつすらと目を開ける。

「う……」

なんだか妙に乙女チックな仕草で起き上がった。わたし達を見回すとほっとしたように肩を下ろす。

「あたし……意識失ってたのね」

わたしが声を掛けようとした時、フロロが情けない声を上げる。

「起きたんなら俺の耳治してくれよ」

「いきなり、それ？」

ローザが頬をひくつかせた。

「あいつが匿ってたのも、モロ口族がいたからかも知れないな」

イリヤがローザに耳を治療されるフロロを見ながら言った。あいつとは先程の犬の事だろう。

「危害を加える気は無い、っていつでも匿うなんておかしい話だな、思ってたんだ」

モロ口族のような見た目に親近感がある為に助けてくれたのだろう。わたしは通路を見る。入っては来ないみたいだ。

「なんでこんな事になったんだ？」

アルフレートが言うときセリスが割って入る。

「それよりイリヤの話が先よ。あいつ、何物なの？」

わたしはふう、と息をつくとき皆の顔を見回した。

「とりあえずここで話し合いましょう。ここは安全みたいなんだし」

「ここまで来るのは割と単純だったのよ。一本道に近かったし」

ローザが簡易食のケーキをバクバクと食べながら言った。隣りで同じくケーキを頬張るフロロが続く。

「……歩いてたら急に変な音が聞こえ始めて、俺は音のでかさと気味悪さにグロッキーになるし、ローザは途中で会った倒れた冒険者に魔力分けてやったら体調悪くするし。そこでここに来たら倒れちゃってさあ、俺にこのでかい人間運ぶのなんて無理だし。困ってた……あいつがここまで運んでくれた」

「でかいって何よ！失礼ね」

「俺からしたら皆でけーよ！」

争い始めた二人をわたしがぐいつ、と引き離す。アルフレートが顎に手を当て口を開いた。

「音の発生源から近いから、もろにやられたな」

「近いって……じゃあこの近くにあるの？」

セリスが聞くとアルフレートは頷く。

「たぶんな。あの犬が守っている、とやらも音の発生源へ行く道なんじゃないか？」

そう言つてイリヤを見た。イリヤは大勢に一齐に見られたからか、気まずそうに上目遣いをした後、話しだす。

「あいつはこの門番みたいなものなんだってさ。門なんかないじゃないか、って聞いたたら『ここからが本当の始まり。このこと、あちら側を繋ぐものを門と言っているだけだ』って。俺らは髭もじやおじさん探してるだけなんだけど、って言ったら『早々に連れて帰ることを条件に侵入を許そう』だって。フツキさんはこの奥で迷ってるらしい」

「え……！」

ヤツキさんが思わず立ち上がる。セリスがイリヤの頬をつねった。

「なあんでそんな重要な事、すぐに言わないの！」

「いきなり全部話したら混乱すると思ったんだよつ。いてて」

「落ち着け、セリス」

デビビスがイリヤの顔を引っぱり続けるセリスを引きはがす。

「じゃあ、少し休んだら奥に行かなくちゃな」

ヘクターの言葉にデビビスが迷ったように口を開いた。

「そうなんだが、うちは3人とまだ合流出来てないしな……」

あ、とわたしはヘクターの顔を見た。

「……アン-tonは一人のはずだ。あとの二人は会ってないけど」

「え、そうなの？」

セリスは驚くがわたし達の様子に深くは聞き難い、と思ったのか口を閉ざす。

「進むメンバーはローザ、セリス以外。あと戦士が一人残った方がいいか？」

アルフレートの淡々とした口調に、名前を出された二人が噛み付いた。

「ちょっと！」

「なんでよ！」

「燃料切れの魔術師なんていらないうっててるんだ。あんた、ファイアーボール一発で倒れるぐらいの力しか残ってないだろ」

アルフレートの言葉が凶星だったのか、セリスは唇を噛む。

「にしても、言い方ってもんがあるでしょ！」

わたしが言うとセリスが溜息を付いた。

「あんたのその元気が羨ましいっていうより怖いわ……」

「同感」

ローザも頷いている。そんなに消耗激しいのか。

「でも、ここにいても同じじゃないか？」

ヘクターが聞くとフロロが首を振った。

「ここは音が遮断されてるみたいよ。俺ぐらい耳が良いと、今も表じゃ鳴ってるのが聞こえてるんだけどね。……俺だって残ってるよ」

「お前は駄目だ」

アルフレートがきっぱり言うつとフロロは首を竦める。わたしは試しに耳を澄ましてみるが、あの不気味な音は聞こえない。イメージに残る音が聞こえるような錯覚も起こすが、やっぱり聞こえなかった。「大丈夫？イリヤ」

セリスがイリヤに声を掛けるとイリヤはきょとん、と彼女を見返す。「何が？」

「あんた人見知り激しいから」

「だ、大丈夫だよ。もう……」

そう言いながらもイリヤは指摘されたことで意識し始めたのかきよるきよるし始めた。

残るメンバーはローザ、セリス、デビス。『音』の仕業で魔力の消耗が激しい二人と戦士であるデビスが残って、サラ達が来た時に備える。デビスは彼の意思で残ることになったので、ローザとイリヤがパーティーを入れ替わるような形になった。

「大丈夫ですよ、イリヤさんはもうイルヴァのお友達です」

イルヴァに抱きつかれるがイリヤはただ棒立ちになるだけだ。……

人見知りの意味、わかってるのかな、イルヴァ。

「気をつけてね、無理しないで」

ローザとわたしは抱き合って挨拶する。最後の別れのように嫌だったが、彼女の良い匂いがそれを打ち消してくれた。

「もし残りのメンバーが揃うことがあれば、俺達も後を追うから」
デビスがヘクターと握手すると、彼の肩を何度も叩いた。

「大丈夫、その前に連れて帰ってくるよ」

ヘクターが笑顔で答える。

「どうしたの？」

わたしは少し離れた場所ではんやりとするヤツキさんに呼びかけた。

「え、あ、……ちょっと緊張してきちゃったんす」

「大丈夫！平気な時は平気だし、死ぬときは皆死ぬから！」

わたしが笑顔で言うつとヤツキさんは心なしか引きつったように見え

たが「そうっすよね」と呟いた。

「フツキさんを助けられなかったら、ってことばかり考えてたっす……。よく考えれば、自分達の安全だって分かんないっすもんね」言葉とは似合わない顔でえへらえへらと笑うヤツキさん。どうやら吹っ切れてくれたようだ。

「行くぞ」

アルフレートの言葉に皆、静かになる。

「い、く、ぞ」

再び同じ事をフロロに言った。ヘクターの背中に昇りかけていたフロロが大きく舌打ちし、音無く地面に降りる。

「兄ちゃんがビーストマスターなんだって？ 通訳頼むよ」

フロロはイリヤに言うのと静かにわたし達を見守っていた犬を指差した。反応するかのように犬は立ち上がる。オオカミのような見た目だが、よく見ると体がうっすら発光していることに気が付く。やっぱり普通の犬では無いようだ。

イリヤが再び囁りを披露する。口笛のようだが音の種類が微妙に違う。それに犬が答えた。すつ、と歩き出すと先程の坂が急な通路の右隣りあたりに移動する。土壁しか無いというのに立ち止まったまま、何度も鼻を地面につけるように首を下げた。

「あそこだって？」

「……みたいだな」

フロロが指差す先を見てイリヤが頷く。わたしには壁が広がるようにしか見えない光景に戸惑うだけだったが、フロロは素早くそこへ行くと壁に手をつけた。

「おおー、これはこれは」

にやつくフロロの元に皆集まる。フロロの手元を見ると壁に触れる度にそこが少し光りを帯びているように見えた。

「イリユージョンね」

魔力の動きを見たわたしは呟く。たぶん通路が続く道を魔法で作られた幻影で隠しているのだ。この子がやったのだろうか。わたしは

おすわりの状態の犬を見た。答えは無いが違う気がする。魔法が唱えられそうにないから、という単純な理由ではなく、もっと他の何か引つ掛かりをわたしは感じていた。

「そんなじゃ入るよ」

フロロの言葉にわたしが顔を上げると、彼はもう魔法の壁を抜けて姿が見えない。わたしが振り返ると、心配そうなローザ達の顔が並んでいた。

わたしは意を決すると壁に向かって足を踏み出す。少しの浮遊感の後、今度は逆に重力がいつも以上に足に掛かったような感触。目の前の光景は何て事はない、今までと変わらない土で覆われた世界。イリヤの言葉から全くの別世界を想像していたわたしは拍子抜けしてしまった。先に着ていたアルフレートがぼんぼんと光の精霊を出しながら呟く。

「……亜空間に近いような、変なところだな」

亜空間とは世界の狭間のことだ。現世とあの世、現世と妖精界との間を漂う門のようなものらしい。

「じゃあアルフレートには居心地良いんじゃないの？」

かつては亜空間の住民であったとされるエルフである彼に尋ねると、簡単に鼻で笑われてしまう。

「我々が現世に行ってから、何年経っていると思っている？普通にこっちの方が過ごしやすいに決まっている」

まあ、そりゃそうか……。

「ここってさあ、合わせ鏡の世界みたいじゃない？」

フロロがわたしとアルフレートの顔見た。何が？と聞く前にフロロは今入ってきた入口を指差す。

「あそこから入ってきて……」

そう言っている間にもイルヴァが通ってきている。

「あそこは何？」

左隣に指を動かした。フロロの言う意味がいまいち分からず、わたしは首を傾げていたが「あれ？」声を上げた。

「さっきの坂がきつい道に似てない？」

犬の寝床のようになっていた穴蔵を思い出す。フロロとローザが匿われていたところへ続く道によく似ている。あの道も今通って来た幻影の隠し通路の左隣だったんだから……。わたしは自分の右側を振り返る。

「あ」

予想した通り、わたし達が魔獣に対面した時に踏み込んで来た、始めにここに来た時の通りに似た道がぼっかり開いていた。

「反転した世界、鏡の中に踏み込んだような世界じゃなくて『合わせ鏡の世界』、ね。なるほど」

わたしは納得した。

音楽家という人種

「イルヴァ、どうした？」

後ろからヘクターの声がした。振り向くとイルヴァがしゃがみ込んでいないか。

「……お腹空いて動けないんです」

一瞬呆れそうになるが、わたしも空腹でかなり辛い。水はかなり節約しながら来たので水袋に僅かに残っているが、大分前にカミューさんお手製ケーキを食べただけの胃は空っぽを通り過ぎて痛いぐらいだ。普段食いしん坊のイルヴァにはかなり辛いだろう。

アルフレートが懷をまさぐると何か小瓶を取り出す。そしてその中身をわたし達に配り始めた。わたしは手のひらにある小さな黒い粒を見る。

「何、これ？」

「良いから一度噛み砕いて飲み込め」

アルフレートのぶっきらぼうな言葉に少し不安になる。変なものじゃないよね？

「一粒で元気になったりするんすかね？」

ヤツキさんが聞くとアルフレートは首を振った。

「単に満腹になるだけだ」

なあんだ、と思ったが今の状況にはかなり貴重だ。わたしは素直に口に入れた。見た目からしてもものすごく苦かったりするのかな、と思ったが拍子抜けするほど何の味もない。一瞬スーっとしただけだった。

「もう一個欲しいです」

イルヴァの言葉を無視してアルフレートは歩き出す。

「行くぞ」

総勢7人に戻った大人数でそろそろと歩き出す。

「本当に合わせ鏡の世界だったら、同じ道のはずだよね」

イリヤがそう言った時、わたしは何か違和感を感じた。なんでだろう、と周りを見渡した時だった。

次の瞬間、わたしは腕を取られていた。何が起きたか分からないまま体を引つ張られる。顔を上げるとすでに剣を抜いて構えるヘクタ―がわたしの腕を掴んでいた。周りもすでに武器を構えている。その中心にいるのは……、

「何者だ？」

弓矢を引き絞るように光の矢を構えたアルフレートが尋ねる。すると中央にいる影がゆらりと動いた。白髪まじりの茶色い髪の男。黒いローブを着ているように見えるが、実際は暗くてよく見えない。霧が掛かるように影が男を取り巻いているのだ。

「もうバレてしまったのか、つまらないな」

男はそう言うのにやり、と笑った。何時から……いたのだろう。そしてわたし達に紛れ込んでどうするつもりだったのだろう。色々聞きたいが、素直に喋りそうな相手にも見えない。なぜなら男に纏わり付く影は、明らかに不自然なものなのだから。

アルフレートとわたしの作り出した明かりは、わたし達を照らすのに十分な数飛んでいる。現に男を挟んで反対側にいるイリヤとヤツキさんの姿はきちんと見えているのだ。男はかろうじて茶の上着が見えるだけで、胸元から下は殆ど見えない。わたしは不鮮明なビジョンに目を細めた。

男は何処を見ているのか捉らえにくい目で周りを見ると、大声で笑い出す。背中がヒンヤリと冷たくなるのを感じた。狂人か、いや生き物の気配がしない。そしてそれは高レベルなアンデットであることを示している。死の世界から理を捻曲げて現世へと舞い戻るには、理性などの生き物らしさが失われるのが普通だからだ。この炭鉱に入ってから何度か会ったグールというモンスターが代表格で、彼らも元は人間だが喋ることすら出来なくなっている。元は学者、魔導師などかもしれない。しかし生前の姿など関係なく、動く肉塊と化するのだ。目の前にいる生気の無い男、アンデットではないか

もしないがそうだとすれば……。

「おらっ！」

最初に動いたのはフロロだった。彼の細身のナイフが男に向かって飛んでいく。キンッ！という弦が跳ねるような音を立てて、ナイフが男の直前で弾かれる。見えないシールドで守られていたようで、体に掠ることなくナイフは地面に落ちた。

間を置かずにイルヴァが飛んだ。男の頭上からウォーハンマーを振り下ろす。どがあ！と景気よくハンマーがえぐり取ったのは、男の体ではなく土の地面だった。

「体が透けてますう！」

「アンデットよ！」

わたしは叫ぶとヘクターのロングソードに向けて魔力付加の呪文を唱え始めた。が、

「攻撃は侵入者とみなす！」

男の顔が一瞬にして変わる。瞳は黒く変わり瞳孔が見えない。髪の毛は逆立ち、大きく歪んで開いた口にわたしは小さく悲鳴を上げた。耳に不快な笑い声が響き、鼓膜を嫌でも震わせる。フロロが耳を抑えるのを見た時、アルフレートが光の矢を飛ばした。しかし、男にそれは届くことはなかった。一陣の風と共に、男は消えてしまったのだ。ジジッ！と油が爆ぜるような音を立てて、アルフレートの放った光の矢が壁に刺さり、消えた。

「な、何だよ、あいつ」

イリヤが倒れ込むフロロを起こしながら呟く。

「……知るか」

アルフレートの不機嫌そうな声。

「侵入者、って言ってたな」

ヘクターの言葉にわたしは頷く。

「多分、……ここは彼の世界なのかも知れない」

アルフレートが言った違和感。ここは通常の世界とは少し違うものなのかもしれない。ヤッキさんが慌て出す。

「こ、こんな所にフツキ先輩はいるんすか。無事なんでしょうか…」
「…」
ヤツキさんの言葉には、誰も答えられなかった。

「耳が痛い！」

騒ぐフロロの耳をわたしは治癒の呪文を唱えながら抑える。無いよりかマシ、というレベルのわたしの呪文でも、フロロは「はあ…」と安堵の息をついた。

「あの『音』と同じ種類のダメージがあつたみたいだな」

アルフレートが耳を摩りつつ顔をしかめている。彼にも辛かったのだろうか。

「じゃああいつの笑い声が炭鉱に響いてたつて事？」

わたしは不気味な光景に身震いした。夜な夜なバンダレンの町に響く音も、あの笑い声だとしたら……。なんと気味の悪い話しか。わたしは恐さと、ほんの少しの興味深さに手を握り締める。

「そうだとしたら、あいつ何物なんだ？」

イリヤが眉間に皺寄せると、

「だから知らんと言ってるだろ。この中に答えられる奴がいるのか？ 頭が悪いのか？」

アルフレートがぼつさりと彼を切り捨て、イリヤは見るからに沈み込む。

「アールフレート」

わたしが睨むとアルフレートは肩を竦めた。

「本当のことなのに」

更に余計な一言を言うものだ。

「とにかく、今の奴を追い掛けないと」

ヘクターの言葉に全員が頷いた。

「僕はあいつが音の犯人で間違いないと思います」

ヤツキさんがぬかるむ土を踏み締めながら呟いた。炭鉱内の道は、やはりどこか見覚えのある曲がり方だ。同じ様に見えるだけかもしれないが。

「……根拠は？」

わたしは同意ながらも彼の意見を探ねる。

「音がとても似てるんす。きっと……この炭鉱が楽器のような役割をして声を増幅させて……、あの唸りのような音の波を作っていたんじゃないかと」

ヤツキさんの発言に「そういえばこの人、音楽家だったな」と思ったのはわたしだけでは無いに違いない。

「じゃあ、あれがタージオ山の呪いってことでいいのかしら」

わたしが言っているとイリヤが頷いた。

「それこそフツキさんを見付ければわかるよ。彼は絶対何か掴んでいた」

「でもそれだと、フツキさんはどうにかする方法までは掴んでなかったことになるな。音が止んでないんだから」

ヘクターが言っているとフロロが首を振る。

「それこそ俺らの役目でしょ」

「我々がどうにか出来ることなら、な」

アルフレートの言葉にわたしは考える。どうにか……、っていうとあのアンデットを成仏させるということか。だったらローザやサラのようなプリーストを連れて来た方が良かった気がする。でも無理もさせられないし……、サラに至っては何処にいるのかもわかっていない。上手いかわからないものだな、とわたしは溜息をついた。

「あつやばいよっ！」

フロロが怒鳴るような声を上げ、わたしはびくんとする。すると足元が発光しているのに気が付いた。

こ、これは……。

と思った時にはもう遅い。見覚えのある魔法陣の紋様。徐々に霞ん

でいく周りの景色。意識を失うような感覚と身体の軋み。テレポ
トのトラップだ。

また一人になるの！？

わたしは声にならない悲鳴をあげた。

その時、全員が呼んだのかもしれない。誰も呼ばなかったのかもしれない。ただ、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた気がした。

「うつ、く……」

背中強い衝撃が走り、わたしは呻いた。更に腹部にも何か倒れ込んでくる。何が？と目を開けても何も見えない。素早く『ライト』の呪文を唱えると右手に光が集まった。真っ暗な世界に落ちたのは一瞬だったというのに、光が眩しい。薄目を開けると目の前に見知ったグレイの瞳がある。二人とも目を見開いた。

「うわっ！ごめん！」

ヘクターがわたしに覆いかぶさるようにあつた体を慌てて起こす。

「な、なんで……」

わたしは言葉が続かなくて口をぱくぱくさせるだけの魚と化した。だって……わたしがテレポートのトラップに引つかかった時、彼は確実に少し離れた場所にいたはずだ。一瞬、移動したのが気のせいだったのか、と周りを見渡すが他のメンバーの姿は無い。

「……追って、来たのね……？」

わたしは擦れた声で尋ねる。同じタイミングで同じ罠にかかったからといって、同じ場所に移動するとは考え難い。しかし現に彼はここにいるのだ。

「……ごめん」

怒られた訳でもないのにヘクターは頭を下げる。流石に自分の行動がマズいと感じたのか。

「……なんか今回謝ってばっかだな、俺」

しょんぼりとするヘクターにわたしは思わず吹き出しそうになった。でも、やっぱり嬉しいけど、……嬉しくない気もする。複雑な思いにわたしは頬を掻いた。二人とも同じ場所に移動したのは、奇跡という言葉も陳腐に感じるような確立だったように思う。あのトラップについてヘクターに詳しく説明をしておくべきだったのかもしれない。テレポート系の魔法は基本的に何処に出るか分からないのだ。

今もどのくらいの高さからか暗くてわからないが、しこたま背中を打ち付けるはめになったのだし。ふとヘクターがおでこの辺りを手で押さえるような仕種をしたのが気になった。

「どうしたの？」

彼にそんな癖はなかったと知っているわたしは尋ねる。

「いや、ちよつと頭が痛いような気がただけだよ」

テレポートの副作用かもしれない。こういう現象も起きてしまうのが怖いところだ。わたしは心配になると同時に、自分の身体の頑丈さが恐ろしくなる。疲労は限界まできいても元気っていったら元気だし……。

「そこ、座つて？」

わたしは壁沿いの岩場を指差した。ヘクターは少しの間を置いた後、「いや、大丈夫だよ」

そう言つて手を振る。わたしは息を吸い込むと彼の手を取り引つ張った。

「大丈夫なのに」

苦笑するヘクターを岩場に座らせるとわたしは治癒の呪文を唱え始める。フロロにしてあげたように痛みが和らぐぐらいにはなるかもしれない。ヘクターのおでこを押さえながら手の平に集中していると嫌でも彼の顔が目に入る。

な、なんか触りたかったからとか思われないかなあ……。

不要な心配だと思いつつも顔が赤くなってくる。いや、実際幸せな気分ではあるんだけど。目をつぶる顔も男前だぜ、こんちくしょう。手のひらに感じる彼の体温に気が緩むとにやけてしまいそうだ。

「はあ、気持ちいいな」

ヘクターの呟きに我に返る。無駄では無かったようだ。ほっとするとヘクターがわたしの手を取った。

「ありがとう」

「もついいの？」

わたしの質問に何度か頷く。こっちはもうちよつとやっていたかつ

た……とは言わないようにする。

さて、とわたしは周りを見渡した。まずはここが何処なのか確認しなくちゃいけない。見る限り同じ炭鉱内に留まっているようだが……。あたりの湿った土質を見て思う。同じ様に罠にかかったアントンの件もあることだしタージオ山の内部にいて考えていいだろう。そういう罠が可能かどうか、わたしにはテレポートの仕組み自体が分からないのだからしょうがない。

「取り敢えず歩き回ってみるか」

ヘクターの言葉にわたしが頷いた時だった。

「ぶあつくしよっ！……へー」

人のくしゃみと思われる謎の音が響き渡った。わたしとヘクターは思わず顔を見合わせる。野太い声は中年男性のものだ。二人のものではない。暗がりには動く何かが目に入った時、わたしは叫んでいた。「フツキさん！」

もじやもじやのヒゲがよく見えるように仰向けになっている男性は、バンダレンに入る前に一度出会っているだけだがフツキさんに間違いなかった。わたし達はフツキさんに駆け寄った。ぼんやりとわたし達を見る目がある。怪我をしているとか意識が朦朧としているような様子には見えない。ただ面倒臭そうにフツキさんはごろりとわたし達の方に体勢を変えた。

「誰だ？」

一瞬面食らうが、一度しか顔を合わせていない上に集団の中にいたのでは覚えていないのかもしれない。ヘクターが泥だらけのフツキさんを起こすが、何ともやる気のなさそうな顔でいる。

「わたし達、プラティニ学園の者です」

そう告げるとようやく少しかだけ瞳が動く。

「ああ、あの時の……」

「どうしました？怪我は？」

わたしが聞いても面倒臭そうに手を振るだけだ。

「どこも何とも無い」

「じゃあお腹は？水は取ってました？」

わたしが言い終える前にフツキさんは肩掛け鞆から何か取り出す。ぴつ、とランプのように指で広げたのは数枚の干し肉。更に反対の手で何かを指差した。わたし達の左手にある岩場の影。

「湧き水だ」

ヘクターが感嘆の声を上げる。よく耳を澄ますと水の音がするのだ。「食べる？」

フツキさんが干し肉を押し付けてくるが、先程のアルフレートのアイテムでお腹が膨れていたわたしは丁重にお断りした。代わりに湧き水には飛びつく。滝のように……とはいかないが、岩の間から漏れる水が窪みに溜まっていた。いや、水が流れるから岩が窪んでいるのだろうが。

「冷たいっ。飲めるんですか？」

わたしは笑顔を押さえられない。フツキさんはまた黙って頷いている。わたしとヘクターは暫く交代しながら水を飲み、顔を洗った。

「ふいー……、生き返る」

「助かったなあ」

わたしとヘクターがそれぞれ呟くのをフツキさんはじつと見ている。だがその目はぼんやりとしたままだ。心配になりつつあえて元気な声を掛ける。

「さあ、フツキさん帰りましょう。わたし達、あなたを探しに来たんですよ」

わたしが言うとフツキさんは少し驚いたように目を見開いた。

「音楽祭のテストで来たんじゃないのか？」

「いや、それが……」

ヘクターはフツキさんが消えてしまっただけからの出来事を簡単に話す。このタージオ山に関する不気味な噂から「砂漠の石」はすでに存在しないということ。聞いていく内にフツキさんはうなだれていった。てっきりこのテストがくだらない茶番だということにがっかりしたのかと思いきや、彼は「そこまで知っているのか……」と呟いたの

だ。

「そついえばあなたの護衛で来た人達が、あなたが『裁きの日が来た』と言っていたのを聞いていたそうです。……何かあったんですか？」

わたしが聞くと鋭い瞳をしばしばさせるフツキさん。

「……あつたといえはあつた。何も無かつたといえは無かつた……。何も無かつたせいで今はやる気が何も無い」

フツキさんの謎めいた言葉にわたし達は顔を見合わせるだけだ。

「座つたらどうだ？あんだ達はもう色々知っているみたいだから、この馬鹿げた祭りを終らせられるかもしれない」

そう言われてわたしとヘクターは少し迷ってから岩場に腰掛けた。

「あれは一昨年のことだったな……」

何やら長くなりそうなフツキさんの話しにわたしは覚悟する。

「ここ数年間、ずっとビョートルトのギターの為に祭に参加してた俺は、同じように二年前も参加してこの山に来ていた。前の年には初めて合格者が出ていたからな。かなり焦りもあったよ」

謎の辞退をした吟遊詩人のことだ。彼だって本当は『合格なんて出来るわけがない』状態だったのだが、奇跡的に未発見の砂漠の石を手に入れたことで初の合格者となったのだ。

「その年は二人組の冒険者を雇っていた。剣士と魔術師。学園の出身とか言ってたな。良い奴らだった」

フツキさんは思い出すように目をつぶる。

「テストが始まって、この山に入った俺達は何度かモンスターに襲われたが、剣士の方が腕の良い奴でよ、得に苦労は無かった。でも

……」

忌ま忌ましい記憶なのかフツキさんは目を開け、首を振った。

「あの声が響いて来たんだ。前年までも山に入ると聞こえてくる声で、不気味だし耳に痛てえがこれといって問題は起きなかったんで歩き続けたんだ。何度目かの声で魔術師が倒れるまではな」

わたしはフツキさんが『声』と断言したことにヘクターの顔を見る。二人で頷いた。

「意識が朦朧としてるのにほっとくわけにもいかねえ。山を出ることにした。剣士の方は謝ってたが、どうせ俺だけ残っても何も出来やしないんだ。早く帰ろう、って元来た道を戻って……さあ出口だ、って時だった」

フツキさんがわたし達の顔を見る。

「出口にいたのは祭の実行委員の奴らだった。知っているか？青い制服の奴らだ」

わたしは頷く。青地に黄色が入った制服はバンダレンで何度も見ている。

「俺は躊躇無く声を掛けた。『棄権する』ってな。確かに焦りはあったが、どうせ何年も挑戦してたんだ。今年駄目なら諦め時かもしれない、そんなこと考えながらな。遠目だが、明らかに委員の奴らの顔がぎよつとしたんだ。次の瞬間、剣士の奴が『走れ！』って叫ぶんだよ。理由はすぐわかった。大岩が出口を塞ごうとしていたんだからな」

フツキさんの拳が力を入れている為か、白くなっていくのがわかる。「意味が分からなかった。どうやって動かしてるんだ？とかどうでもいい事考えながら走ってたな。間一髪、間に合わなかった。目の前で塞がれる出口に怒りも沸いて来やしない。啞然とするだけだ。結局、魔術師が意識失いながら精霊魔法、っていうのか？それで開けてくれた。……二人には悪い事をしたよ。魔術師はトラウマになっちまったらしくて傭兵業を引退。剣士の方も合わせる形で辞めちまって、今は田舎に帰って結婚したそうだ。めでたい話だけど、そうじゃないよな？」

わたしはどう答えて良いものか迷う。冒険者の仕事はそういう危険を負うものだからだ。二人がそこで引退を選んだのはフツキさんのせいではない。でも彼は罪の意識を強く持っているのが分かった。「俺も山を出てからは怒り狂いそうだったからな……。祭の後もしつこく詰め寄ったよ。返ってくる答えは『テストとしての試練の一つ』ばかりだったけどな。じゃあなんで俺らを見てぎよつとしたんだよ。……それから一年、俺は毎日考えていた。なんで奴らが俺らを殺そうとするんだ？不合格にしたいなら二次試験の演奏でどうにでもなる。そこで俺はようやく毎年のテストの後で参加者の減りが異常なことに気が付いたんだ」

「大体半分ぐらいになる、って聞いてきました」
わたしが答えるとフツキさんは頷く。あの武器屋のおじさんもいぶかしんでいた話だ。

「おかしいだろ？いくら貴重な町の宝を賭けたものでも、いくらなんでも異常な危険度だ。危険を喚起する声が上がって試験の変更があってもおかしくない。大体が伝説の剣だとか、武器を賭けたものならわかる。欲しがるのは冒険者、傭兵だ。でもギターなんて欲しがるのは音楽家なんだ。家に籠って練習の日々か、人の多い通りに出て弾き語りするような奴らに力なんて無いんだ」

「確かに……国から中止がかかってもおかしくない話ですよね」
わたしは今更ながら強い矛盾を感じて言った。

「一年考えて、時にはバンダレンまで出向いて話を聞き回って……。思ったより大変な作業だったけどな。気味悪いぐらい口の堅い奴ばかりなんだ、あの町は。……次の年の祭りまでに出た答えがこれだ。『タージオ山に魔力を集めるのが、祭りの真の目的だ』これしか無いと思った」

ヘクターがわたしの腕を掴む。わたしはびっくりして隣りを見た。彼にしては険しい顔つきに見える。フツキさんはそれを見てから話を続けた。

「こんなモンスターだらけの山に突っ込ませるのは、本当は冒険者を集めたいからだ。冒険者には必ず魔術師がいる。彼らの魔力が狙いなんだよ。こういう仕組みが知らねえが、魔力を吸い取られるのは魔法を使える奴だけだからな」

最近になって説かれるようになったことだが、全ての生き物には大小はあっても魔力そのものは保有している、というのがある。じゃあ何故、魔法の使用の不可能が分かれるのかというと、魔力を体から放出する技術の有無なんじゃないか、という話だ。魔法の使用が出来ない人間は体から魔力を放出出来ないのだから、吸い取られることも無い。

「バンダレンの人間はタージオ山を極端に畏れている奴が多い。不気味な唸りが響いてくるからだ、とかの噂も聞いたし、祭りの目的の為に協力している奴も多いのが問題だ。自分達の評判を落としてまでそうする理由はな、……これは町の子供を騙すようにして聞い

た話しなんであんまり大声じゃ言えねえが、『タージオ山に人を集めない、町の人が死んじゃう』んだとよ。これはたぶん唸り声のせいだな。一年に一回、試験と称して冒険者を放り込む。この時は唸り声は山の周辺までしか響かない。だがそうしないとバンダレンまで届くような大きなものに声の大きさが変わるんだ。それで町の中でも魔法の技術を持つてゐる奴が魔力を吸い取られるんだろう」

フッキさんの話しは武器屋のおじさんの話しを肯定している。だが新たな疑問が沸き上がってきた。

「……その呪い、というか力は何者がやっているんです？それを打ち破ろうとする動きは、バンダレンの人達には無いんですか？」

フッキさんに言ってもしょうがない事だが、どうも納得いかない。自分達の町が危機にあっているのに根本から解決しようとは思わないのだろうか。

「それが去年の祭り中に俺が調べたことになるな……。ここまで調べた俺は一人でこの町まで来た。音楽祭に沸く町に来て、祭りには参加せずに、な。エントリーが終って冒険者達が山に移動して……、暫くすると俺は山に踏み込んだ。一時的に実行委員の奴らも撤退するから、警備ががら空きになるんだ。声を聞きたくないからだろう」

わたしは不思議な生物学者、ボンに会ったことを思い出した。彼も『見張りがいない』とか言ってたな。

「どうにかして謎を解きたかった俺はがむしゃらに歩き続けて、モンスターからは逃げ続け、どうにか生き延びて奥に進んだ。そうしたら、変なトラップに引っかかったんだ。足下の魔法陣が光って、瞬間移動したんだろう。『これは終わった』と思いきや、これが良い方に転がった。……今、良い方、と言ったがよく考えると良いとは言えないかもしれねえな。……とにかく俺は全ての疑問が解けたよ。うな気がしたよ。そう思ったのは……」

フッキさんが話しているのをヘクターが突き飛ばす。わたしも立ち上がり後ろへと飛び退いた。

「あはははははは、ばれちゃったのか」

先程の男が現れ、今までわたし達のいた場所に黒い矢が刺さっている。その矢はぱちぱちと花火のような音を出した後、空に消えた。何で出来ているのかなど知りたいとも思わない。

「ファイア・ブレード！」

わたしはヘクターのロングソードに魔法の炎を纏わせる。こうすれば霊体にも効くはず。わたしがフツキさんの方へ走る横でヘクターが男に向かっていった。

「大丈夫！？」

転がっているフツキさんを起こすと次の呪文を唱え始める。男がこちらに向かってこないとは限らない。

「すげえな、あの兄ちゃん」

フツキさんが目をくりくりとさせながら感嘆の声を上げる。見るとヘクターが赤く変わった刀身で男を追い込んでいた。黒い何かは空ではじけているのが男の攻撃だろう。それを華麗に避けながら攻撃を返している。男もやはり魔力付加のされた剣は食らいたくないらしい。しかしヘクターの剣が男の体を捕らえた、と思いきや、ふわりと体を消したりと倒すまでには至らない。わたしが背後から撃つべきなのかもしれないが、そんな器用なことが出来るならとつくにやっている。

「あはあ……」

男が唐突に見せた笑い顔にわたしはぞくりとした。次の瞬間、男の姿が消える。また逃げた！？と思った時、わたしの目の前に現れた顔に心臓が止まりそうになった。

光の無い真つ黒な瞳、土色の皮膚、まるで木の表面のようになった鼻を見て恐怖で固まる。なぜか水の流れる音がよく聞こえた。

「あんだ、美味そうだなあ……」

こういう言葉の意味は一瞬で理解出来てしまう。自分の技術じゃ自慢にもならないが、魔力の大きさには自覚がある。それを『美味そう』と言ったのだ。

「リジア！」

ヘクターの叫びと同時にだった。フツキさんが横からわたしを突き飛ばす。

「危ない！」

わたしは叫んでいた。無意識に出た言葉だったが、フツキさんがわたしを庇ったのかと思ったのだ。急いで振り返る。

振り返った先にあつた光景は、何かを抱えるフツキさんの姿と動きを止めた男の姿。あれは……ギター？

「は……」

力無い笑い声を最後に男の姿は再び掻き消える。今度はどこに現れる？と周りを見渡すが、男が姿を見せることは無かった。

「ふ……」

ヘクターの息をつく声が聞こえる。何となく三人とも姿を確認し合った。

「それ、まさか……」

わたしはフツキさんの抱えるものを指差す。フツキさんはゆっくりと首を振った。

「ビョールの名器じゃねえよ。俺の物だ」

そう言うのと立ち上がり、わたし達の顔を交互に見る。

「さっきの話の続きだ。答えは直接、自分達の目で確かめた方がいいだろう」

フツキさんはぼんぼん、と体の土を払うと炭鉱内を見知っているかのように歩き出した。

魔女っ子、祈りを捧げる

どんどん進んでいくフツキさんの背中をわたし達は追い掛ける。道幅が狭くなってきた妙な形に曲がりくねるようになって来た時、歩く速度はそのままフツキさんが話し出した。

「あんた達が現れるまで、俺の心の中は諦めしか無かった」

それであんな風は無気力だったのか。わたしは後ろから来るヘクタ―と顔を見合わせた。

「自分につかりした気分だった。ここまで調べてきて、結局俺は何も出来なかった。何の為にこの二年、動き回っていたのかわからなくなつた。……でもな」

振り返り、わたしの顔を見るフツキさん。こう言っちゃ失礼だが目付きといい顔の汚れ具合といい、恐いです……。

「さつき、やっぱり何とかしてやらないといけない、と強く思った」
そう言うのと再び早い速度で歩き出す。『何とか』とは……？しかしそれよりもわたしには気になることがあった。

「……フツキさん、道覚えてるんですか？」

疑っている訳ではなく単純に感心してわたしは聞いた。フツキさんは懐から何かをガサガサ言わせながら取り出す。わたしは無言で渡された一枚の紙を見て驚いた。

「炭鉱の地図ね？」

「穴だらけだけどな」

フツキさんはそう言うが少なくともあの魔獣犬のいた部屋から先は埋まっているようだ。これなら帰ることは出来るはずだ。しかしごちゃごちゃと書き込まれていてイマイチ見にくい。わたしは見方をフツキさんに尋ねようと、前を歩く彼に声を掛けようとする。が、先にフツキさんが振り返った。

「着いたぜ」

先を親指を傾け指し示される。妙な所だ。また広い場所に出たのだ

な、ということとは音の反響具合で分かった。

「牢屋だ……」

ヘクターが呟く通り明かりを向けた先に見えたのは鉄格子。随分と古いようで金属なのに光を反射しなくなっている。扉は、開いていた。フツキさんに無言で促されわたし達は中に入る。牢屋、というには広い中を数歩歩いた時、わたしの目にある物が写った。茶色いブーツの先っぽ。きちんと二つ揃っている。ブーツが転がっているにしては不自然な状態で踵部分を地面に付けている。そう、人が履いたまま座り足を伸ばせばこんな状態になるだろう。わたしはごくり、と息を飲むと明かりを先に向けた。

「ひゃうわ!!」

思わず悲鳴を上げるとヘクターの腕にしがみついた。そして恥ずかしさから慌てて手を離す。フツキさんの「忙しい奴だな」という声が聞こえた。

ヘクターがゆつくりとわたしが悲鳴を上げた元凶に近づいて行く。土壁にもたれかかる一人の男性と思われるもの。服装からそう判断しただけで顔はすでにわからない。なぜなら彼には体の肉という肉が残っていないからだ。完全なる白骨と化した姿は神々しささえ感じる。

「あいつの体だ……」

ヘクターがしゃがみ込み軀の服装を見て呟いた。わたしも後ろから覗き込む。茶色のツィードの上着。闇に体を包んだあの男の唯一見えた部分だ。ヘクターが後ろを見るがフツキさんの返事は無い。

「やだ!」

わたしは思わず悲鳴をあげてしまった。ヘクターが男の上着を開け放ったからだ。上着の裏地部分を見てヘクターが息を飲むのがわかる。わたしは黒い裏地に刺繍糸で書かれた文字を見て、思考が止まってしまった。そして鳥肌が立つのがわかる。

緑色の刺繍糸が象るのは『ビョールト』の文字。

「……殺されていたんだ……」

ヘクターが窪んだ頭蓋骨の右側頭部を指でなぞった。

「あ、そこ左ね」

わたしはフツキさん手製の地図を見ながら前を歩く二人に声を掛ける。

「しかし良くこんな地図作れましたねー」

何年も通っているとはいえ今の所間違いの無い出来に感心してしまいフツキさんに言ってみた。

「昔、測量のバイトやってたからな」

フツキさんの答えには音楽家の苦勞が滲んでいる。ヤツキさんといひ音楽家がお金で苦勞するようになったのには共和制に移行した背景があるから複雑な話した。

「デヴィス達が心配してますよ。……ヤツキさんも」

ヘクターが淡々と言った言葉にフツキさんは少しうなだれた様子だ。

「……俺はあいつがこの事に首を突っ込んで欲しく無かったんだ。こんな事になるなら正直に話しておいた方がマシだったな……。三年前の演奏から、あいつがビョートルトのギターに惚れ込んだのは知っていたんだし」

「……仲が悪いわけじゃなかったんですね」

バンドレンの入口での事を思い出しわたしは聞いてみた。

「仲が良い悪いの関係じゃねえのは確かだなあ」

フツキさんはそう言うと言っている。子供っぽい質問だったのかも知れない。ヤツキさんはフツキさんからギターを習ったんだっけ。なら『先輩』というよりは師匠なのかも。

「しかし、あの坊主達にも悪いことしちゃった。まさか捕まるとは思わなかったんだよ。そうか、心配してるかあ」

依頼人がいなくなったら心配するに決まっているじゃないか、と呆れつつもわたしは気になっていたことを尋ねる。

「何やって捕まったんです？言い争いがあった、って目撃もあった

「んですよ？」

フツキさんはぽりぽりと頭を掻いた。

「俺は二年前の事から目を付けられてたのはあるんだ。だからエントリーがすんなり行かないのは分かってた。だが、どうもいちゃもん付けてくるもんで頭来たからよ、『お前らの町の町長が何やってたか知ってるんだぞ！』って言った途端に政治犯扱いされちまって、留置場も通らずにここに放り込まれちまった」

「……町長？」

わたしは眉を寄せた。フツキさんはどう話すべきか迷っているように暫く口を閉ざす。

「……俺が何も出来ずに途方に暮れた原因がそれだな」

「もしかして老衰で亡くなった、高齢の前町長の事ですか？」

ヘクターが聞くとフツキさんは目を大きくする。

「よく知ってたな」

「町でちよつと聞いたんです」

「そう。ビョールトをあんな目に合わせた張本人だよ。年代的に考えて若い頃の話しだろうが……。ビョールトの財産は全て町に返還された、なんて話は聞いたか？」

わたしとヘクターは頷く。

「なのにな、問題のギターだけは町長個人の物になってたんだよ」

「……わかりやすいですね」

わたしは正直な感想を述べた。ビョールトの霊体の姿からして死んだのはそう年を取ってからではない。突然亡くなった天才造形家と彼の最愛の宝を持つ人間。明らかに怪しい状況に当時から疑う人はいたに違いない。だからこそ町長の死は高齢のものにも関わらず『呪いだ』と騒がれたのかもしれない。

「ただ俺はその町長が少し前にぽっくり逝っちまったなんて知らなかったんだよ。……ビョールトの怨みは晴らされてたんだ」

わたしもヘクターも返す言葉を失う。正確に言えば晴らされたわけではない。対象が消えたのだ。幸福な老衰という死でもって。

「どうするんです……?」

言ってからわたしは意味のない質問だったな、と思う。フッキさんはどうしようもないから途方に暮れたのだから。

人間がアンデットとして復活するには二種類の方法がある。一つはネクロマンサーのような呪術師による魔法によるもの。もう一つは死んだ本人が現世に強い想いを残しているもの。怨みがその代表例だ。ビョールトの場合は後者で間違いないと思われるので、その怨みを晴らしてやるのが鎮魂への有効打だったはずなのだ。

「ふう……」

フッキさんが溜息を漏らす。その思いはやはり同じ音楽家からくるのだろうか。

「もうそろそろ合流出来てもい……、あ、いた!」

わたしは角を曲がると共に現れた集団に歓喜の声を上げる。わたしが駆け寄ろうとすると中にいた一人が猛スピードで走り寄ってくるのに気圧され足が止まった。

「イルヴァ!」

飛びついてくる彼女の名前を呼ぶ。ぎゅうぎゅうと抱きしめられ腕が痛い。

「だから言っただろ? リジアの声が微かに聞こえてるから大丈夫だって」

とフロロ。

「もう離しません!」

「わかった! わーかったから!」

わたしがイルヴァに降参のタップをしている横でヤッキさんがフッキさんに飛びついてるのが見えた。

「先輩! 心配したんすよ!」

「バカヤロー! 男に抱き着かれて嬉しいわけねえだろ!」

フッキさんは恥ずかしさからか怒鳴り散らしている。わたしは漸く

解かれたイルヴァからの抱擁に一息つくとフツキさんを紹介した。

「偶然会ったんだけど、問題のフツキさんよ」

わたしの言葉にアルフレートとフロロはフツキさんを見る。

「確かに、ドワーフみたいだなあ」

妙に感心気にアルフレートが呟く。　　というかバンダレンの入口で出会っているのは忘れたのだろうか。

「心配しましたよ」

イリヤがフツキさんに言う　とフツキさんはバツが悪そうに頭を掻いた。

「二人のことも、ね」

イリヤはわたしとヘクターにも苦笑する。

「悪い」

ヘクターから謝罪されイリヤは首を振った。

「あ、そうだ。アルフレート」

わたしが呼ぶとアルフレートは「なんだ？」と観察するように見ていたフツキさんから目を離す。

「強い怨みみたいなものを持ったアンデットの埋葬って、何か知らない？」

「……あいつの事か？」

真顔に戻ったアルフレートにわたしは大きく頷いた。

「一つ聞きておきたい事がある」

フツキさんの話を聞き終えたアルフレートが口を開いた。

「なんだろう？」

「アンデットへの有効な手立ては主に精神面での攻撃、つまり魔法戦になる。要するに私やこの娘でもビョールトを消滅させることは出来るわけだ」

アルフレートはそう言ってわたしを指差す。

「しかし、そういうことをあなたは望んでいるわけじゃないのだから」

う？」

アルフレートの言葉の意味を深く考えるように沈黙した後、フツキさんは頷いた。

「じゃあ答えは一つだ。我々の仲間に司祭がいる。彼らに祈ってもらうんだ」

イリヤが『彼ら』という言葉に反応したのか、

「でもサラは……」

と呟く。

「案外戻ってみたらデイベス達と一緒にいるかもよ？」

わたしが言つと皆頷いた。

「無理矢理消しちゃうんじゃなくて、天国に行つて貰う、ってことっすか？」

「うん、まあそうね」

ヤツキの質問にわたしは曖昧に答える。なぜならアンデットが消滅した後のことなど、本当のところは誰も分からないことだからだ。それこそ神のみぞ知ることだが神聖なる埋葬、こういうものは現世にいるわたし達の為にあるものだと思っている。

わたしが言つた答えでも満足したのかヤツキさんはうんうん、と頷いていた。

ぞろぞろとデイベス達の待つ穴蔵まで戻るとわたしは肩を落とした。

「やっぱり戻ってないかあ」

「帰ってくるなりがっかりすることないじゃない……って、フツキさん!？」

ローザの大声に眠そうな顔をして待っていたデイベス達が立ち上がる。

「見つかったのか!」

デイベスはフツキさんに走り寄ると手を握る。

「心配しました」

「すまねえなあ」

ひとまず座り輪になって話しをすることにした。フツキさんは三度目の語り手になったからか、段々話し方が流暢になっている。ビョールトは前町長に殺されたのではないか、という話しに及ぶとローザとセリスが顔をしかめた。

「……成る程ね、それであたしに何とかして欲しい、と」

ローザは腕を組む。少し考えた後、言い難そうに口を開く。

「やっぱりサラと合流出来てからの方が良いわ。話しに聞く限りじゃ、かなり上位アンデットに成っちゃってるみたいだから、あたし一人じゃ荷が重いと思う」

皆、ローザの言った事に頷きつつも溜息を漏らす。得にデイベス達は未だ揃わないメンバーに心配する気持ちも大きいだろう。

「うちら、絆が薄いんじゃないの?」

セリスがケラケラと笑った。笑えないことを笑えるようにするのが彼女らしい。

「……誰か来たみたいだよ」

フロロが静かに言うと言はつと顔を上げた。暫くすると坂を歩き難そうに踏み進める音がする。固唾を飲んで見守る中、現れた顔に全

員が肩を落とした。

「何だよ、お前ら。そのがっかりした顔は」

こめかみを引き攣らせながら現れたのはアントンだった。傍らにある犬がいる。彼が連れて来たのだろうか。

「やっと見付けたと思ったたら皆で宴会かよ。やってらんねえ……、
ってフツキさん!？」

「煩いわねえ、いいから座んなさいよ」

騒ぐアントンをセリスが引っ張っていく。途中、ヘクターとわたしを見付け顔を伏せた。気まずいらしい。犬はその様子を静かに見守っていた。

「……ねえイリヤ、あの子は何の為にここを守っているの？」

わたしが聞くとイリヤは犬の方へ向いた。イリヤの発する不思議な音に言い合っていたアントンとセリスの口が漸く閉じる。

「……話したくないみたいだ」

「わかった。……無理に聞かなくていいよ」

「あ、待って」

イリヤが手で制してくる。犬が喋り出したとか口を動かしている様子は無いが、イリヤには分かるらしい。会話というよりは心を読むような能力なんだろうか。不思議な力だ。段々とイリヤの顔が真剣なものになっていく。わたし達は静かに見守った。

やがてイリヤがゆっくりと口を開く。

「……彼はビョールトの飼い犬だったんだ」

全員がはっとしたように犬の方を見た。真っ直ぐ前を見る瞳。ぼんやりと光る体。彼も霊体だったということだ。

「ビョールトは狂ってしまったている。その力が暴発しないように、他の人間を直接手にかけないように、ここにいるんだって」

わたしは手を握りしめる。何とも言えない空気になった時、ローザの鼻を嚙る音が聞こえてきた。

「やだわ、あたし、こういう話し苦手なのよね……」

はやっ。号泣するローザに少し気持ちが抑えられるわたし。

「こうなったら絶対、あたしがビョールトさんの魂を救ってあげるわ！」

立ち上がるローザのズボンの裾をフロロが引つ張る。

「だからサラを見付けなきゃしょうがないだろ？どのみちあの二人をほっとく訳にいかないんだし」

「おいおいおいおい！全然話が見えねーぞ！大体なんでお前ら一緒にいるんだよ！」

アントンが再び喚くと、彼の目の前に火柱が上がった。

「ぎゃあ！……あんた過激過ぎるんだよ！」

アントンは煙りをあげる前髪を押さえながらアルフレーションを指差した。

流石に嫌気がさしていたフツキさんの代わりにわたしがこれまでの経緯を話して聞かせる。わたしとしてはアントンなどのけ者のままでいいや、という気持ちが無い訳でもないが、もしかしたらアントンの中で『あくまでも目的は砂漠の石だぜ！』となっている可能性もある。それを話しに引き込むことで曖昧にしてやれ、ということである。ごまかす、とも言う。

わたしの話を聞き終えたアントンはぽん、と膝を打つ。

「ようするにヴェラを連れてくりやいいんだろ？はぐれてなきゃ、サラと一緒にいるはずなんだから」

なんだか分かっているのか分かっているのかよく判らない返事だ。私は眉をしかめる。

「だーかーらー！」

横から怒鳴るセリスをアントンは手で制した。

「分かっているよ。ヴェラをおびき寄せる方法ならあるぜ、って言うてるんだよ」

アントンはニヤリと笑う。なんだか動物のような扱いをされるヴェラに同情しつつも、興味深い話しにわたしは身を乗り出した。

「あいつはな、チャイムの音に敏感なんだよ」

得意げに話し出したアントンに皆の顔が「はあ？」となる。

「良いから聞けよ！ヴェラは学園で授業のチャイムにすぎー敏感なんだよ。あいつ馬鹿だからな」

「『馬鹿みたいに真面目』って言ってやれよ、せめて……」
デビスが呟いた。

「いつも遅れちゃいけない、って気構えだけはいつちよ前なんだよな。俺にもうるせーの」
フロロも乗っかる。

「そうなんだよ、だから効果あると思うぜ」

アントンは自信有り気だが、問題はどやってチャイムの音を二人まで届けるか、じゃないだろうか。

「……で、どうやるんだよ？」

当然の突っ込みをヘクターから受けるとアントンはふい、と横を向く。

「あんだねー……！」

セリスがアントンの耳を引っ張り上げた。呆れる気持ちの中、わたしにある考えが浮かぶ。

「ウインド・ボイス……。ねえ、アルフレート！」

わたしはアルフレートの肩を叩いた。

「バンダレンで祭の実行委員が使ってた精霊魔法！あの声を響かせる魔法で何とかなるんじゃない？」

音楽祭の始まりにわたし達が町の壇上に並ばされた時に係の女性が使っていた魔法だ。わたしのナイスアイデアにアルフレートは顔をしかめる。

「どいつもこいつも他人任せな……」

「ちよっ……、わたしとあいつを一緒にしないでよ！」

アルフレートの嫌そうな顔にわたしはムキになって叫んだ。「あいつってなんだよ！」というアントンの声は無視する。

「こんな屋内で風の精霊のご機嫌取るのは大変なんだぞ？……まあいい、面白い案だ。問題はチャイムの音をどうするかだ」

「少し違う音色でもいいならやるぜ。こっちは弦楽器だがよ」

そう言ったのはフツキさんだった。

「だがな、やるのはヤツキ、お前だ」

「ええっ！ば、僕っすか！？」

慌てるヤツキさんにフツキさんは左手を突き出す。その手の中指は腫れ上がっていた。

「これじゃ弦が押さえられねえ。……どうせ弾きたくてうずうずしてたんだろ？」

フツキさんの真っ直ぐな瞳にヤツキさんの顔が真面目なものに少しずつ変わっていった。

「……同じメロディーを弾いていくだけでいいですかね？」

「充分だ」

アルフレートはそう答えると立ち上がった。わたしはちらりとローザの顔を見る。

「……良い雰囲気だから、止めておきましょう」

わたしの視線の意味が分かったのか、ローザは小声で答える。あのぐらいの傷ならローザは簡単に治せるはずだ。だが、水を差すように二人には黙っていた。

問題は本当にこんなんでヴェラが釣れるのか、ということだった。

暗がりに浮かぶ『ライト』の明かりとアルフレートの精霊語が響く様子は心地好いぐらい美しい。歌うような彼の声に「こういうのは音痴と関係ないのか」と、くだらないことを考えてしまい頭を振った。犬の寢床を出て上までやって来たわたし達。魔物のような姿の犬にびびった場所である。

呪文の詠唱が終わるとアルフレートは隣にいるヤツキさんに合図を送った。ヤツキさんは小さく頷くとギターの弦を弾き始めた。演奏では無いので一本一本を弾いてチャイムの音を模しているだけだが、それが残念に思える程綺麗な音色だ。普段の学園のチャイムは鐘の音だが、こっちに変えればいいのに、と思う。

『二人に届くまでやるので、しつこいぐらいに長く』と予め決めていたのでヤツキさんはかなり集中しているのがわかる。あらやだ、なんだかつこいい？

が、そんなことは必要無かった程早く動きがあった。わたしの後ろの壁がめこつ、という音を立てて隆起する。わたしは慌てて飛びのいた。土が沸騰しているようにぼこぼこ音を立てる。ヤツキさんも思わず演奏を中断し、こちらを見ている。これって……、もしかして『トンネル掘り』の呪文だろうか。今回わたしが何度となく覚えておけばよかった、と思った呪文だ。ぼこん、と鍋の蓋が開くような音を立てて壁に穴が完成した。

「……良かったあ、いたよー」

少々土で汚れた顔を出したのは栗色の髪をした少女サラ。後ろにはヴェラの顔もある。

「良かった……、助かったよー」

そう言うサラとヴェラは抱き合い、土煙りの中おいおいと泣き出した。

「ヴェラを責めないでやってちょうだい。最後に音の場所を探し当たたのはヴェラなんだし」

「何にも言ってねえよ……」

アントンが干し肉を頬張るサラに突っ込こむ。可憐な少女そのものの彼女が干し肉を噛みちぎる姿というのもなかなかシユールなものだ。

「あら、そう？」

サラは無表情のまま口を動かし続ける。……これは遠回しの怒りなのだろうか。そうとも知らずヴェラは夢中で干し肉とわたしの水袋の中身を頬張っている。

「まあそんな事より、どう思う？」

ローザが尋ねるとサラは頷いた。

「……そのビョールトさんの霊体ね？高レベルな知能を保っているのに、無作為な破壊に走っている。明らかにレイス化しているわ。」

「……わたしも神官の端くれ、放っておけないわね」

「レイス？」

後ろから尋ねてきたヘクターにわたしは答える。

「普段『悪霊』なんて呼ばれ方するのはゴースト、所謂お化けつてやつね。それよりも内面からデーモンに食われつつあって、破壊力が強まっているのが……、要するにたち悪いのが『レイス』つてやつよ」

わたしの大雑把な説明に神官職の二人は眉をひそめるが、ここで講義を開いてもしょうがない。次の話題に移った。

「取り敢えず儀式用の魔法陣作らなきゃ」

サラが言々とセリスが間に入ってきた。

「指示出して貰えれば私達でやるから、二人は少しでも休んだ方が良いんじゃない？」

魔法陣を描くのにも微力ながら魔力を消費する。今は極力、消耗を抑えるべきかもしれない。と、セリス達の視線がわたしに注がれているのに気が付いた。

「……やっぱわたし？」

「だって一番元気なんだもの」

ローザは肩を竦める。わたしだって肉体的にはボロボロなんですけど。

「私だってやるわよ。……そこで関係無い、って顔してるエルフさんもね」

セリスはアルフレートを指差した。

「出来たよー……」

憔悴しきつたわたし、セリス、アルフレートは神官様を呼びに行く。最後の最後で腰を屈めながら巨大魔法陣の作成という地獄が待っていたとは。こういう時、どういう態度でいるかで戦士達の性格がよく分かる、と済まなそうな顔のヘクターとイリヤを見て思う。

「ご苦労様」

妙に貫禄のある様子で現れたサラは仮眠を取ったせいか肌がつつ、としたものに戻っていた。

ローザとサラは二人で打ち合わせを始める。話しが専門的で解り難くなってきたところでわたしは漸く腰を下ろす。

「お疲れ様。これからどうするの？」

ヘクターが隣に来て聞いてきた。

「後は二人に任せて、わたし達はお祈りしてれば大丈夫。そういう『想う』力も反映されるから。……問題はどうかやってビョールトをここに連れてくるか、よね」

「それは彼がやるよ」

そう言ったのはイリヤだった。わたしはイリヤの傍らにいるビョールトの飼い犬であった彼を見る。

「……そう」

最後まであなたがやるんだね。わたしは初めて頭を撫でた。ふわふわとした毛が指に絡む。それは不思議と温かった。

ローザとサラの神聖魔法を唱える声が響く。威厳を感じる朗々たる声の合唱。

「こういうのって異教徒同士でも良いんだ？もっといがみ合ってるもんだと思ってた」

フロロが感心したように呟く。

「神殿なんかでも積極的にやるみたいよ、異教徒交流みたいに。まあ牽制の意味が強いでしょうけど」

セリスの言葉にデイビスが「面倒くせえ世界だな」と正直な感想を漏らした。

ローザが片手を上げた。合図だ。名前を聞きそびれてしまった彼が魔法陣の真ん中で遠吠えを始める。ここが炭鉱内だと忘れてしまう、空へ昇るような声。わたしに彼の感情は読めないが、この時を待っていたんじゃないだろうか。

ヘクターがロングソードに手を掛ける。わたしはそれを手で制した。ビョールトが現れたのだ。空間が歪む突風のような音がした。黒い霧を纏った姿は少し宙に浮いている。黙って飼犬に近くと頭を撫でた。

「不思議な光景だ」

ビョールトはそう呟く。

「久方振りに『表』に出てみれば、お前が人間と一緒にいるとは」
そう言うのと口元が大きく孤を描いた。

「……フレデリクはどこだ？」

彼の言葉に急激に込められた憎悪の色。その瞬間、魔法陣が光を帯びた。生前に魔術の心得が無いからだろうか。力無く窪んだ目で魔法陣を眺めるビョールト。その意味はまだ理解していないように見える。わたしは祈りのポーズを取る。彼はもうすぐ消えてしまうのだ。そう思うとせずにはいられなかった。ローザとサラの浄化の呪文が再び始まる。その声が徐々に大きなものになっていく。

始めはぼんやりとした顔のままだったビョールトが見る見る内に怒りの形相へ変わっていった。いや、怒りではなく苦痛に歪んでいるのかもしれない。いつの間にかわたしの腕を取っていたイルヴァの手に力がこもる。

「嫌だ！また殺されるのか!？」

ビョールトの悲鳴に神官二人の声が一瞬止まった。が、すぐに再開

する。ビョールトの悲鳴は終わらなかった。

その悲痛さにわたしは怒りのような感情が沸き上がる。殺された人の悲鳴は、終わることはないのだ。事前に『負の感情は込めないように』とローザから言われていたにも関わらず、わたしは気持ちが押さえられなかった。

生きている間の喜び、この世への希望、明日の天気を気にする時間も夕餉への楽しみも来年の自分を想像することも奪われた一人の男。わたしは額に汗が滲み出る。

次第に自分の中で『悔しい』という思いが芽生えたことには、つとめる。これは……、レイスの能力だ。悲鳴によってこちらの感情を乱している。慌てて顔を上げると、ローザとサラも酷い汗だ。目をつぶり、祈りを続けてはいるものの明らかに動揺していた。どうする？ 今からでも魔法でビョールトを撃つべきか。ローザ達の消耗にわたしは焦る。アルフレートも同じ事を考えていたようで彼の方は既に何かを唱え始めていた。

そこに聴こえてきたのはギターの音色だった。音の方向を見遣ると座り込みギターを抱えるヤツキさんがいる。彼はただ静かに演奏を続けている。普段の慌ただしい性格など微塵も感じない様子にわたしは見入っていた。

これはレクイエムだ。音楽の教養は乏しいわたしにもわかる。死者へ捧げる鎮魂歌。穏やかに眠りにつくことを促す祈りの歌。教会などで誰もが一度は聞いたことのあるメロデー。

いつの間にかビョールトの悲鳴が消えていることに気が付いた。ビョールトの顔は驚いているようにも見える。戸惑っているようにも見える。ただ、彼を取り巻く黒い霧が徐々に薄くなっていくのははっきりと分かった。足元を見ると茶色のブーツが見える。わたしはあの白骨姿の彼を思い出し、再び祈りを捧げた。

ここにいるべきじゃない。あなたはもう休んでいいの。

魔法陣が今までに無い強い光を放つ。わたしは思わず目をつぶり、顔を伏せた。風が唸る。その間もヤツキさんの演奏が止まることは

無かった。

漸く視界が元の明るさに戻りわたしは目を開け前を見る。

「……消えてます」

イルヴァが魔法陣の中心を指差した。わたしは頷く。

「漸く、眠りにつけたのよ」

わたしはそう言うと言ッキさんを見た。ギターから手を放し、言ッキさんは天井を仰ぎ見ている。隣にいる言ッキさんは腕を組み目をつぶったままだった。

「はあ、終わったか……」

デビスが大きく息をつく。そう、わたし達も漸く眠れるのだ。その前にここを出て、宿に帰り布団に足を伸ばす作業がいるわけだが。

「あー、足痛い」

「そりや皆同じ!」

ばやくわたしの肩をローザが叩く。

「もうすぐ出られるはずだから頑張れ」

先頭を歩くフロロが言ッキさん手製の地図を眺めながら声を上げた。隣にはヴェラが付いている。肩の力の入り具合を見るとフロロを手本にしようと必死なんだろうが今はあまり意味が無い気がする。

「でも楽しかったわよ、いつもと違うメンバーで」

セリスはあくまでも明るい。彼女だって疲れているはずなのに。

「これでビョールトから『砂漠の石』のプレゼントがあつたりしたら最高だったのになー」

イリヤの言葉に全員が凍る。

「あ、れ?」

イリヤが焦りの声を漏らした。わたしはそーっと振り返る。顔を強張らせ、眉間に皺寄せるアントンがいた。

「……俺は戻る」

「えええええ!」

セリスが悲鳴をあげる。

「馬鹿言っな、俺だつて帰るんだぞ」

フッキさんが言つとヤツキさんも続ける。

「そ、そうっすよ、ギターなんてもういいんです!」

え、そうなの? わたしがヤツキさんを見ると、彼は胸の部分を押いた。

「大事なのはここです。楽器じゃない、つて分かりましたから!」
悟りを開けたようで良かったが、なぜか感動出来ないのは普段のヤツキさんにもどってしまったからか。

皆が騒ぐ中、それでも後ろを向いたアントンの腕を取ったのは意外な人だった。ヘクターだ。彼は無言でアントンの腕を引っ張る。アントンの顔が強張ったのは怒りより戸惑いのせいに見えた。

「……ちっ」

大きく舌打ちするとアントンはフロロ達より前に出る。

「迷うなよー」

アルフレートが大股で歩く彼に声を掛けた。

「だから強い恨みがあつたからって、レイスなんてほしい生まれ
ないわけ」

風呂上がりのピンク色に頬を染めたローザがはつきりと言った。

「そ、それって……」

ベッドから身を乗り出しわたしは食いつく。

「そう、人為的な何かが動いたとしか言えないのよね」

ローザが話す隣で布団から顔を出しサラも頷いている。

「元々『ゴースト』というものがこの世に強い思念を残した魂が昇
化出来ずにさ迷う霊体のことなの。一般的にレイスというとゴース
トのパワーアップ版みたいな扱いされてるけど、レイスって霊体の
デーモン化のことなのよね」

「あともう一つが、ビョールトは魔力を集めてたわけでしょ？元にな
った人間が前のクエストで会った賢者ウォンみたいな、力に飢え
た魔法使いとかならわかるけど、ビョールトは職人さんだったわけ
だしねえ」

ローザの言ったことは言われてみれば気になる。なぜ他人の魔力を
吸い取っていたのだろうか。それがどこに消えたのか、確かに謎だ。
「ふうん……、どうでもいいけど、こ難しい話しになった途端にこ
の子寝ちゃったわよ」

セリスが濡れた髪をタオルで押さえながらイルヴアのベッドを指差
した。

「いつものことだから気にしないで。まあ、畑違いの話しだからし
ようがないんじゃない？」

わたしが言つとヴェラが「私は聞いてますよ！」とムキになる。

さて、何故こんなメンバーかというとサラ達がわたし達と同じ宿に
移るというので男女別に部屋分けすることになったのだ。隣の部屋
から『おおお！』という歓声が聞こえてきた。あちらはあちらで盛

り上がっているらしい。

「うるさいぞー」

セリスが壁を叩いた。そしてわたし達の方へと向き直る。

「……でもさ、あの二人本当に良かったのかしらね？」

「いいんじゃない？だって『テスト』をクリア出来なかったのは事実なんだし」

わたしはヤッキさん、フッキさんの顔を思い浮かべる。タージオ山からバンダレンの町に帰り、まず向かったのは実行委員への報告だった。運営支部のテントで二人が言ったのは『リタイアします』という言葉だけ。フッキさんが登場しただけで仰天していたのは、すかつとしたが。

「そのうちタージオ山の呪いなんて消えた、っていうのに気が付くだろうし、このお祭りの内容も変わるわよ」

ローザが言ったことにわたしも頷いた。今度からはきちんとした音楽のテストに変わるかもしれない。そうしたらまた二人も頑張って欲しい。

「リジア達のリーダーさん、かつこいいよねー」

サラが眠気でぼんやりとした顔で言った言葉にわたしは焦る。

「そ、そう？」

「私、無理。ああいういじめてもリアクション薄そうな人やだ」

セリスがさりとて言い、わたしとローザの頬が引き攣った。……まあ人の好みにとにかく言いたくないけど。

「……ダメだ、眠い」

サラが目を擦る。

「寝なさいよ」

ローザが言つと「勿体ない……」という謎の言葉を残し、サラは寝息に変わった。

「あー、多分半日以上寝ちゃうと思うわ」

セリスが布団を被る。わたしも同感だ。わたしは足を伸ばすとあつという間に眠りの世界に落ちていった。

何だかどたどとした音に徐々に頭が覚醒していく。

「てーへんだ、てーへんだー！」

聞き覚えのある声にわたしは不機嫌顔のまま上半身を起こした。

「てーへんだー！てーへん……っ！」

「うるさいっ」

部屋の中を走り回るフロロの首根っこを掴まえると、みんなもモソモソと起き出す。

「まったく、何考えてるのよ……」

「ふ、フロロさん！何考えてるんですか、女の子の部屋ですよ！」

ヴェラとわたしの怒る理由は少しずれていた。フロロなら別にいいか、と思ってしまうのは仲間だからだろうか。

「大変なんだよー！」

フロロは諦めずにベッドの上を飛び跳ねる。

「だから何がっ!？」

ローザが怒鳴る。わたしは『初めて聞くのに、だから、は変だろう』と眠い頭でぼんやり考えていた。

「ギター、無くなっちゃったんだってさ！ビョールトのギター、祭の核だよ！町中大騒ぎだよー！」

『ええ!』

全員が布団から跳ね起きる。大した時間は経っていないような感覚だったが、窓から射し込む光からしてもう日差しがかなり強い。わたし達は無言で顔を見合わせた。

「……ビョールトさんが持つて行ったんですかねえー」

珍しく起き出したらしいイルヴァが目を擦りながら呟いた。わたしは妙に納得してしまう。だと良いな、と思ったのかもしれない。

「それよりチビちゃん、腰に乗ってくれない？あなたの重さ、ちょうど良さそう」

セリスが俯せになりながら手招きした。

「それより、って何だよ！」

フロロが皆の反応に満足いかないのか怒り出す。

「おい」

いつの間にか部屋の入口に立っていたのはアルフレート。悪びれる様子など微塵も無く、腕を組み仁王立ちしている。

「……ちよつとお、あんた達の仲間、マナー悪すぎじゃない？」

セリスの言葉には言い返せなかった。何を考えているんだ、こいつらは……。

「何か食べに行かないか？奢ってやるぞ」

とつても珍しい彼の言葉に、全員が飛び起きた。

朝食としては多過ぎる量だが時間としては昼過ぎなんだからいいかと大量の御馳走を前にわたしは手を合わせる。

「今、実行委員の奴らが駆けずり回ってるよ。『何としても犯人を捕まえる』ってさ。皆の怒りを架空の犯人にすり替えようと必死だよ」

フロロが羊のソーセージにかぶりつきながら楽しそうに笑った。

「そりゃあ必死でしょうよ、まだ帰ってないエントリー者もいるみたいだし」

ローザがサラダを取り分けて皆に配る。フッキさんがそれを受け取りながらニヤリと笑った。

「ただでさえ後ろめたいところのある奴らだからな。その上、俺みたいのが帰ってくるし」

その言葉にある通り後ろめたさからなのか、彼らはフッキさんを再び捕まえようという動きは見せていない。

「指も綺麗に治って良かったっすよね。帰ったらまた、教室にも参加しましょう！」

ヤッキさんがにこにこはしゃぎ出した。

「それよりさ、サラの話の方が気になるんだけど」

イリヤがパエリアに息を吹き掛けながらサラを見る。

「誰かがビョートルトをレイスに変えたんじゃないか、って話しか？」
デビスが言うサラは首を振った。

「あくまでも可能性がある、って話しよ。本当のところは分からない」

「あたし達じゃ調べようもないわよ」

ローザも頷いている。

「なんにせよ」

セリスがわたしを見た。

「これから協力し合うことになるかもね、私達」

アントンが露骨に嫌な顔をした。ヤツキさんはやっぱりはしゃいでいる。

「学園にも報告しますよ！最高の人達でした、って！」

「俺も一緒にいる時間は短かったけどよ、良い報告させてもらっぜ」
フツキさんも笑顔でお酒の入ったジョッキグラスを持ち上げた。

「騒ぎの中、颯爽と消えるっていうのも気分いいわね」

ローザが窓の外を眺めながら言ってきた。小さくなりつつあるのはバンダレンの町並み。帰りの馬車は貸し切りの小型車だ。ヤツキさんにフツキさん、わたし達メンバーとサラ達メンバーの総勢14人ともなると少し狭いかな？

「……前町長の名前、フレデリクだった。フレデリク・バーン」

ヘクターが小声でわたしに伝える。わたしはわざわざ武器屋のおじさんまで聞きに行ってくれたヘクターにお礼を言った。

ヤツキさんがフツキさんのギターを借りて演奏してくれる。弾けるような明るい曲、ドキドキするような激しい曲。色々弾けるヤツキさんに素直に感心してしまう。「それ聴いたことある！」などと言って盛り上がる車内。

「ちったあマシな演奏するようになったじゃねえか」

フツキさんに言われてヤツキさんも嬉しそうだ。もしかしたらビョートルトのギターを欲しがっていたことも、フツキさんを追い掛ける

気持ちからだったのかもしれない。

「アルフレート太っ腹だな。帰りの馬車代まで出してくれるなんて」
ヘクターが隣のアルフレートを見る。

「臨時収入があったからな」

ふふん、と笑うアルフレートにわたしは何だか嫌な予感がする。

「何なに？臨時収入って」

セリスがワクワクとした様子で尋ねた。それに自信満々でアルフレートは答える。

「なに、音楽祭の実行委員に掛け寄ったんだ。ビョールの鎮魂なんて奴らにとつちや嬉しい事だが口外して欲しくないだろうからな」
ローザが顔を引き攣らせた。

「……それってあたしとサラのやったことじゃない」

「嫌な言い方する奴だな、我々みんなが頑張った、で良いじゃないか」

アルフレートが肩を竦めるとローザが更に言い返す。

「それはこっちの台詞よ！……ま、まさかお金貰って終わりじゃないわよね」

お金貰って交渉成立、では買収されたとも言えるんじゃないだろうか。静まり返る車内。非常に気まずい。

「それだけじゃ満足出来ないからなあ、もう一つ交渉した」

「何を？」

わたしが食いつくとアルフレートは思い出すように天井を仰いだ。

「始めは砂漠の石でも頂こうかと思っただが、ギターも消えてそれだけは勘弁してくれ、って空気だったもんだから情報と交換したんだ。こっちも証拠なんて無いから弱い、っていうのもあったしな」
「だからそれは何だよ！」

アントンが掴みかかる勢いで聞くがアルフレートは涼しい顔のままだ。

「歌の歌い方だよ」

「はあ？」

皆の顔が「？」で埋まる。

「音楽の都だからな。何とか出来るんじゃないかと色々聞いてきた」
「歌い方、って要するに……」

わたしは掠れた声を上げた。アルフレートの音痴を治す方法、というわけ？……そんなもので対価になるのか！？今回の旅は！

はあ、と既に諦めムードに変わるわたし達の中、アントンは一人赤い顔をしている。

「試しに聴いてみるか？」

アルフレートはそう言うなり、高らかに歌いだした。

「な、何これっ」

セリスが小さく悲鳴を上げる。フロロは耳を押さえ、わたしも耳に指を突っ込んだ。馬車が揺れる。馬が混乱しているのだ。窓が割れるんじゃないかと思う不協和音。背中がゾワゾワする感じはタージ才山で聞いたあの声以上かもしれない。

暫くの地獄の後、アルフレートはふう、と息をつく。

「……どうだ？」

答えはない。答えられる元気がある者がいないのだ。ぐったりとする輪の中、

「……ぜ、絶対お前らと協力なんてし合わないからなー！」

アントンが立ち上がり、馬車内に怒声を響き渡らせた。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079q/>

タダシイ冒険の仕方3

2011年2月27日17時57分発行